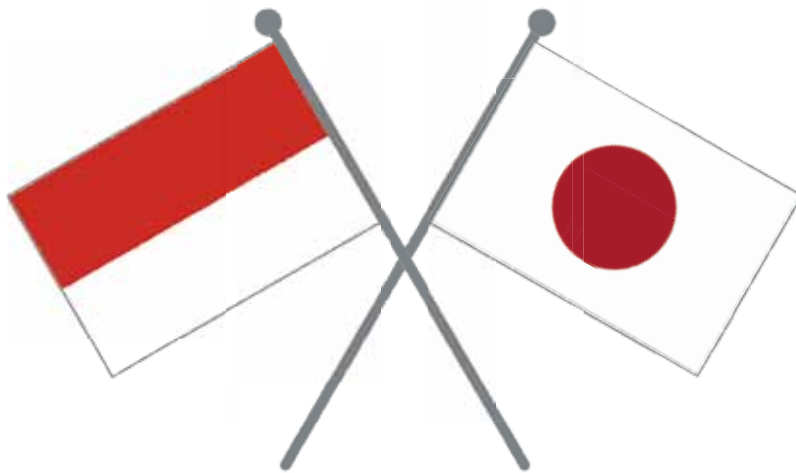


平成保存版

# 南十字星



南十字星会

大阪大学・外国語学部 インドネシア語専攻同窓会

## 「発刊にあたって」

希望に胸を膨らませて迎えた令和時代ですが、2年度には新型コロナウイルス禍によって、全世界は経済的に大打撃を受けていますが、人類が英知を結集して災いが早く収束することを祈っています。

さて、会長を引き継いだ機会に第25号までの会報誌を読み返し、南十字星会の皆さんの活躍を再発見いたしました。随分昔の事ですが、就職活動時に当時のインドネシア語学科には語科指定と英語堪能者の募集も多く、学友から羨ましがられたことを覚えています。在校時も多くは運動部に所属し、学内のスポーツ大会（例えば陸上、駅伝、柔道等々）で同級生が大活躍をしていました。何事においても活発だった語科卒業生が社会に出て産業界で大活躍をされて来たのです。

しかし、2007年に大阪大学と統合した後に募集定員が従来の半分以上（今は12名）になったことでインドネシア語学科が大きく変わりました。入学定員12名は25専攻語の中でも最低であり、日本とインドネシアとの政治的・経済的な関係並びにインドネシア語教育の需要・必要性から判断しても全く理解し難い現状です。人口だけを見ても、私が1963年にインドネシアに赴任した時に同じ位だったインドネシアの人口は今では日本の2倍以上になり、世界で4番目に位置しています。その後の経済発展を考えると、当時よりも遥かに重要な相手国になっているのです。定員の復旧を願うのは、外国語学部並びに大阪大学を慮るからであります。

会報「南十字星」の内容は同窓生が主としてインドネシアと関わりあって来た事柄が中心になっていますが、それ以上に多くの語科同窓生が広く世界的に活躍をされています。

このような現状に鑑み、又、再認識するためにバックナンバーの記事を抜粋して「平成保存版」として発行することにいたしました。同じ学び舎で過ごした学生時代はライフコースの重要な一部です。

「南十字星会」の素晴らしい伝統を思い起こすためにも、是非とも一読をお願い申し上げます。

外国語学部の新キャンパスが2021年4月には大阪メトロ御堂筋線の延長線の北大阪急行の阪大前に完成し、大阪外国語大学創立100周年、大阪大学創立90周年を迎えます。

おわりに、大阪大学の益々のご発展と同窓生各位のご健勝をお祈り申し上げます。



令和2年8月

南十字星会（大阪大学外国語学部・  
インドネシア語専攻同窓会）

会長 小原 一浩

# 目次

発刊にあたって	小原 一浩	001
夢は脈々と受け継がれて (会報創刊を喜ぶ)	山口 寛 ('58年卒)	002
インドネシアにおける日本語教育	磯浦美恵子 ('58年卒)	002
草創期を振り返る	野尻 庄蔵 ('53年卒)	004
バンドン発 この街と自然の魅力	大田中 実 ('63年卒)	006
統合後も存続発展を	磯田 良一 ('55年卒)	008
私のINDONESIA (今ASEAN 盟主への復活を願う)	西田 達雄 ('60年卒)	009
第2の故郷 インドネシア 雑感	藤原 剛 ('41年卒)	011
金融関連事業で (インドネシアとの縁深く)	宮崎 衛夫 ('65年卒)	013
通算20年 インドネシア勤務で思うこと	岩井 俊之 ('61年卒)	015
ジャカルタ発 「縁(えにし)」	扇谷 竹美 ('66年卒)	017
人生は出愛、ふれ愛、助け愛	小原 一浩 ('63年卒)	018
キャンパス便り	松野 明久 (元担当教授)	020
私のIndonesia と南十字星会同窓	枘谷 昌博 ('56年卒)	022
インドネシア語の海を漂って	粕谷 俊樹 ('62年卒)	023
インドネシア語と私のインドネシア研究	市村 真一 ('44年卒)	025
新しい世代の成長を信じて	木下 一 ('61年卒)	028
Apa & Siapa 留学の思い出	高田 芳博 ('07年卒)	031
ジャカルタの昨今	渡邊 悠三 ('69年卒)	032
わが心のインドネシア	林 喜久雄 ('60年卒)	034
古い思い出から新たな取り組みへ	石川 恵二 ('62年卒)	037
インドネシアとの関わり	増田 崇行 ('07年卒)	039
東南アジアを転々 現地の人々に学ぶ	辻 修司 ('64年卒)	040
20年ぶりのジャワ ノスタルジー・ツアー	坂口 隆史 ('74年卒)	042
スハルト大統領 表敬訪問通訳の思い出	滝本 佳一 ('60年卒)	044
アチェ大地震災害 自衛隊支援に参加 体験記	道弘 健吾 ('61年卒)	046
インドネシア語が教えてくれたこと	野村 知代 ('12年卒)	048
Pecah-belah: コフレモノ	高岡 容子 ('87年卒)	050
諸先輩の“遺産” 今後もしかり継承	内原 正司 ('64年卒)	053
Apa&Siapa 神戸インドネシア語学習会を主宰	沖 政夫 ('66年卒)	055
峠を越えてもまだ坂がある 神経難病の診断	岩谷 英志 ('64年卒)	056
「南」に導かれて	安田 和彦 ('89年卒)	057
インドネシアとささやかな自分史	床次 泰文 ('70年卒)	059
インドネシアの印象記	渡辺 重視 ('64年卒)	061
海外駐在 曲折を経て	丹羽 慎吾 ('75年卒)	063
社会人生活15年を経て	伊勢崎 昭弘 ('03年卒)	066
中西龍雄先生を偲んで	岸田 勝昭 ('67年卒)	068
「編集後記」		069

## 誇れる伝統 夢は脈々と受け継がれて 会報創刊を喜ぶ

南十字星会会長 山口 寛 (1958年卒 大6)



南十字星会とは、大正11年開校の大阪外国語学校馬来語科を母体に、大阪外事専門学校を経て、戦後の学制改革で昭和24年に新制大学として発足した大阪外国語大学インドネシア語学科・専攻の同窓会である。当初は「南方同志会」の名称で卒業生・在校生を一丸とした、いわゆる語部の縦の組織だった。戦後「南十字星会」と名称を改め、会の中心を卒業生において現在に至っている。この間、第二次世界大戦をはさんで母校も幾多の辛酸を舐めてきたが、卒業生は1,600余人となり、多くの逸材を世に輩出した。これは語部の誇りでもある。

本会を語るに、生みの親でもあり半世紀の長きに亘り教鞭を取られ、千余人の子弟教育に尽くされた恩師、故内藤春三先生の存在を忘れることはできない。先生には教育のみならず、就職の斡旋や結婚の世話まで親身になって面倒を見てもらった者数知れずである。先生の顔が長かったことに因んでつけられたあだ名が「KUDA」。温和な人柄に先生を慕う者多く、南十字星会の拠り所となってきたわけだが、こと学問に関しては酷しい考え方もった信念の人だった。「志をたて、外語に入学した以上は専門語の習得に全力を傾注すべし」という言葉が、とても印象に残っている。かつて、南進の志を抱

いて外語に入学せる戦前・戦中世代。戦後の混乱時代から経済大国への道程を、海外雄飛を夢見て外大に入学した企業戦士と言われる世代。そして今また、グローバル化時代を迎えて外大を志願する新世代と、海外に賭ける夢は終始変わらず脈々と受け継がれていることに、語部の伝統を見る思いである。

しかしながら、戦後60年経った今日、母校をとりまく環境にも大きな変化が見られる。今春の新入生15人中、実に13人が女性という女子大化現象。2007年度にも予想される大阪大学との経営統合問題や大学全入時代の到来。それらに対応した同窓会活動の見直しを今さらながらに痛感するものである。特に、卒業生の記憶も日々薄れ、体験談も風化してゆく中であって、本会挙げてのアチエ募金活動が契機となって同窓生間の情報交流が進み、長年の懸案だった会報誌が創刊できたことは無上の喜びと言える。願わくば、南十字星会報が同窓生交流の場として、末永く先輩から後輩へ受け継がれてゆく語りべ的存在となることを期待するものである。

歴代会長 (敬称略)

1949～1979	石崎次雄	(’26卒専2) =故人
1979～2004	野尻庄蔵	(’53卒大1)
2004～	山口 寛	(’58卒大6)

## インドネシアにおける 日本語教育

磯浦 美恵子 (1958年卒 大6)



ブンハッタ大学で5年  
ハサヌディン大学で2年  
言葉だけでなく“心”を  
「一粒の種」がしっかり実を結ぶ

私は2002年から2004年の2年間スラウェシ島・マカッサルの国立ハサヌディン大学にJICA（独立行政法人国際協力機構）より派遣されましたが、それ以前の1990年からの約5年間、西スマトラ州パダンのブンハッタ大学で日本語教育に携わりました。

### ☆パダンへ☆☆☆

当時、日本語学科は北スマトラのメダンに国立の北スマトラ大学や専門学校などがあり、日本政府の援助も十分受けていましたが、西スマトラ州には全くありませんでした。パダンはスマトラの真ん中、赤道直下にあって海拔ゼロ、暑さと食べ物の辛さ（Masakan Padang）で有名なところで、ミナンカバウ族（母系社会）として教育水準も高い地域です。大学から文学部に日本語学科を開設してほしいとの要請を受け、赴任しました。

第1期生は50人でスタート。先生は北スマトラ大学、パジャジャラン大学、ジャカルタ大学から来てもらいましたが、学力が低く学生と一緒に初歩から指導しなければなりません。教科書、辞書、ビデオ教材、ビデオデッキ、コピー機などあらゆる教材、機材は日本を何度も往復して友人、知人の援助を受けました。ジャカルタ在住のインドネシア語科の同期生、後輩、教え子の皆さんのご好意も忘れることは出来ません。



パダンの郊外にはこんな伝統家屋も

### ☆苦難の道☆☆☆

ジャカルタと東京の国際交流基金にも何回も足を運

び、私立大学の重要性を話しました。しかし、返ってくる言葉はいつも「援助は国立5大学だけ」。今でこそブンハッタ大学は日本語科が有名になりましたが、当時は大学の存在も知られていませんでしたので、困難を極めました。

教材の援助と教師が日本での研修を受けられるようになったのは4年後のことでした。それも年々学生数が増え数百人になり、日本語能力試験も好成績を収めた結果だと思います。大学側がすべてを任せてくれたのは、有難いことでした。

私が目標としたのは、単に日本語を教えることだけではなく日本文化、日本人の考え方、日本人の心を伝えることでした。インドネシア語を専攻していなければ、大学側との交渉もミナンカバウ族の風俗習慣も乗り越えられなかったと思います。

「DisiplintetapiAdil」に教えられたものと信じています。



ブンハッタ大学日本文学部の文化祭=04年5月6日

### ☆恩返し☆☆☆

そもそも私がインドネシアで日本語教育に携わりたいとの思いを持ったのは、1956年のアジア・アフリカ・バンドン学生会議（Konperensi Mahasiswa Asia Afrika）以来のことです。日本から女子学生代表としてただ一人出席いたしました。1ドルが360円の時代で、大学生として渡航費200万円は不可能でした。

応援して下さった外大生の街頭募金や、新聞報道で多くの方の寄付を頂き、実現出来ました。滞在中もホームステイはもちろん、大勢のインドネシアの方にお世話になりました。それ以来、いつかは両国のために役立つことで恩返しをしたいという思いを抱きながら、インドネシア語と日本語教育を続けました。

幸い長年の夢が叶いインドネシアの東と西、マカッサルとパダンで日本語の「一粒の種」を植えることが出来

ました。

パダンには毎年日本語弁論大会を開催するため賞品、賞金持参で訪れています。50人から始めた日本語学科も、今やスマトラ全島からやって来て600人になっています。3年制の短期大学でスタートしましたが、現在は5年制大学となっています。基礎から日本語教授法を指導した先生達も、日本で研修を受け立派に育ちました。



マカッサルの街の風景



東ジャワのプロモ山

### ☆認められ☆☆☆

2001年4月にブンハッタ大学創立20周年を記念して表彰状と金バッジを授与されました。外国人としては初めて。帰国後こんなにも早く功績が認められることは稀有なことで、大講堂の壇上からインドネシア語で挨拶をして大拍手を受けたときは、一冊のテキストから揃えて孤軍奮闘したことを思い出し、感無量でした。

現在パダン市にも近隣の町にも日本語学校が増えました。先生の多くは教え子達です。スマトラだけではなくジャワ島やスラウェシ島の各地でも日本語を教えています。

日本語教育を通して日本とインドネシア両国の国際

交流に貢献出来たことを嬉しく思っています。

冒頭の写真は47年ぶりに訪れたバンドンのホテル。AA会議出席のため泊まった時は南国情緒あふれる小さなホテルでしたが、今はすっかり近代的なホテルになっていました。

私が一番初めに使ったインドネシア語が「Minta Air Panas」。マンディのためにバケツにお湯を運んでもらいました。ボーイさんが何に使うのか訝って「Hati hati ya, Nona」と言ってくれたのを思い出します。

---

## 草創期を振り返る

南十字星会前会長 野尻 庄藏 (1958年卒 大1)

---



南十字星会の発足は、戦後間もない頃でした。発足前後の様子と、かつて会が取り組んだ「母校へのインドネシア関係図書寄贈」を中心に、振り返ってみたいと思います。

大阪外国語大学の前身、大阪外国語学校の開校は大正11年11月11日。馬來語部は当初から設置されていました。戦中・戦後の外事専門学校を経て、それまでの3年制から4年制の外大に引き継がれたわけです。戦前「南方(なんぽう)」という言葉が、南洋開発の意味も込めて、日本国中でもてはやされていました。

大正12年から外語の教員となられた内藤春三先生が、学生らと一緒につくった研究発表の会も「南方研究会」という名称で、機関誌『スラタン(Selatan)』を出していました。卒業生のほとんどが日本内地を離れ、南方の商社や現地事業で活躍。戦時の不幸な時期は、2

年生の半ばで戦場に送り出され、学生数も減りました(私の兄の野尻正男もアラビア語2年2学期在学中のまま海軍にとられ、昭和19年12月31日戦死しました)。

第1回の南十字星会の集いは昭和24年(1949年)。現在の道頓堀の「かに道楽」の場所にあった森永ストアの2階喫茶室が会場でした。発起人は石崎次雄氏と内藤先生。当時まだ現役学生だった私は雑用全般担当でした。実は最初から南十字星会と称していたのではなく、数回重ねているうちに固定。会は学生を主に、外地から復員してきた卒業生が加わりました。

“なごやかな会”は、卒業生が増えるとともに、同窓会としての性格が強くなりました。会長石崎氏、名誉会長に内藤先生、私は副会長の1人に命ぜられ、2、3年に1度と不定期ながら会の開催を続けました。会場はミナミやキタなどその時々で変わりました。



内藤春三先生(中央で挨拶)の退官感謝祝賀会。㊦は司会の野尻副会長、㊦端が石崎会長=昭和48年6月9日、大淀区の東洋ホテルで

一方、キャンパスは高槻時代を経て上八(上本町八丁目)に移転。その後、手狭なため敷地の広い箕面の移転候補地が浮上しました。南十字星会は、この新キャンパス建設計画と合わせ「後輩に役立ててもらおう」と、新図書館にインドネシア関係の図書を寄贈することに決めたのです。資金確保と図書の現地調達の方法を第一に考えました。趣意書を作成(昭和53年4月)して全会員に送付。多くの方から送金をいただき、お手持ちの本を送ってこられた方もありました。

当時、(株)メルバブ貿易におられた秦新氏(専1)にジャカルタへの送金役を、現地駐在の大田中実氏(大11)に図書の買い付け役を頼みました。図書の臨時集荷・保管場所を服飾品卸貿易の弊社(中央区、野尻株式会社)3階の1室とし、真本豊次氏(大13)に整理の手伝い、そのほか北羅一朗氏(大3)や磯浦美恵子氏(大

6)にもいろいろとご尽力いただきました。

図書寄贈の取り組みは、サンケイ新聞、読売新聞、NHKに報じられました。

多くのご協力を得て集まった図書は、目標を上回る3000余冊(点)に。昭和54年11月11日、新装なった大学図書館に贈呈しました。

図書館については、まだ思い出があります。昭和20年3月13日深夜、米軍の空爆で大阪市の大半が焼失、上八の大阪外専校舎も灰燼に帰しました。しかし、校舎の西北隅の図書館は焼けずにすみ、蔵書はほとんど全部助かりました。後年、設立された大阪外大の“資格的財産”として大いに意義を発揮する、貴重な図書だったのです。

図書館の中の“石浜文庫”は蒙古文学の権威・故石浜純太郎先生の蔵書を石浜家から寄贈されたものです。

大学にどのような変化が起きようとも、貴重な蔵書を持った図書館は大阪外大の誇りであり、大きな財産であります。どうか永久に保存し、学生諸君の勉学に役立てていただけるよう切にお願いします。

☆南十字星会の会長は、石崎氏のと昭和54年(1979年)に私が引き受け、平成16年(2004年)に山口寛氏にバトンを渡しています。冒頭に名をあげました内藤先生や石崎氏らはすでに故人になられています。会の伝統は若い人たちへ、これからも長く受け継がれていくことを期待します。



集まった図書の分類整理

# バンドン発 この街と自然の魅力

大田中 実 (1963年卒 大11)



バンドンはジャカルタから東南約 150<sup>キロ</sup>、海拔 750 ㍎の盆地にある。インドネシア 4 番目の都市で、西部ジャワ州の州都でもある。私の住む Dago Pakar (海拔 800 ㍎) からは、ランプの明かりが残ったバンドンの街が朝日を受け、もやの中に透けて見える。雨季は特に空気が澄んでいる。時には、雲が山の中腹までさがって山の稜線を浮かび上がらせる。遠方には Papan Dayan 火山からゆっくり立ち上る噴煙。水墨画のような幻想的光景が、毎日姿を変えて現れる。郊外に出れば、見渡す限りえんえんと続く茶畑や野菜畑。

こういった景色を見るのが好きだ。すがすがしい気持ちになる。

平均気温 27 度。熱帯としては涼しく、朝方は 20 度前後となる。公害が少ない。勉学にも適しているであろう。スカルノ初代大統領も学んだバンドン工科大学(通称 ITB、1920 年設立) は世界的に知られている。日本との関係も深い Pajajaran 大学など有名な大学や専門学校には、各地から優秀な学生が集まる。政府の研究機関も多い。

私がバンドンに赴任したのは 1977 年 3 月だった。勤務しているのは電機部品・電線製造の会社。赴任時、工場の周りには田んぼでアヒルが泳いでいた。今は他社の工場がまわりを囲んでいる。経済発展とともに仕事も増えた。従業員数は当時わずか 100 人ほどだった。現在は 2000 人を超える。

## ☆☆週末一変☆☆

バンドンとジャカルタ間は、以前は汽車が一番早く約 3 時間だった。最近は高速道路が整備され、車なら 1 時間半から 2 時間。首都が一層近くなった。週末ともなると街中はジャカルタナンバーの車であふれかえり、あちこちで交通渋滞もしばしば。しかし、そんなことはお構いなし。毎週々々ジャカルタから人はやって来る。

狙いは Factory Outlet のブランド物(ちょっと怪しい)や比較的安い衣料品を買い求めることらしい。この地は昔から“繊維のまち”なのだ。ちなみに、ゴルフ用のスポーツシャツやズボンは 500 - 1000 円で買える。

週末、どこのホテルも満員になる。部屋代やレストランでの食事代も徐々に上がってきた。私どもバンドンの住人にとっては、いささか迷惑な話ではある。

## ☆☆竹楽器の演奏☆☆



Jaipongan や Dandut など伝統的な歌や踊りが盛んである。観光客や修学旅行生で賑わう Saung Angklung Udjo 劇場では、スンダの伝統的舞踊とも言われる子供たちによる Angklung Bambu Show が毎日開かれている。フィナーレは、指揮者の合図に合わせて観客が一緒になって同じ竹楽器を演奏。大いに盛り上がる。私も何度か試してみたが、なかなか楽しいものである。(写真 先出 2 点)

また、おいしい料理が食べられるのもバンドン。パダン料理は Gule Kambing や Ayam Pop、ジャワ料理なら Soto Babat Daging、スンダ料理では Sop Buntut…。いつ食べてもおいしいし、決して飽きが来ない。いずれも今や全国区の料理になっている。

バンドンは、第二次世界大戦後の 1955 年にアジア・アフリカ会議が開かれたことでも有名だ。独立記念館



には当時の写真や文献が展示されている。昨年、その50周年記念式典が、日本の小泉首相はじめ各国首脳を大勢招待して盛大に行われたのは記憶に新しい。

オランダ時代の建物がいまだに多く残っている。その代表的なものがアジア・アフリカ通りにある。1880年頃建築された Savoy Homann Hotel だ。近年改装されたが、オランダ時代の面影が漂い、オランダ人観光客はこのホテルをよく利用している。



サボイ・ホーマン・ホテル

かつて Kota Kembang といわれただけあって、多くの公園には年中美しい花が咲く。オランダ時代“ジャワのパリ”とも呼ばれ、オランダ植民地政府が首都機能を本気でこの地に移そうとしたことがあったという。

#### ☆☆伝説の山☆☆

バンドン北部郊外には、マリバヤ公園や伝説で有名な Tangkuban Prahú 火山(写真)や Ciater 温泉があり、車で簡単に行ける。

Tangkuban Prahú は、バンドンの北 28<sup>°</sup>に位置する海拔 2076<sup>m</sup>の火山である。多くの人々が訪れるこの山は、以前は頂上まで車で行けたが、今は途中からミニバスに乗らされる。これも地元の人々に職を与えるためだろう。遠くからみると山全体が船をひっくり返したような(船底が天を向く)形をしている。

この山の伝説を、簡単に紹介しよう。

母親と長い間別れていた実の息子の若い王子が、知らずに自分に結婚を申し込む。母親は断るために「夜が明けるまでにダムを作り、大きな船を作って浮かべよ」と難題を吹っかける。ところが、船は完成しそうになる。あわてた母親は神様をお願いして、太陽を早く昇らせ、一番鳥を早く鳴かせた。若者はだまされたと激怒し、完成しかけている船を蹴飛ばしひっくり返してしまった。そ

れが今の山 (Tangkuban Prahú) になった。《この伝説は昨年、外大の語劇祭に「Dayang Sumbi」のタイトルで演じられた》

その Tangkuban Prahú のふもと海拔 1500<sup>m</sup>の地点には、広大な茶畑や丁子畑に囲まれた Ciater という温泉がある。湯量は多く、皮膚病やリュウマチによく効くとのこと。ここも、私の“お気に入り”。いつも足だけつか。保養地として結構いい線を行く。



#### ☆☆純朴で人なつこい☆☆

バンドンの住民の大多数はスンダ人である。耳にするのも、スンダ語が多い。スンダの伝統や文化を学ぶのには、やはり最も適した土地と言える。

基本的にはインドネシアはどこへ行っても雰囲気は大差ないが、バンドンに住んでいる人は何となく純朴で、人なつこい。外国人を大事にしてくれる。風俗・文化・習慣の面でまだ単一性が保たれ、人々がすれていないようだ。ジャカルタのような華やかさはないが、昼間はもちろん、夜も安心して外出できる。今はランク付けがあるのかどうか、以前は世界で最も安全な 10 都市のひとつに数えられていた。

楽天的で宵越しの金は持たない。くよくよしない。旦那に逃げられても探しまわらない。旦那は Adu Domba など賭け事に熱中する。楽しく儲けたい。まずいことはなんでも Apa Boleh Buat と諦めが早い。

こうした気質を理解しすべてを飲み込んだ上で仕事をしないと、トラブルの連続でストレスがたまり病気になる。ここに長くいられるということは、既に悟りの境地を開いたか、半分スンダ人になったか、それともストレスをためない方法を自然に身に付けたか。自分にもよく分からない。

☆欲張ってあれこれ書き、観光ガイド的になってしまった。だが、ともかくバンドンには、昔の名残があり、アカデミックな雰囲気が漂う。インドネシアの他の都市には見られない、魅力溢れる街である。一度長期滞在を考えてみられては如何だろう。

## 統合後も存続発展を

南十字星会関東支部元幹事（咲耶会会長）

磯田 良一（1955年卒 大3）



卒業後の1959年春に上京。初めて出席した関東支部の懇親会で諸先輩にお会いし、いろいろ話を伺いました。私には大きな刺激になり「よし、自分も商売をしよう」と。その時の決意が、今の会社設立につながりました。

在学中は専ら陸上競技部で練習に熱中していました。インドネシア語はあまり勉強しなかったのですが、'67年に支部の幹事に。専攻語のつながりはありがたく、恩師や仲間との親交が随分深まりました。

特に、内藤春三先生とは在学中の時と違った、親密なおつきあいでした。温泉地など各地で催した支部の懇親会にも、都合をつけてよくお顔を見せていただきました。'80年には先生が私財を寄贈され「基金」が誕生。利子を活用すればみんなの負担減になるだろうというお気持ちでした。'85年12月に先生が逝去された後、遺族の方から基金の追加を受けました。それが現在も続いている「内藤基金」なのです。その後先生の奥様を支部の総会にお呼びしたり、東京の各地をご案内したり。その奥様も他界され、今は思い出を語るだけ。さび

しい限りです。

支部の活動を2000年まで微力ながら尽力してまいりました。つらいと思うこともなかったもので、性分に合っていたようです。同年秋からは咲耶会（大阪外国語大学同窓会）会長を、野尻庄藏氏（大1）の後を受けて務め、東京と大阪をたえず往復しております。

ご存知のように、母校と大阪大学は「07年10月の統合」統合した新しい“大阪大学”の学生受け入れは「08年4月」と時期を明記して推進する旨の合意を今年3月に取り交わしました。

合意書によりますと「それぞれの長をを活かしつつ、多彩な教育研究を新たに展開することにより、国際社会のなかで日本の果たすべき真の役割を担い得る国際的人材の養成を目指し」統合を推進していくということです。

母校の箕面キャンパスは統合後に「大阪大学外国語学部」になります。日本語を含めた25の言語専攻が当面はそのままそっくり移るわけです。インドネシア語専攻もその中に入り、そこで学んだ学生が卒業後、南十字星会会員になるはずですが、これは、ごく自然の流れでもあり、スムーズに進むものと期待されます。

しかし、統合後の全体の同窓会がどうなるかということについて、心配される声やいろいろな意見も聞きます。大阪大学側では昨年7月、同窓会連合会が結成されました。従来の学部ごとの同窓会組織をまとめた形です。両大学でそれぞれ同窓会の活動形態が異なっていたのは事実で、同窓会の再編についても、容易ではないさまざまな問題があります。

われわれは統合後、咲耶会が「大阪大学外国語学部同窓会」として活動を継続できるものと考えております。咲耶会の立場としては、それを受けて円満に新大学の組織に移行していくよう、大学当局への働きかけを今後一層強めるとともに当局との交流を緊密化し、関係各位との調整に全力を尽くすつもりです。

同窓会の将来は、ひとえに会員各位の意志にかかっていると云えます。南十字星会の発展と永続、そして同時に咲耶会の存続に関しまして、今後とも皆様のご協力とご支援をお願いいたします。

# 私の Indonesia 今 ASEAN 盟主への復活を願う

西田 達雄 (1960 年卒 大8)



## 《1565 年某月某日》

日本とインドネシアの関係を辿ってみると、1565 年に日本人 8 人がポルトガル船で西ジャワを往来したとの記述が残っていると聞く。鎖国が解かれた後は往来さらに活発になり、明治 42 年に日本領事館、大正 2 年日本人会、大正 14 年日本人小学校が設立されるなど記録されている。

不幸な第二次世界大戦中日本軍による占領支配もありましたが、インドネシアは極めて親日的なお国柄で、彼地で生活された方々は異口同音にその日々を懐かしく語り、インドネシアの奥深さや人々との出会いを話題にしております。例えば、彼地に縁ある人々の集まり「Tokyo-Jakarta 会」は都内で年 2 回盛大に開催されています。インドネシアに滞在されたご婦人方による人気あるコーラスグループ「スアラ・ファンタシ&コール・フローレス」は各地で活動を続けておられ、草の根的に日-イ関係強化に寄与されています。

## 《1961 年 3 月 22 日》

建国の父、独立の闘士スカルノ大統領統治下の首都ジャカルタに私が第一歩を踏み入れたのがこの日。若輩 23 歳の春である。

1960 年 3 月大阪外大インドネシア語学科を卒業し、住友商事(株)入社 1 年未満での赴任。爾来度々の駐

在を重ねること 14 年間、彼地でお世話になった次第。JAL のプロペラ機で深夜羽田を発ち、香港に向かい→シンガポール→ジャカルタと乗り継いだ。不安一杯で、当時地の果てとまで言われたジャカルタ入りは、今尚鮮明に記憶に残りつつも、時は流れ、既に半世紀を刻もうとしている。

1955 年のバンドンでの「アジア・アフリカ会議」は片田舎の無垢な一高校生を触発して、躍動するであろう世界に身を置くことを運命付けた我が道は、今振り返れば、半ば達成されたとしても、相次ぐ天災・人災続出の「INDONESIA の今」に心痛む昨今であります。来る 2008 年は日・イ修交 50 周年記念として双方で記念行事が盛大に予定されており、若い世代を中心にさらなる多層的な両国関係強化を願っております。

## 《1974 年 1 月 15 日》

それは私自身にとり一生涯忘れられぬ日として、右手中指の傷跡とともに心に残る思い出。この時私は 3 度目のジャカルタ駐在であったが、当日市内は騒然としていた。事務所からの帰途回り道をしたにも拘らず、田中角栄首相(当時)訪イに反対し、荒れ狂う反日デモの一団に遭遇。じっと見守る無数の大衆雑踏(当時 100 万人の見物)。小型のコルト車でさき前に進めず、後にも引けず。そんな中で、中高校生を中心とする集団に車を取り囲まれ、揺さぶられ、大きな石で窓を壊され、指には鮮血が流れた。諦めて下車すると即座に車は反転され、無惨にも焼かれてしまった。身の危険は感じなかったが、大好きなインドネシアで何故こんな酷い仕打ちに出会うのか。偶然としても至極残念な気持ちだった。そして、それ以来途上国の若い世代と日本企業・日本人との結びつきを盛り上げねばと、日々漠然と意識するようになった。

現在では海外での日本企業や日本人の Behavior も大きく変わり、概して高い評価を得ています。グローバル時代であっても、私は他人の庭を借りての企業活動であることを忘れずにと今後も訴え続けていくつもりです。

## 《1990 年 7 月 25 日》

5 度目のジャカルタ駐在を事務所長としての任務を終え、彼地を後にした日である。長き歳月を刻んだジャカルタ生活だったが、その最後に相応しい充実した 2 年間。前半は日本人学校維持会理事長として子供達に

直に接する機会も多く、異国で力強く育つ彼等を頼もしく感じた。後半は JJ (CJakartaJapanClub) 理事長として、インドネシア各界の幹部との交流を重ね、幅広く議論を交わした。その時の人脈の一部は今尚綿々と続いている。この時、幸いなことに事務所を託す後任者はバグダッド所長から転任する、気心知れた同窓同級の滝本佳一兄（インドネシア語科 '60 年卒）であった。帰国に先立ち、滝本所長と相談して、恒例の所長交代披露 Party を取り止め、その経費を全額インドネシア学生奨学資金に振り向けることとした。後日新しく教育財団 “Yayasan Summit Cahaya” が設立され、歴代の所長がこの方式を継続。既に 5,000 人以上の学生に奨学金が給付されており、彼等が幅広く各地で活躍しているであろうと時折滝本兄と語り合いながら、当時の上司の決裁にも感謝している。

昨今では多くの進出企業は各々のやり方で人材育成に協力し、彼地での社会貢献も幅広く行っております。私も長年の夢であった「人作り」の一端に参加させていただき、日本ーインドネシア両国の絆がさらに強まり、広がることを切に願い、現役を退いた今自らにもさらなる努力を課していきたく考えています。

#### 《2007 年 2 月 4 日》

本紙編集長の求めに応じ、本稿の仕上げを急いでいる。日々変化に富んだチャレンジングな 42 年間の商社マン生活を退き、既に 5 年が過ぎようとしている。現在(株)きんでんの非常勤顧問、(社)世界貿易センター常任理事等を務める傍ら、私は、設立以来半世紀の歴史と伝統を誇る(財)日本・インドネシア協会(会長・衆議院議員福田康夫氏、法人会員 90 社、個人会員 300 人で構成)の業務を手伝っている。そして、日本ーインドネシアの広範囲な関係強化を目指し、民主化された国造りに進むインドネシアの着実な発展を願って、微力ながら内外関係者との協力の下、引き続き歩を進めて参りたいと思っている。

Aceh 津波被害への募金をいただいた中に、Sumatra 各地に駐屯された旧日本軍兵士の各々の戦友会から多額の浄財が寄せられました。その贈呈式には高齢の代表者が在日インドネシア大使公邸にまでご一緒いただき、関係者一同感激的一幕もございました。

昨年 11 月には国賓として訪日されたユドヨノ大統領一行の歓迎会を日・イ国会議員連盟と共催して、参加

者の皆様には大統領と親しく懇談いただく機会を設けるなど、協会として活発な事業展開を行っております。

最後に Dr.H.Susilo Bambang Yudhoyono 政権につき私見を述べてみたい。

①ユドヨノ政権は初めての国民による直接選挙(2004 年)で選出された大統領であり、国民の支持、期待は大きいですが、未だ十分にその実績を示すに至っていない。汚職追放を声高に訴えるが、司法の協力も十分でなく、その成果は容易ではない。相次ぐ天災・人災に見舞われて応急対策に追われ、1970 年代の外国投資法の改正も 2 年以上国会で Pending となっている。強固な地盤を持たぬ大統領の国会対策や自らの利益を優先し勝ちな国会議員に頭を痛めているのが現状である。

②投資家が自由に国(投資先)を選ぶグローバル時代にあつて、ユドヨノ政権は内外直接投資を強力に誘致して、国民に就労機会をより多く提供し、国民生活の底上げをはかって貧困削減、地域格差是正に繋げてほしい。また、所得向上で汚職大国の汚名返上に漸次向かうことを期待したい。

③世界第 4 位の人口 2.2 億人を抱え、イスラム教徒が 9 割近い多民族構成からなる「民主国家」インドネシアは、台頭する近隣の大国との競争にさらされ、内外共に極めて厳しい状況に置かれている。ASEAN(東南アジア諸国連合現在 10ヶ国加盟)もその地位を相対的に低下させており、今強力 Leader を必要としている。一面では世界のブロック化が進む中、アジアの中の日本としても ASEAN の継続的安定と社会・経済の発展に寄与してゆくことが将来にわたり国益に適うことであろう。この点からも民主化進むインドネシアが、自らを再建して、ユドヨノ政権下において名実共に ASEAN の盟主として再び内外に Leadership を発揮する時期の早い到来を心から願っており、その実現を密かに確信している。

## 第2の故郷 インドネシア雑感

藤原 剛 (1941年卒 専18)



予備士官学校を出て、マレー・シンガポール作戦後にアラフラ海・ケイ諸島（現インドネシア領）で敗戦まで駐留しました。復員後、毎日新聞記者としても5年近くジャカルタに駐在。やがて定年を迎えました。つまり、人生の半分はインドネシアに関係したと言ってよく、インドネシアは第2の故郷でもあります。

### ☆☆更なる発展を☆☆☆

長い大阪外語の歴史のなかで、予想もしなかった大阪大学との統合が実現しました。歴史とは人類が成長していくなかで絶えず移り変わり、発展していくものだと私は考えます。ギリシャ、エジプト、ローマ、中国も全て歴史のなかで、発展しました。日本も例外ではありません。

母校は阪大外国語学部に発展します。願わくば「外国語が読める、話せる」の姿勢でなく、語学を通じて、相互の正しい文化を理解しあうよう。そして秩序ある、真の平和と共存の追求を願って止みません。

### ☆☆南方に憧れて☆☆☆

外語に入学したのは昭和14年。父がフィリピンで、日本の商社と古い沈没船の売買をしていました。また、蘭領東インドの石油資源獲得をめぐる、日本の南進論が盛んでした。そんな環境から、旧制・山口県立柳井中学時代から南方に憧れ、第1志望の外語へ進みました。

そのころ、インドネシア語を馬來語と呼び、スマトラ・

メダンあたりの言葉を蘭語つづり（例えば、uをoeと書く）で教えていたので、人口の最も多い中東部ジャワの言葉とはアクセントが随分異なっていました。外語では、野球部へも入りました。

### ☆☆「スパイになれ」☆☆☆

外語も含めて、高等専門学校は殆ど3年制でした。3年の夏休みが終わったころ、突如「2学期から外国郵便の検閲をやれ、勤務は神戸中央郵便局」と命令されました。東京外語が名古屋以東、大阪外語が京都以西を分担。英語、蘭語、馬來語を受け持ちましたが、コレポンや私信を開封しOpenedbyCensorshipの印鑑を押しました。奥さんや恋人からの私信には、ルージュで封をした封書も多かったけれど、ルージュの上から検印を押すような“野暮”はしませんでした。

太平洋戦争が激化、徴兵延期はなくなりました。17年2月、山口歩兵留守隊（広島5師団、本隊はマレー作戦中）に入営。初年兵教育ののち、保定（北京の100°南）予備士官学校で7カ月の将校教育を受けました。卒業も迫ったころ、中隊長に「貴様、オランダ語を専攻したな。卒業したら、中野学校（スパイ養成学校）へ行け」と言われま

とっさに「航空を志願します」と答えたところ、中隊長はにやっと笑って「航空へ行け、この話はなかったことにする」と解放してくれました。近眼の私が航空隊に不向きだと分かっている、助けてくれたと今も思っています。

同期で山口高商出身の秦君はレイテ島で陸軍特攻隊員として、敵艦に突っ込み戦死。馬來語部で机を並べていた松原重幹君（故人）は中野学校へ行ったが、戦後も陸上自衛隊に定年まで勤めていました。

昭和20年、アラフラ海を挟んで、オーストラリアと対峙するモルッカ諸島のひとつ、ケイ島で終戦。ケガや病気もしませんでした。突然「外語出身だから占領軍（豪州）との間の連絡将校をやれ」と命じられて、5師団司令部付となり、イギリスの軍艦に降伏命令を取りに行かされました。

文書の書き出しに「天皇が降伏したから、日本軍は天皇の命令によって、連合軍の指示通り武装解除せねばならない」とあり、「うまいことを言うなあ」と思っていました。しかし、復員後、米女性民俗学者・ベネディクトの「菊と刀」を読んで「日本を降伏させるには、天皇

制を上手く利用することにある」とアメリカは分析していたことが飲み込みました。

### ☆☆新聞記者として☆☆☆

復員して京大文学部に入り、卒業後、毎日新聞の記者に。昭和40年9月、インドネシアで“共産党の反乱”(?)と言われた「9・30事件」が発生しました。この時も「外語出身の藤原に取材させる」ということになり、41年(1966年)から5年近く、ジャカルタ特派員を命じられ、スカルノースハルトの政権交代劇を見てきました。

「インドネシアの国教はイスラム」と欧米系の記者たちは割り切るが、単純ではありません。イスラムに熱心なのはスマトラ、特にアチェなど北部が狂信的。中部、東部ジャワはイスラムよりも、原始信仰・ドウケーン(一種の占い)への信仰が強く、スカルノがスハルトに政権を渡したのも、両首脳のドウケーンがバリ島の大統領官邸会談した結果で、満月の夜でした。

現在ジャカルタの国際空港の名称は「スカルノ・ハッタ空港」です。西欧的に言うと「共産党と手を握ったスカルノをいまだに持ち上げるのはおかしい」となるでしょう。でも、これが現実なのです。



ジャカルタ時代の名刺

### ☆☆国際関係論を講義☆☆☆

新聞記者在任中、マレーシア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、チェコなど、戦争と紛争地域ばかり取材しました。

昭和56年定年退職。その後80歳まで四天王寺国際仏教大学で教授として、国際関係論を講義。採用に当たっては、書いた新聞記事がそのまま、論文とみなされるので、得をしました。アメリカがベトナムで失敗したころから、湾岸戦争ーテロ統発ーイラク戦争勃発など激しく世界が動きました。

講義の教材には新聞記事も活用。このため、乏しい懐を絞って「毎日」「朝日」「日経」と3紙を購読し、こまかく読んでいました。

現在85歳。息子の世話で静かに余生を送っています。



スカルノ大統領に迎えられて笑顔で挨拶する藤原氏



スハルト大統領(第2代)と八木大使



在住当時の中国人街



独立記念塔

## 金融関連事業で インドネシアとの縁深く

宮崎 衛夫 (1965年卒)



昭和40年(1965年)の3月、大阪外国語大学インドネシア語科を20人の個性溢れる男たちとともに卒業しました。仲間たちは、メーカー、商社、銀行などそれぞれの道に進み、日本経済の高度成長期の真只中を突っ走り、バブル崩壊後の厳しさも体験してきました。今彼らと集い、昔を偲び、これからの人生を語り、共に杯を重ねる機会を得ることは無上の喜びです。私は幸いにしてインドネシアとの関わりを多く持てる仕事に就くことが出来ました。シンドイことも無かったわけではありませんが、今となればどれも楽しく貴重な経験ばかりです。紙面をお借りし、その一端を披露させていただきます。

### 最初のインドネシア (1972年10月ー1973年3月)

海外拠点を拡充していくという戦略を持つ三和銀行(現・三菱東京UFJ銀行)に就職しました。入行後7年を過ぎた1972年の10月、念願の海外、それもインドネシア勤務!の辞令を受けました。

当時インドネシアは経営基盤の脆弱な多くの小規模の民間商業銀行が乱立状態でした。政府は民間銀行の健全な発展を促進するため、これら銀行に対し外国の銀行からアドバイザーを受けることを勧める趣旨の大統領令を交付していました。そこで、ビジネスチャンスとばかり、日・米・欧の主要銀行がジャカルタ詣でをし、対象とする銀行の奪い合いになったのです。

このような状況の中、スーツケース一杯のレポート用

紙・ボールペンなどの事務用品、常備薬を抱えクマヨラン空港に降り立ちました。赴任の翌日から、上司とともに候補銀行を10数行訪問し、その経営陣・財務内容・ライバル銀行の動向などを調べるわけです。困ったことに、専門であったはずのインドネシア語が挨拶程度しか通じなくて、また彼らの使う英語もなかなか聞き取れません。

あとは得意の勘と度胸で面談記録を書き、上司から叱責をうけた苦い経験もありました。



Visit Indonesia Year に協賛してつくったポスター

仕事を離れては、Kota 界限のおびたしいベチャの賑わい、ココナッツオイルの鼻をつく匂い、PuncakPasへのドライブ。そして、大晦日にジャワ島西端のMerakBeachの月明かりの下で飲んだBirBintang、HayamWurukにあった知る人ぞ知るナイトクラブBlueOceanなど、走馬灯のごとく思い起こします。

紆余曲折はありましたが、華僑系のBank Baliをパートナーと決定し、その後の交渉もスムーズに進みました。順調でなかったのは健康面です。それまでのホテル住まいから賃貸の家に移るべく探し始めていたときに、激務の影響か、ホテルインドネシアのプールの水が悪かったのか、「アメーバ赤痢」をこじらせてしまったのです。

ジャカルタの国立病院に入院しました。当然のことながら全てインドネシアスタイル。病室は広い中庭に面した個室でしたが、濁った水しか出ないカマル・マンディや下痢が続いている身に朝・昼・晩3度のインドネシア料理はなんとも厄介でした。肝心の治療も(後で分かったのですが)日本では使用禁止になっている強力な注射や、腸の中をかき回す荒っぽい手当ても受けました。

日本での再治療のためいったん帰国。すぐにもジャカルタに戻るつもりでしたが、代わりにスタッフが急きよ送

られ、私は捲土重来を期して日本に残ることになりました。その後、1975年から80年まではインドネシアではなく、香港支店勤務です。

### ジャカルタ駐在時代 (1989年4月－92年10月)

香港から帰国後の9年間は国内勤務が続きましたが、1989年春になって、突然インドネシア勤務の辞令が出ました。今回は同国の金融の規制緩和策の流れの中での新しい商業銀行設立の仕事です。「ゼロからのスタート」であり、当局との交渉や、営業・事務などの組織づくり、現地行員の採用などの合間を縫って、日系各社や、現地有力者への挨拶回りなどに忙殺されました。

なにごとにも“Kira-kira”の国民性。銀行設立に向けてきめ細かいスケジュールを立てていても、なかなか思うように進みません。小切手ほかの帳票類の作成・印刷で何度やり直したことか。オフィスに電話線が届けば長さが足りない。きちんと手続きを踏んで採用したはずなのに元の雇い主からハイジャックされたと言って大変な剣幕で怒鳴られたり、監督官庁からの気まぐれな要請で右往左往したり。まさにドタバタ劇の連続です。新しいものをつくり上げる喜びがあればこそ、踏ん張れたのだと思います。開設後は、日系のみならず、地場の優良企業とも取引ができ、多くの有能な人々と接する機会を得たのは、本当に良かったと思います。合板、繊維、縫製、木工製品などの工場見学の機会も多く、スマトラ、カリマンタン、スラウェシ、イリアンジャヤなどに出張。貴重な経験となりました。数々の問題を抱えながらも比較的順調なインドネシア経済のおかげで3年半楽しく刺激的な仕事に従事。私のサラリーマン生活の中でも特筆すべき“熱く思い出深い”時期でした。

### 年10回の出張時代 (94年6月－2006年6月)

1994年に子会社の三和総合研究所（現・三菱UFJリサーチ & コンサルティング）に移り、国際業務を担当しアジアの事業に注目。ビジネスへの期待と私の個人的思い入れ(?)からインドネシアに子会社をつくり、企業向けの経営コンサルティングと政府相手のODAのソフト分野の仕事に力を入れました。当時は毎月のようにジャカルタへのお出張です。スハルト退陣前後の政治・社会の混乱や、97年のアジア金融危機に端を発する華僑中心の経済界の未曾有な破綻などを目の当たりにし、この国には何が必要なのか、何を為すべきか。議

論を重ねてきました。

銀行のローンリスク管理（日本の金融界の失敗から学ぶ）、非効率な国営企業の民営化計画、地方分権に伴う財政管理。これらインドネシア政府に対する政策提言などで、少しはお役に立てたところもあったのではと、ひそかに自負しております。

### 終わりに

長い混乱の時期を経て、このところインドネシアの状況も改善の兆しが見え始め、外国からの直接投資も増加傾向にあります。今年、日本・インドネシア国交樹立50周年。次の50年に向けてインドネシアの安定的成長と、日伊関係の更なる発展を期待しています。



ジャカルタの Sunda Kelapa 港。  
突き出した舳先が岸壁に並ぶ



Banjarmasin の合板工場。貯木場での作業



# 通算 20 年の インドネシア勤務で思うこと

岩井 俊之 (1961 年卒)



インドネシアに勤務する日本人の間で囁かれる言葉に「インドネシアは、納豆の糸のような切っても切れない思いがあって、何度でも行きたくなる不思議な魅力ある国」というのがあります。私はこの言葉にぴったりの人間だったのか、ある時は 2 年、また 5 年、そして家族帯同の 6 年半などの勤務を重ね、いつの間にか通算 20 年の勤務を経験する結果となりました。

私のインドネシア勤務は 1966 年 (昭和 41 年) 11 月、会社 (蝶理) のジャカルタ駐在員として、小雨そぼ降るクマヨラン空港に降り立った時に始まりました。その前年の 65 年には世にいう 9 月 30 日事件が発生、ジャカルタは戦車や装甲車が街角に待機し、治安が極めて不安定でした。74 年 1 月 15 日には反日の暴動がありました。

そして最後に勤務が終わって帰国したのが 99 年 7 月でした。その前年の 98 年 5 月 21 日には、スハルト大統領の突然の辞任表明があったのです。

私は 32 年のスハルト政権下社会で、黙々と 20 年間に亘り勤務してきた日本人の 1 人だったのです。特に印象に残った 3 つのことを述べてみたいと思います。

## (1) スハルト政権の崩壊

98 年 5 月 21 日のスハルト大統領の突然の辞任表明は、大きなショックでした。歴史的な瞬間を見逃すまいと、必死にテレビの生中継を見ていました。

あれほど強権を誇ったスハルト大統領が、見たこともない、元気がない、疲れきった姿で、映し出されていま

した。テレビに映る大統領の姿を目の当たりにして、一瞬思い出したのは、「平家物語」に登場する平家一族のことでした。一の谷、屋島へと追い詰められ、最後に壇ノ浦で滅亡した平家一族とスハルト政権崩壊を重ねて見ていたのです。同時に「祇園精舎の鐘の声」から始まる巻頭の名句を思い浮かべていました。「奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し。たけき者も遂には滅びぬ、ひとえに風の前の塵に同じ」。その日は興奮して社宅で眠れぬ一夜を過ごしました。

振り返ってみれば、私のインドネシア勤務の時期は将にスハルト政権の誕生から退陣までの 32 年間の中にほぼすっぽり収まるものでした。

「開発の父」といわれた同大統領は「国家建設」や「外資導入」の政策を推進し、「アセアンの創設」にも尽力するなど、それは積極・果敢なものでした。ただ、あまりにも長い政権は「汚職」「癒着」「縁故主義」という弊害を生みました。特にサリム、アストラ、シナールマス、そしてリッポーなどの大財閥グループが国家の重要な利権やライセンスを得るために、大統領の子供 (息子 3 人、娘 3 人) や親族が関わるビジネスを支援し、大統領一族は大きな蓄財を得たのです

しかし、一族の不正蓄財疑惑が解明されないまま 2008 年 1 月 27 日、スハルト元大統領は多臓器不全のため死去。享年 86 歳でした。

スハルト元大統領はいろいろと批判されましたが、功績は高く評価すべきと思うのです。中立・容共のスカルノ政権とは違い、反共・親米路線のスハルト政権はインドネシアに今日のような繁栄・発展をもたらしたと考えるからです。



スハルト氏死亡翌日の地元 KOMPAS 紙の 1 面。「Warisan Soeharto」の見出しで、氏が「遺したこと」を解説していた

## (2) ジャカルタの路地裏での生活

90 - 95 年の 5 年間、私はインドネシア系企業のトリメックス社（繊維大手のトリスラ・グループの本社）に勤務しました。社宅がジャカルタ東部のチラチャスという田舎町の工場内の一角にありました。一般庶民が住む家々が密集し、いわゆる「路地裏」と称する場所です。この地域の環境の劣悪さには驚くばかりでした。

交通の盛んな表通りから一步中に入ると、元の場所に戻るのが難しいほど、狭い道が網の目のように走っていました。今にも倒壊しそうな、小さな民家が所狭しと建ち、蓋のない下水道から、悪臭が遠慮なく放たれていました。

それでも地域の人たちは劣悪な環境にはお構いなく、平然とした生活を送っています。それどころか、いつも笑顔を浮かべ、幸せそうな表情をしていました。

GOTONG-ROYONG（相互扶助）の精神が浸透、互いに助け合い、励まし合う人々の姿がありました。

夕日が落ちて周囲が暗くなる頃、私は路地裏を散歩することがありました。家々の明かりが灯ると、家の中が透けて丸見えでした。そこには楽しそうにテレビを見ている父子の姿、台所で忙しく夕飯の用意をする主婦の姿、楽しく夕食を摂る一家団欒の姿などが影絵芝居のように映し出されていました。この地域の人たちは、たとえ貧しくとも、楽しく、幸せそうでした。



路地裏の風景。下水溝のそばに荷車も

この 5 年間、私がジャカルタの路地裏に住んで学んだことは「人の幸せとは一体何なのか」ということでした。

それは「人はたとえ貧しくとも、幸せは得られる」「幸せは心の持ち方一つで得られる」ということです。地域の人々の中に芽生えている「人情味」や「人間愛」に

とても感動しました。日本人として滅多にできない路地裏の生活で、私は願っても叶わない貴重な体験をしました。

「自殺」や「いじめ」が多い今の日本社会が、こういった「幸せ」や「人間愛」に満ちたジャカルタの路地裏社会を参考にすれば、もっと良くなると思うのですが。

## (3) ジャワの農村家庭とリンガルジャティ訪問

かねて私はジャワの農村家庭を訪問したいと思っていました。そのチャンスが 99 年 6 月にやっと訪れました。

目指すは中部ジャワ北部の町・ブルベス近郊の農村。ブルベスはチレボンの東約 60<sup>km</sup>にある町です。訪れた先はプトウンジュンガンという小さな農村でした。

ジャワ島の幹線道路は整備されていますが、幹線から外れて中へ入るとデコボコ道ばかりで驚きました。車は少しずつしか進めません。ジャワ横断鉄道の無人踏み切りにも出合うのですが、警報機や遮断機が無く、いつ事故があってもおかしくない危険な状態でした。

訪れた中部ジャワの農村は、大変貧しく、教育水準が低く、医療環境が悪い状況にありました。若い人は仕事を求めて大都会へ出て行き、村に残るのは年寄りや子供たちばかり。ジャワ語しか話せない人がいました。でも、のんびりした生活や人々の純真さは、とても印象深いものでした。

農村家庭の訪問を終えてジャカルタへの帰途、リンガルジャティに立ち寄りしました。リンガルジャティは幹線道路から車で 30 分ほどの小高い丘の上にありました。昔、中西龍雄先生のインドネシア歴史の講義の中に「リンガルジャティ協定」があったことを思い出していました。ここが「協定が結ばれた会場」なのかと感傷的な気持ちになり、暫しの間、佇んでいました。学校時代に教わったことを、40 年の時が過ぎて自身の目で確認できたのです。感無量でした。

因みに「リンガルジャティ協定」とは 46 年 11 月 15 日、イギリスの調停で当時のシャフリル内閣がオランダと結んだ協定。オランダがジャワ、スマトラにおけるインドネシア共和国の支配権を認め、インドネシア連邦の実現に努めるという内容でした。長くインドネシアに滞在していると、思わぬ場所に出会うことがあります。リンガルジャティはその 1 つです。



ジャワの農村



リンガルジャティ協定が結ばれた建物

---

## ジャカルタ発 縁 (えにし)

扇谷 竹美 (1966年卒)

---



卒業して42年。その歳月の半ばをインドネシアに過ごしました。特に好きな土地だからという訳でもなく、業務の求めるまま、生活のために、振り返ると長いつながりを持つことになってしまいました。迷える仔羊が外大インドネシア語の門をくぐったのが、この経歴の基です。運命とも言うべき「縁」を感じます。

96年から3年間、ボゴールで生活したことがあります。

ワイフを帯同しており、私は彼女に安心の出来る、少しでも広がりのある生活をと願っていました。ジャカルタでは日本人社会が根付き、色々な組織もあります。でも、初めてのボゴールでは、何もかも手探りです。糸を手繰り寄せていくうちに多くの日本人女性が在住されることが分かり、付き合いが広がって行きました。多くの方はインドネシア人留学生らと結ばれ、勇躍この地に渡って来られた人たちでした。

ある日、無謀にも、知る限りの日本人家族の皆様らを我が家にお招きしました。手狭な家でしたが、私が自前の握り寿司を用意すると吹聴し、さらにお互いのよき交流を願ってお集まりいただいたのです。

この時の来客の中にファリダさんがおられました。外大インドネシア語講師として長年教鞭を執られたナジール先生の娘さん、恩師の肉親でした。ボゴール農科大学教授であるご主人のパスリブ先生と二人のお嬢さんをご同伴くださいました。お嬢さん二人は共にインドネシア大学を卒業し、現在は夫々に幸せな家庭を持っておられます。ファリダさんは、ご高齢のお母さんのご機嫌伺いに時々神戸にも往来しておられるようです。この奇しき邂逅に大いに驚き、感激致しました。これこそ「縁」と思った次第です。

他の女性方も60年代初めに在住されたケースがほとんどでした。激動のインドネシアで、夢に描いた幸せばかりではなく、多くの辛酸も体験されたことと思います。苦楽を分かち力強く歩んでこられ、しっかりと地に足が着いた家庭を築いておられています。互いに思いやる気持ちがあり、信頼できる“お母さんたち”であります。

米国留学組のブンガラン・サラギ教授(ボゴール農科大学)・美芳子夫人とも親しく話し合いました。同教授はこの2年後、メガワティ大統領時の農業大臣として入閣。驚きと同時に、親しき人の大臣誕生に誇らしく思い、心からの声援を送りました。今は、大学に復職し研究生活を続けておられます。

また、ヘル・衛藤さんが由美子夫人と二人のお子さんを同伴されました。氏の父君は元日本軍兵士で、インドネシア独立戦争の英雄として遇された方です。ヘルさんは日系大企業取締役の傍ら、元日本軍残留兵士の「福祉友の会」を介助し、会長としてその運営に従事。奥さんが経営指導するバレエ教室にも深く関わるなど、精力的な活動をしておられます。

寿司パーティーは盛り上がり、その後も、二度三度集

いを持たせていただきました。今、私はジャカルタに住んでいます。ワIFEを橋渡しにボゴールの皆様との絆もしっかり続いています。

インドネシアに滞在する間、人との出会い、一期一会の「縁」を心に温めていきたいと思っています。



ボゴールに住む日本人の奥様たち。ヨガの集い

## 人生は出愛、ふれ愛、助け愛

小原 一浩 (1963年卒)



古希を迎える歳になって、人生は偶然の出会いによって決まるものだと実感しています。出会いが運命だと考えてもよいと思っています。

幼年時代に、迷子になった時のために教えられていた住所が「天王寺区上汐町4丁目36番地」。そばに「生国魂神社」がありました。実はその近くの「上八」に偶然、制服が恰好の良い「大阪外国語学校」があったのですが、当時は知らず、随分後で母から聞きました。

中学時代からアジアに強い関心を持っていました。大学進学の際「貿易相手国として、これからはインド

ネシアだ!」と同級生と話し合い、迷わずに外大インドネシア語学科を受験しました。その年の競争率は15倍強(実質は10倍弱)。無事に合格し、入学後4年間を、専攻とワンダーフォーゲル部との2本立てで過ごしました。

就職する時期になって、インドネシアへ行ける会社への就職を第1に考えました。大阪に本社のあるN商社の内定を辞退し、当時スマトラ島で橋梁工事を施工していた富士車両に入社しました。同社は早くから東南アジアへ進出し、タイのメナム川に架かる3橋梁、カンボジアのトンレサップ湖の橋も建設していました。そして、日本の戦争賠償の1つとして巨大な橋の建設工事を受注していたので、インドネシアへ行ける絶好の会社だったのです。チャンスは程なくやってきました。その頃、海外に出かける日本人はごく少数で、航空運賃も高額。当時の日本 - パレンバン間の往復の航空運賃は20万円で、初任給の10ヵ月分。現在のバック料金と比較すると隔世の感があります。1963(昭和38)年11月23日、日米間の衛星放送が始まった日に、米国のケネディ大統領が凶弾に倒れたとのニュースを聞き、多少緊張しながら羽田空港を後にした日を忘れることは出来ません。途中、機上から眺めた海は、まさに夢にまで見た「赤道直下に散りばめられたエメラルドの帯」そのもの。しかし、空調の利いた機内から出た途端、ジャカルタの蒸し暑さには閉口しました。

工事は南スマトラ州都のパレンバン市を流れるムシ川に橋梁を建設するものでした(写真⑥)。



パレンバン市には石油の精製工場があり、太平洋戦争の初期に日本軍の落下傘部隊が降下した街として有名でした。富士車両がメインコントラクターで鋼橋を製作し、サブコントラクターの大林組が下部工事(橋脚)と架設工事を担当していました。ムシ河は水量が多く、特に橋脚工事は難工事でした。私の業務は事務方で、プロジェクト事務所への現地調達資材の供給要求や日本からの材料・機材の通関手続きその他でした。ニチ

メン実業からの駐在員と2人で担当していました。何しろ、建設現場ですからいろいろな出来事が起こります。日本人でも気の荒い連中が大勢いました。いざごは絶えず、警察署やプロジェクトとの交渉も仕事の一部でした。

おかげで、私の度胸も付きました。契約上、公式のやり取りは英語でしたが、日常はインドネシア語。英語とインドネシア語と日本語の同時通訳時には、スムーズに言葉が出ずに困ったこともありました。言葉の調子は日によって好不調があるようです。それでも、このような体験を通して英語とインドネシア語が結構こなせるようになり、その後のサラリーマン生活に大いに役立ちました。現地で取得した自動車の運転免許は、今でも日本で大型免許書として大いに活用しています。ゴルフは、近くにコース（PGC）がありプレイする機会には恵まれていましたが、もう少し「コン」をつめてやってあげれば良かったのと思っています。



愛用したトヨペット車と

パレンバン滞在中で一番大きな出来事は親日派だったスカルノ大統領が65年の「9月30日事件」で失脚したことです。大統領の娘婿殿のスクリスノ氏も同じプロジェクトのインシニユールだったので余計に驚きでした。当時、大統領はインドネシア共産党と軍部に跨って政権を担当していたようです。共産党は非合法ではなく、記念日には各地で「鼓笛隊」を組んで闊歩していました。数日間は何が起こったのか定かではなく、ラジオ放送だけが頼り。程なく6人の陸軍の将軍が親衛隊員であったウントン中佐の率いる仲間が殺害されたことが分かりました。空軍の一部と大統領親衛隊なども絡んでいたようです。暴動を起こした共産党（PKI）を追った戦略予備軍のスハルト司令官が、代わって大統領を務めました。

5年後に旅行で行った時に、PKI 党員に対する弾圧が激しかったことを知人から聞かされました。スハルト氏が大統領に就任したのは、本能寺の変の後、直ちに引き返した羽柴秀吉の例とよく似ています。敵を一番早く倒した人が主導権を握るのでしょう。その後、スハルト大統領は長期間政権を担当し、インドネシアの開発を手がけた功労者でした。

さて、私は橋の引き渡しの後、足かけ3年間の赴任を終えました。帰国してからは、会社で開発部に所属して新製品を担当することになりました。滞在当時から法律の重要性を感じていたので、大阪市立大学の法学部へ学士入学。引き続いて商学部へ再度学士入学しました。都合6年間に亘って会社勤めの傍ら夜の講義に通ったのは、好奇心と同時に人と違ったことをしてやろうという気持ちがさせたものでしょう。この学士入学制度の存在はその後の私に少なからぬ影響を与えました。東京へ赴任していた時には「放送大学」で4年間学習しました。そして、名古屋勤務・本社の総務部勤務などを経て定年退職を迎えました。海外業務担当の時に、東南アジアや欧米に頻繁に出張したのは、外大卒業という必然(?)でした。同級生松岡正勝君の妹さん（好美）を伴侶とし、岳父・好勝氏もまた外語の第1期卒業生です。

定年前に自費出版した「好奇心こそ我が人生の原動力」は、藤原剛先輩の勧めによるもので、推薦状も書いて頂きました。

退職後は自己実現の欲求を満たす世界で地域のボランティア活動に積極的に参加。「NPO 法人ふれ愛さやま」を設立してからは生涯現役の実践。現在は活動の一環として「訪問介護」や「まちづくり」などに精を出しています。限りある自分の時間を有効に使い切りたい思いで一杯です。既に「男の遺言状」は上梓しました。

インドネシア駐在生活から40年が経過しましたが、多くの思い出が鮮明に残っています。日本人に好感を持っていた素晴らしい人達に巡り合えたのは、若い頃の貴重な体験でした。今でもこの国のことが特に気にかかります。はっきり言ってインドネシア最良です。

1 昨年、金剛登山仲間をガイドして行った10年ぶりのバリ島で、南十字星を仰ぎ見ました。わが人生、振り返ってみたら原点には「外大・インドネシア語」があり、私の心の中には「南十字星」が燦然と輝いています。



登山仲間と旅行したプランバナンで



3冊の著書

## キャンパス便り

国際公共政策研究科 教授 松野 明久  
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

### 統合後、初の新入学生

この4月、統合後初の学生が入学した。インドネシア語の入学定員は10人。実際の授業は、入学者11人に日本語専攻の学生、進級できなかった者、聴講生を合わせ、合計14人でやっている。以前は1年次25人程度で授業をしていたので、こぢんまりしていて教えやすい。しかし、入学定員10人というのは25専攻語の中でも最低であり、日本におけるインドネシア語教育の需要・必要性という点から再考の余地ありと思っている。(入学定員は教員の新外国語学部での担当可能授業数によって決められており、当該言語の需要・人気・必要性からではなかったという経緯がある。)

入学者11人中男子が1人というのはちょっと気の毒だが、ともあれクラスは元気いっぱい、木曜1限目(8時50分開始)の私の授業にもみなよくがんばって

出席している。箕面キャンパスで行われる外大時代からの行事「夏祭り」にも参加した。新学生は1年間の共通教育(教養)課程を他学部学生と一緒に過ごし、

2年次から箕面キャンパスに移動して専攻課程に入る。1年次の間は豊中キャンパスの総合大学としての醍醐味を満喫できる。

一方、阪大の共通教育課程は本来1.5年(つまり3セメスター)なので、外国語学部は他学部と比べ教養課程を半年切り詰めて進むことになる。また、1・2年次に週5コマ専攻語を勉強するという外大時代のカリキュラムがそのまま維持されている。さらに新外国語学部では国際文化学科がないので、専攻語科目以外の法律・政治・経済・文化といった学問分野の授業はなくなる。語学学校時代のカリキュラムに逆戻りする感があるのは否めない。ただでさえ専攻のたこつぼ化が激しい今日、総合大学の外国語学部として、他学部・教養との接続をどのように確保していくかが今後の課題となるだろう。



専攻語のPRに一役買う1年生たち  
7月26日に行われたオープンキャンパスで、模擬授業のあと、1年生たちが踊りを披露。ひとことずつ入学後の体験談も紹介して「お勧めの言語です」「少人数でみんな仲よし」「一緒にインドネシア語を勉強しましょう。待ってます!!」

### 学生たちの意欲

さて、昨今の学生たちの学ぶ意欲はどうか。先輩諸氏たちの気になるところだろう。一言で言えば、学ぶ意欲は高いと思う。これはいろいろな点から言える。

まずひとつは卒業論文。大学での勉強の仕上げとして卒論を書くことを、教員一同、学生に勧めている。卒論は今では選択科目なので、2科目を追加履修することで代替できる。しかし、人文系学部としてはやはりまとまった文章を書くということをもって仕上げとしたいし、それによって得られる達成感を味わって欲しいと思う。

卒論執筆者数は2005年度9人、2006年度6人、

2007年度7人と推移しており、2008年度は5人となっている。学生定員15名の3分の1から半分程度の学生が卒論を執筆しているに過ぎないが、彼らはあえて「荊の道」を選んでいる意欲旺盛な学生たちと言える。教員は、いろんな文献をそつなくまとめた論文を望んではいない。(これにもそれなりの要領が必要なのだが。)むしろ、すったもんだしたあげく、ふっと一歩前へ踏み出せた、そんな「自己進化」の跡が感じられるようなものを欲している。どんな小さなことでもいい、新しいものを生み出してこそ「知的生産」と言えるからだ。そうした論文に時々出会う。

次に留学。旅行、ホームステイ、ボランティア活動などでインドネシアに短期で行く学生は多いので、昔に比べればインドネシアと直接触れる学生はだいぶ増えた。ただ、インドネシアの大学に留学する学生は例年2、3人に留まっている。

留学は語学力の面はもちろんだが、人生経験として多くのものをもたらしてくれる。しかし、そうした「あいまいな」成果では学生を引きつけられないのかも知れない。

一方、英語圏への留学及びワーキング・ホリデーでの渡航は増えており、毎年3、4人がオーストラリア、カナダ、米国などへ行く。英語ができるようになりたいというのは誰もが思うこと。卒業後インドネシア語より英語が求められるのも事実だ。学生は短期でのインドネシアでの経験を求めている。決して学ぶ意欲が少ないのではない。今後は、おそらくインドネシアでの研修を大学の課程に組み込むかたちで実施するなど工夫が必要だろう。

### 民主主義と平和プロセス—私の研究の半年間

2006年の東ティモールの危機を受けて、1999年来国連を中心として国際社会の監督の下に進められてきた平和構築と国家建設の歩みを振り返ることになった。そんな中で前から疑問に思っていた「表面的な民主主義」に大きな原因があるのではないかと考え、民主主義と平和構築プロセスの関係を探求しようと思った。

2008年になって2つの国際会議でこのテーマで発表した。まずはオーストラリアのダーウィンで行われたチャールズ・ダーウィン大学主催の会議「東ティモールの民主的統治」(2月7・8日)で「東ティモールにお

ける国連行政と民主主義構築」と題して、国連暫定行政下での性急な国家建設がトップダウンの中央集権的な体制を形成した経緯をたどった。



ダーウィン郊外にある第二次大戦中の飛行艇基地跡。インドネシア・東ティモールの日本軍の偵察を目的としていた

次に、ベルギーのルーベンカトリック大学で開催された国際平和研究学会の2008年度世界大会で「紛争後社会の安定と民主主義：東ティモールの事例」と題して発表し、独立後の東ティモールがエリート主義政治に走り、透明性も説明責任も欠いているさまを描いた。

前者はオーストラリアで出版される本に収められ、後者はドイツのある研究所のシリーズ公刊物に収められることになった。

何も国際社会だけが悪いのではなくて、ものごとは国際的関与とローカル・ポリティクスのからみで決まっていく。

ベルギーではパレスティナ和平(オスロ・プロセス)崩壊に関して、パレスティナ人自治政府の汚職、内的不和が原因であったという発表を聞き、民主主義的原則の維持が平和プロセスの維持にとっても重要だとの確信をもった。国際的関与というのは難しい。今後その複雑なパターンを研究し、政策提言につなげていきたい。



ベルギーで学会分科会の発表者たちと。ミナンカバウ母系制についての言及があった

# 私の Indonesia と 南十字星会同窓

梶谷 昌博 (1956年卒)



府中市の国際交流フェスティバル。インドネシアの説明とPRを留学生家族とみんなで筆者は左から2番目)

在近隣のインドネシア留学生から私は kakek と呼ばれています。日本語を教えたり、医療関係の世話や支援をしたり。Sudah tua ですが、perlahan2 dan tenang2 saja の毎日です。今回、佐々木女史 (67 卒、以下年次のみ) からの勧めで駐在当時のイ情勢・巡り会えた同窓・近況などを思いつくまま綴ることにしました。

☆ ☆ ☆

戦後の日伊経済関係が動き出しても、暫くは、就職はむずかしかった。私の卒業した 1956 年になって、インドネシア関係にはようやく僅か 4 人 (後にザンビア大使となった増井氏、野村の中園氏、丸福の岸田氏と私) だった。私は幸い住商に入社、爾来 4 回 10 年弱の駐在を含めて半世紀に亘り直接・間接にイ国とのつながりが続いた。これは外大での pelajaran Indonesia とイ国の親日的で温かな人々のお蔭と感謝している。

《59 年》支部会の席では武居氏 (31)、藪氏 (34)、樋泉氏 (37) ら大諸先輩の薫陶と激励を受けた。熱き志を胸に DC 双発プロペラ機で、熱さと椰子油の匂いでむっとするクマヨラン着、ジャカルタに初赴任した。ホテルデスイндеス、バンドンのホテルホームマンなどにオランダ時代の名残りを留めていた。庶民の生活は貧しく、経済は低迷し貿易量も少なかった。外国人政策も指紋登録と 5 週間毎の visa 更新など厳しかった。ただし、ジャワの人々は優しくかった。

《63 年頃から》民間取引・諸資源の輸出・賠償など

が盛んになり、週刊誌に D 夫人や賠償商社が登場し、ビジネスモラルが問題に。

三井物産の北村氏 (32)、長井氏 (36= スラバヤ総領事)、書記官時代の増井氏に公私に亘りお大変世話になった。板坂氏 (47) が最大の商社 CTC で活躍されていたのを後で知った。

《65 年 - 67 年》スカルノからスハルトへの大統領権限移譲にかけては、Bank Indonesia の default で貿易決済ができなくなるなど経済が破綻した。経済から国民の目をそらすかのように Ganyang Malaysia 政策・イギリス大使館焼討ち・華僑排斥運動が盛んになり、9.30 事件へと政治も混乱した。私も、幾つかの危険で悲しい事件を目撃した。

《68 年から》スハルト時代は、バークレーマフィア教授陣の活躍・IGGI・日伊経済協力・外資導入・石油ガス開発・材木 / 合板の輸出・華僑系企業と pribumi の隆盛などで大きな経済発展を遂げた。

一方では、74 年の反日デモ・選挙毎の争乱・貧富の格差・治安の悪化が駐在員生活をも脅かした。

しかし、日伊政治経済関係は順調に推移したと思う。この時期、私の知り得た範囲内では、三井物産の日比野氏、松下電工の浜辺氏、パシコンの高井氏 (各 57)、浜野氏 (60= ホンジュラス大使)、米田氏 (60= スラバヤ総領事)、目黒氏 (61= バーレーン大使)、野瀬氏 (62= モザンビーク大使)、ユアサの辻氏 (62)、山下氏 (66= パプア NG 大使) らが活躍されていた。

私は通信・電力・アサハンアルミ等の案件に係わることが出来た。そして住商の後輩: 金田 (57)、向井 (57)、滝本 (60)、西田 (60)、高野 (62)、瀧口 (63)、内原 (64)、三瀬 (71) 諸氏らが大いに活躍健闘された。

《85 年頃》私のインドネシアは終わる。

《90 - 93 年》中国総代表として北京に駐在。

今日の中国大躍進の予感を実感した。当時、中伊国交回復の直後で、中国各地でインドネシアのことをよく聞かれ、説明と PR に努めた。兼松の中国代表前田氏 (59) には、北京日本人会運営などに絶大なサポートを頂いた。

《その後 99 年まで》住商情報時代。大久保元支部



長 (53)、磯田元咲耶会会長 (55)、ブラジルプロボリスのエクセル和田社長 (55) らに親しく声を掛けて頂いていた。



北京のソフトボール大会で、㊦前田氏㊧優勝の荒公使



海部総理 (㊦) の訪中歓迎パーティーで

定年退職後、再びインドネシアと係わりたくて、文頭の volenter をしている。

インドネシアでは日本の高度医療技術を望んでいる人が多いと聞いている。危険を伴う3度目の帝王切開出産のため、都立府中病院でお産を希望した留学生夫人のほか、数人の入院をサポート。通訳や入院の栞のイ語訳版・看護婦との病院語対比カードを作るため、勉強をし直した。例えば、tetek は payudara の方がいいという使い分けなど。病院・治療関係のインドネシア語に興味のある方はいますか？

**Pada penutup :** インドネシアの多種多様な資源・看護介護師受け入れを含む EPA( 経済連携協定)。これらの関連協力案件は益々盛んになると思う。従って、留学生の諸君には期待をかけている。過去、留学生ではギナンジャーさんを始め多くの方々が国の発展と日伊友好に尽力貢献された。今は、私の近辺だけかもしれ

ないが、優秀なのに日本企業に就職していないし、帰国もしない留学生がいる。学生の個人差、インドネシアの国民性や KKN、日本側の制度と受け入れ態勢などに問題があろう。何か良い方策がないのだろうか。Buat apa susah, buat apa susah, susah itu ta'ada gunanya (まあ気楽にやろうぜ) と私も歌うしかないのかと自問自答する昨今である。

【お詫び：文中には亡くなられた方も多く、ご厚誼に感謝しご冥福をお祈りします。また、会社名に通称や略称を使い、氏名登場の了承も得ていません。ともにお許しください】

## インドネシア語の海を漂って

粕谷 俊樹 (62 卒)



京都産業大学でインドネシア語を 36 年教えました。我ながらよく続いたものだと思うのですが、率直に言えば、大学の語学教師として合格点は取れませんでしたね。本欄では、長年、インドネシアにかかわった諸兄が、大いなる達成感を持って人生を振り返っておられるようですが、私の場合は、正直のところ、少なからぬ悔恨と反省が伴うのです。

\*

京産大でインドネシア語を教えないか、と誘ってくださったのは、恩師松浦健二先生 (51 卒、外専 27 回) で、大阪外大から移られて間もないころでした。当時、商社に勤めていて、何の準備も覚悟もないままに「ま、やってみるか」と無謀にも手を挙げる気になったのは、ビジ

ネスマンとしての能力に限界を感じていたこと、両親が教師でそれなりに親近感があったからです。同時に、外大の授業での印象で、昔の恩師たちには申し訳ないのですが「俺にもできるかも」と、言ってみれば実に不遜な考えを抱いていたのが最大の要因でしょうね。

でも、そのツケはすぐに来ました。'68年に京産大の講師として赴任したのですが、まあ、惨憺たるものでした。何年かの空白を経て、インドネシア語と取り組むのですから、冷や汗をかくことばかりでした。とにかく教えつつ学ぶといった日々の連続でしたが、ついには「現地で学び直す他に道はない」と悟って、苦心して学費を工面し、強引に私費留学でジョクジャへ行きました。松浦先生はもとより、同僚の先輩、松岡邦夫先生（'60卒）にもずい分迷惑をかけたものですが、それを省みる余裕もないほど、当時は必死でした。そして、ガジャマダ大学文学部で、私の担当教員となったプラドボ先生に面談すると、先生曰く「キミは、日本の大学で、(学んでいるのではなくて)本当に教えているんですよ?」。疑いの眼なんです。

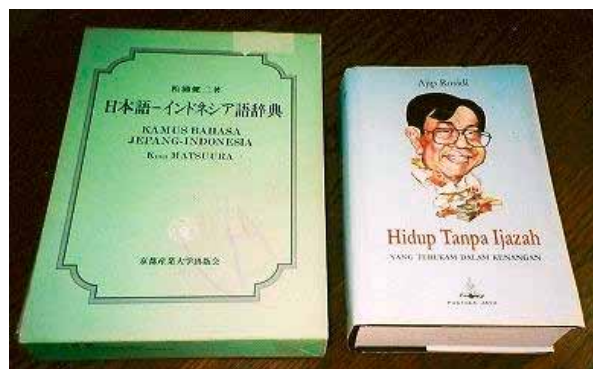
これには、こたえました。海外からの研究者を受け入れて、経験十分な先生の目には、大学教員としてのあるべき実力に達していなかったのですね。

以後30有余年、私が頭に描く大学教員としてのあるべきイメージと己の実力とのギャップをいかにして埋めるかで悪戦苦闘し続けてきたようなものですが、その目的は、結局、達しえないままに終わってしまったというのが実感です。よくテレビの水泳放送で、泳者が架空の記録線を必死で追いかけている場面がありますね。あれを見ると、どこか我が人生に似ているようで苦笑してしまうのです。もっとも、私の場合は、ただインドネシア語の海を漂っていただけのような気もするのですが。

こうした凡庸なる教師生活の中で、恵まれていたのは、さまざまな分野の優れた人々に出会えたことですね。インドネシア関係に限っても、実に多くの魅力的な人たちと面識を得ることができました。そして、その中でも、私が心底からすごいと思ったのは、(大阪外大に縁がある人に限ったわけではありませんが)次のお2人ですね。

1人は、前述の松浦健二先生です。優れたインドネシア教育者であったことは、勿論ですが(私語1つなき緊張感にあふれた授業を思い出される方も多いでしょうが)、その卓越したインドネシア語の運用能力、特に語彙力は、圧倒的です。『日本語インドネシア語辞典』(京

都産業大学出版会)は、その集大成で、収められた語数、実に見出し語4万、文例8万。しかも、すべてを全くの独力で30年かかって成し遂げられたのですから、すごいのです。辞書というものは、大抵は、底本をもとに、チームで編むのが普通ですから、まさに希有の偉業です。先生は、日頃から「生涯において、1つでもいいから本当に実のある仕事をすればいいのだ」と仰っていましたが、まさに身をもって示されたのです。こうした業績は、論文を重視するアカデミックな世界では、それほど評価されませんでしたし、また、特殊語のこともあって、その“すごさ”を知る人は限られています。しかし、不肖の弟子として、あえて言わせていただくならば「超一流の職人芸」だと思うのです。「膨大な原稿を宝物のように大切にしてくれた妻に感謝する」という序言の一節に先生の万感の思いが籠っているように思えます。



松浦氏の辞書(左)とアイプ氏の自伝

先生は、96年2月、司馬遼太郎氏逝去の1週間後に亡くなられましたが、まさに「大阪外大が生んだ2巨星墜つ」との感に打たれました。同辞書は、インドネシアでも盛んに売られています。同窓生諸氏には、使わなくとも、せめて座右に置いて眺めてほしいと思いますね。

\*

もう1人は、長年、外大で教えられたアイプ・ロシディ氏です。日本では「アイプさん」の呼び方が似合う、気さくなお人柄ですが、インドネシア社会においては、文学者としてのみならず、さまざまな社会問題に対しても積極的に発言を続ける「論客」として知られています。'80年に国際交流基金の招きで来日した際、外大の森村蕃先生('63卒)に、「外大に招きたいんですけど、来てくれるでしょうかね」と相談を受けた時、まさか翌年、再来日して20年も教えるとは、予想だにませんでした。彼は、スハルトの政敵として知られた元ジャカルタ市長、アリ・サディキンに兄事し、きわめて近い関係であった

ため、当時、政治的に難しい立場にあったことが、日本からの招聘を受け入れる決め手となったようです。でも、私たちにとっては、幸運でした。彼の仲介で、多くのインドネシアの作家、文化人、学者などとの交流が可能になり、日伊文化交流も促進されたと思います。インドネシア現代絵画展、詩朗詠大会などの開催も彼の功績です。

しかし、授業については、見方が分かれました。レベルが高すぎてついていけない学生には不評でした。京産大でも、そんな不満が出たので、私が「もう少し学生の力を考慮して教えほしいのだが…」と苦言を呈すると、意外にも「申し訳ない」と素直に謝られて驚いたことがあります。もっとも、若いころの短編に「生徒たちの前に立っている姿を想像するだけでぞっとする」と書いていますから、教師という職は、アキレス腱だったようですね。皮肉にも父親は長年、小学校の先生でしたが。

文学者、学者、経営者（国内最大の文学出版社を経営）、あるいは、政治家としても（アリ・サディキン政権が実現していたら、おそらく閣僚の一員だったでしょう）有能なアイプ氏は、実にエネルギーで、飾り気がなく、常に自然体です。インドネシアで、肩書や地位をひけらかしたりする、いわゆる著名人にも沢山会いましたが、彼は、まさに自由闊達、インドネシアの枠を超えた一級の文化人だと思います。彼の人となりを知るために「アイプ・ロシディ自伝（'08年刊）の日本語版を、これまた、ぜひ座右に置いて、と宣伝したいところですが、老いたる翻訳家の仕事では、あと2～3年かかりそうですから、ちよいと無理ですね。

\*

引退後も毎年2、3カ月は、寒さを避けてインドネシアで過ごします。妙なことに、今の方が、インドネシア語が流暢に話せる気がするんです。教師として、間違えてはならないという呪縛から解かれたせいなのでしょう。

「もっと肩の力を抜いてやっていたら…」と今にして思うのですが、所詮は老いの繰り返り言というものです。



アイプ氏宅に教員が集った'82年。松浦氏と松尾大氏（'61卒）



'05年、帰国後のアイプ氏と。新築邸宅東屋で

---

## インドネシア語と 私のインドネシア研究

市村 真一（1944年卒）

---



大阪外語時代を回想すると、感謝と共に深い感慨をもつ。私は一生を殆ど学者として過ごしたが、インドネシアとの縁は今につながっている。その縁（えにし）の事を記す。

大東亜戦争勃発の直後、昭和17年4月、私は満17歳の誕生日の数日後に大阪外語馬来語部に入学した。19年9月に繰上げ卒業、特別甲種幹部候補生と

して豊橋陸軍予備士官学校入校、翌年6月卒、東京陸軍幼年学校の生徒監補佐に任ぜられた。8月終戦。11月復員。翌21年京都帝大経済学部入学、24年卒。25年米国留学、28年MITより博士号を得て帰国。以後学者として今に至った。

## 1 外語時代のインドネシア語の勉強

外語時代の想い出は非常に多いが、忘れがたい事が2つある。1つはインドネシア語の勉強、2つは友人との勉強会である。

英語に比しインドネシア語は文法も発音も簡単であった。だから語彙が勝負だと判断して、毎日京都駅近くの我が家から大阪上六までの1時間半の通学車中、受験勉強式にカードを作って単語を憶えた。バレ一部で夕方まで練習、読書会もやりながらだったが、1年経つと、内藤先生の教材の新聞は苦勞なく読め、イスマイル先生との会話もできるようになった。

当時、友人と流行歌をインドネシア語に訳して歌った。一部は今でも憶えている。例えば「別れのブルース」、

Bukalah Pintu, Tampak Pelabuhan 'Meriken  
Bandar, Cahaya Kelihatan

もう1つ、「愛染かつら」、

Bunga dan Buaya Dilampau Majulah Terus, Itulah  
Jiwa Lelaki …

これでも、韻もふみ歌える様に苦心した。

語学の勉強で気がついたのは、辞書が良くない事であった。宮武の和イ辞書は良かったが、語彙不足だった。それに装丁が悪くてすぐぼろぼろになった。丁度その頃、馬英辞典が復刻されて何とか満足できたが、インドネシア・ラヤを読むと無い単語があった。

更に深刻なのは、和イ辞典の無いことであった。宮武の小辞書はあったが、我々の知識の方がすぐ上回った。良い和イ辞典無しでは現地で通訳ができない。そこで考えた。宮武の和イ辞典をひっくり返せば、形式的に和イ辞典ができる。それを段々改善すれば、そこそこの和イ辞典ができる筈。宮武の辞書200頁、クラス25名が分担すれば、1人8頁。大したことない。第1稿はすぐできる。やろう、と皆に話したら、クラス全員よしやると言う。カードに書いて、それを整理して第1稿は数ヶ月後に出来上がった。

ところが、その頃から戦局が悪化、25名のクラス中10名が学徒出陣、残り15名も大阪造兵廠に勤労働員

で、学校に行くのは週1日だけとなった。カードの山のまま、辞書プロジェクトは頓挫した。卒業の時下級生に、もし私が生きて還ったら完成するから、空襲の時は必ず持ち出してくれ、と懇請した。

だが、復員して訪ねた母校は、爆撃でがらんどう。授業は高槻の兵舎で行われていた。出会った後輩に聞いたら、爆撃時にカードは焼失と。残念無念。和イ辞書作成は、戦死した級友や我等の夢と消えた。今でも良い和イ辞典は無い。だから今も、インドネシア語の通訳養成は至難であろう。

## 2 外語時代の勉強会の読書尚友

次に勉強会。外語は語学教育中心だったが、一般教養の教育も優れていた。国語の吉田教授、法学の白井教授、経済学の中谷京大教授、東洋史の市村大高教授等々、錚々たる一流の先生方であった。その刺激もあって、学生の研究会や読書会が盛んだった。1年上の蒙古語に足立稔という生徒がいた。彼が呼びかけた読書会に参加した。教本は岩波文庫の吉田松陰「講孟餘話」。参加者は、蒙古語から足立の他に、福田定一(後の司馬遼太郎)等数、馬來語からは私と親友の石田登寿男であった。この読書会で、足立は他校のサークルも紹介してくれた。そこでの友人や教えられた東西の哲学や歴史の読書が今も私の血肉となっている。しかし勉強会は長続きしなかった。足立も福田も石田も学徒出陣したからである。足立と石田は遂に帰らず、石田はフィリピンで斬込隊長として戦死した。後に京大へ入った時、また米国へ留学した時、この勉強会での読書尚友が、極めて水準の高いことを知った。有り難いことであった。

## 3 京大東南アジア研究所の所長に

経済学では、私は数理経済学から始め、次に日本経済の計量分析に進んだ。43歳まで、脇目もふらずそれに専念した。

インドネシア語と無縁だったわけではない。留学中George Rossという米人学生に請われて、インドネシア語を教えた。彼は後に国務省の役人になり、ジャカルタにも勤務した。しかし私のインドネシア語の語彙は、英語の上達と共に、急減していった。

昭和42年も終り頃、大阪大学の社会経済研究所で

日本経済の計量モデルを完成した直後、京都大学に東南アジア研究所を創設するので、その所長になってくれないか、と要請された。折しも各大学とも紛争の最中で、京大は東大と共に特に激しかった。悩んだが、引受ける決心をした。その理由は、日本は高成長して戦後の混乱期を脱し、私の経済学研究の動機である貧乏克服を終えたから、取り組むべきは、なお困窮しているアジア諸国の問題だと考え始めていたからである。この時、私の胸中に若き日のインドネシア独立への感動が潜んでいたかも知れないが、特にそれを意識してではなかった。



阪大側の事情から、京大転任は翌43年の11月、所長就任は翌年4月になった。以後10年間、所長として新研究所づくりに、非常な苦心をした。

苦心の第1は、全共闘派や民青（共産党）系左翼学生の反東南アジア研究運動とそれを支持する左翼教授への対処であった。第2は、新研究を行う人材の養成であった。第3は、未発展の東南アジアの地域研究を推進するに必要な研究体制と現地の大学研究所との連携網の構築であった。此处では詳論しない。

第1の点についてただ一言。学生の主張を支持した様な京大その他の教授は、実に信念も責任感もない連中で、1979年の部小平改革以後、黙して何も語らない。第2、第3の点は、所長として当然の責務だが、同研究所の立派な現状がその成果を証明する。

研究対象は、東南アジアと周辺全体だが、インドネシアは特に力を入れた。なにしろ、65年軍事クーデターの直後で、どこから手をつけられるか五里霧中であった。

猛烈なインフレの最中、空港からは白タクに乗る有様。正式の出張費では満足なホテルにも泊まれず、外貨持出は制限されていた。私は大胆にあらゆる工夫をして、現地に2年分の家賃を前払いして借家し、日本払い現地デリバリーでジープを買い、研究体制を整えた。そして国家開発庁長官のウイジョヨ博士とのコネに頼って、社会経済研究所との共同研究として南スマトラ小11経済調査を実施した。これが同国の中央統計局による国民所得の正確な推計の創始となった。また大来佐武郎大臣と同国政府との要請に応じて、同庁内にインドネシア経済予測のための日本人チームを送り込んだ。学者（名大飯田、京産大小林、大阪国際大小田野、松本等）と経済企画庁（馬場、栗林、金子、小菅等）の専門家のチームが十数年滞在して同国経済を分析予測した。その成果は、毎年同庁の年次予測として会議で発表、新聞に公表されて評判を呼んだ。

1988年京大を退官する際、国際協力事業団の助成により、インドネシア研究の成果を『インドネシアの経専門家としてインドネシアにかかわって40年、その間インドネシアも変貌した。若きガジャマダ大学の助教授から国家開発庁の局長にウイジョヨ長官が抜擢したブディオノ博士が今副大統領である。インドネシア経済発展』なる英文総合報告にまとめた。

同時にウイジ大学を華人の故に追われたパンライキム教授の愛娘さヨ博士の要請により、インドネシア語で *Pembangunan Ekonomi Indonesia, 1989* としてインドネシア大学出版部から刊行した。同国の多くの大学が教科書に使ったと聞くのは、大きな喜びである。

我々の研究は、政府に協力したものだけではない。他の人類学、社会学、農学等多くの分野でも多様な成果をあげた。それ等は大半英語で発表されている。インドネシア研究に限らず、私も一生の著書約50冊の半分は英文で発表した。その半ばは和訳されていない。

インドネシア研究では、もう1冊ケンチョロニグラート博士と共編『Indonesia: Masalah dan Peristiwa Bunga Rampai』（インドネシア：様々な課題と事象）Obor, Jakarta, 1975）がある。この2書以外、インドネシア語で日本書以外、インドネシア語で日本人が発表した専門書はないのか。私のささやかな自慢である。

#### 4. インドネシアへの期待

専門家としてインドネシアにかかわって40年、その

間インドネシアも変貌した。若きガジャマダ大学の助教授から国家開発庁の局長にウィジョヨ長官が抜擢したブディヨノ博士が今副大統領である。インドネシア大学を華人の故に追われたパンライキム教授の愛娘さんが今貿易大臣である。1970年代タブーであった地方分権政策は、今や着々と実施に移されつつある。前途は心配ないか。

私には心配が多い。特に、1つと問われれば、私は答えたい。「人材養成」と。オランダは、東南アジアを数百年支配した宗主国のなかで最も教育に力を入れなかった国である。その積弊は深刻である。彼等は日本の明治に学ぶべきである。「坂上の雲」を訳してあげる人はいないか。日本の為すべき事は多い。日本語のできる人材養成の努力を10倍にせよ。そして日本から学ばせよ。それは日本人の自信をも高めるであろう。

## 新しい世代の成長を信じて

木下 一 (1961年卒)



私が初めてインドネシアの地を踏んだのは1960年の3月、外大3年生の時である。マレー連邦(当時)の首都クアラルンプールで行われたアジア学生会議に参加した後、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ベトナムの学生生活の実態を視察して回る機会を持つことが出来た。灼熱の太陽の下で緑が美しかったマレー、シンガポールとは違い、訪れたジャカルタは街全体が茶色っぽく、幅広い道だけが異様に目立った。しかし、親しくなったインドネシアの友人宅に泊めてもらったジャカルタ、バンドンでは家族ぐるみで親切にしてもらっ

たことが今でも印象深く記憶に残っている。

### ☆ジャカルタからシンガポール、マレーシアへ

卒業後は松下電器貿易(現パナソニック)に入社し、64年にインドネシアへの駐在を命じられた。当時のインドネシアはスカルノ主導の政治的混乱期であり、フィリップスと技術提携関係にあった松下電器が現地フィリップスの工場に資材の一部を供給することになっていた。そのフォローアップが主な業務であった。戦後賠償で建設されたホテルインドネシアの2階に事務所兼宿舍の一室を借り切ってスタートした駐在員生活。好奇心に満ちた無我夢中の毎日であったが、同じく賠償で建築されたSARINAH百貨店のオープンに備えて電気製品の一括供給の契約に成功し、後に合併を果たすことになったゴーベル氏の工場でラジオ、テレビ、扇風機をはじめ一連の電気製品の組み立てをスタートすることになった。この間日本から巡航見本市船“さくら丸”が日本製商品を展示してタンジョンプリオク港を訪れ、初日にはスカルノ大統領が出席し日本語で“愛国の花”を歌ったことを覚えている。

しかしながら、65年9月30日に勃発したクーデターにより全てのビジネスは暗転し、外出禁止令の続く中、最初の駐在生活は1年余りで終わることとなった。その3ヵ月後にはシンガポールの代理店(オランダ商社)に駐在、そして67年にはクアラルンプールに建設されたマレーシア松下電器に出向した。シンガポールでは“血債問題”(戦時中に殺された華人の骨が建設地から数多く発掘され反日感情が蔓延)、マレーシアでは人種暴動(マレー人による華人商店の焼き打ち)など行く国々で必ずといっていいほど暴動・外出禁止令に遭遇した。シンガポールのSouth Bridge Roadのそばに今も聳え立つ慰霊碑は、当時の反日感情を沈静化するために日本政府が建立したものである。



⑤からゴーベル氏、筆者。松下幸之助氏=1971年

日本が経済大国の階段を上り始めた時期にアジア各

国でこのような事件が続発し、日本の海外事業は厳しい環境の中で育ってきたことになる。この間、インドネシアではスハルト政権が誕生し1967年に外資法が発表された。インドネシアも外資導入、技術移転、雇用増大を旗印に経済建設への一步を踏みだしたのである。

#### ☆ PTNationalGobel の設立

1970年代は日本企業がこぞってインドネシアに進出し、次々に合弁事業による生産活動を開始した時期である。SARINAH百貨店への電気製品の組み立て生産が縁で知り合ったゴーベル氏はマレーシアにいた私を訪ねて松下との合弁を模索していた。

最終的に70年の7月に条件が整い、資本金120万ドルの合弁会社PTNATIONAL GOBELが誕生した。松下側からは私を含めて4人が出向し、ゴーベル氏のCAWANG工場に130人の従業員と共にラジオ生産がスタートしたのである。70年代当初の日本企業のラッシュはすさまじくインドネシアへの外国投資の25%強を占める勢いで、そのオーバープレゼンスが問題になり始めていた。日系企業の多くは資金力、商売経験の豊かな華僑との合弁でありPTNATIONAL GOBELは資金、企業経験の乏しいプリブミとの合弁企業として何かと揶揄され、正直周りから競争の激しくなってきた先行きを危ぶまれることも少なくなかった。しかし、松下幸之助の「海外進出はその国に真に貢献し、社会から喜ばれるものでなければならない」という強い方針に沿って、時間をかけながらも辛抱強く進められることになった。

1974年1月の田中首相訪日の際に起こった反日暴動の際には多くの日系企業が投石や焼け打ちにあった。NATIONALはプリブミということで対象から外れ、従業員が身を持って守りきり、以後プリブミ企業としての自負と誇りを高めることになった。ゴーベル氏は反日暴動の中で唯一現地新聞に「田中首相歓迎」の広告を載せるという勇気ある行動を取り、プリブミ親日派として日系企業の間で評判を高めた。それが契機となり当時日系企業のイメージとなっていた“テレックスマネジメント”“エコノミックアニマル”という悪評を打ち消す先鞭をつけたHIMPUNAN（日本インドネシア合弁企業家協会）が組織された。日伊両国間の文化摩擦、“我”の主張から起こる数々の問題を“SALING MENGERTI”“SALING PERCAYA”“SALING MENGHARGAI”をモッ

トーに掲げて一体感と協調精神を育みながら新しい経営スタイルを作り上げるようになったのは、この反日暴動が契機になっていたことも事実である。私とゴーベル氏との信頼関係は様々な問題を根気よく話し合いながら解決する中で年々強まっていったが、その背景には毎年松下電器の経営方針発表会に2人でをこよなく愛し、アジアの将来に期待して常にゴーベル氏を激励し続けた。遂にはゴーベル氏が松下から学んだ究極の企業経営、国家経営の鍵となる人材育成のために100万ドルを寄贈し、若きインドネシア人経営者育成のための教育財団設立をも具体化させたのである。この教育財団は現在JETRO、AOTSの支援を得ながら年々人材育成の輪を広げている。

70年代にラジオ、テレビ、扇風機から始まった生産活動はラジカセ、洗濯機、冷蔵庫、部品、エアコン、ポンプへと広がり“ミニ松下”の様相を呈した。この間松下幸之助の指示を受けて営業畑出身の私は、製造担当副社長の特訓を1カ月日本で受けることになった。

80～90年代の輸出促進期を経てPANASONICグループの事業体は現在10数社、従業員数も10,000人を超える大所帯になっている。ゴーベル氏の夢であった全国各州への支店設置や裾野産業・中小企業育成の計画も順次進んでおり、経済の発展と共に着実に具現化されつつある。これらの底辺に流れるのは松下式の大家族的な経営スタイルであり、インドネシアの土壤に合った形でさらに大きく成長することを期待している。

残念ながらゴーベル氏は83年に病に倒れ53歳の若さで世を去った。その結果、私のインドネシア滞在も89年まで大幅に長引くこととなった。

#### ☆本格的なインドネシアの発展

着任当時7歳であった長男のラフマツは、私の在任中に中央大学に留学し、現在ゴーベルグループの総帥として活躍していることは喜ばしい限りである。80年代の輸出促進、90年代の製品棲み分け生産によるグローバル化対応の時期を経てインドネシアでの事業は、速度を上げてきた経済発展の中で、大輪の花を開かせる時期も近いと確信できる。



スハルト大統領への表敬と報告 = 1980年㊦ゴーベル氏、  
㊧松下正治会長（当時）



ゴーベル 2 世と松下政経塾へ = 2009 年

2000 年に松下電器を退いた現在もインドネシアとの絆が様々に続いている内容についてももう少し書き綴ってみたい。

退職後、イ政府からの依頼で自由貿易港を目指すバタム島の開発計画のお手伝いをするようになった。お蔭で今も年に 4 ～ 5 回はインドネシアに出張する機会があるが、このところ現地で会って話し合う世代は全て私が以前滞在していた時期の親父さん達の事業を継ぐ 2 世が大半である。

ゴーベル 2 世をはじめ、サプライヤーの事業継承者も殆どが海外での留学を終えたピカピカのビジネスマンが多い。彼らの多くは IT を駆使して斬新な経営手法で親父世代からの遺産を着実に拡大している。親父さん方と会っても、誇らしげに息子たちを紹介してくれる顔には自信と誇りがみなぎっていて頼もしい。

昨年招かれた労使関係のセミナーで 20 年ぶりに逢った M 君は NATIONAL GOBEL 時代の組合の委員長であり現在日本で言うところの連合の委員長を務めている。70 ～ 80 年代に毎年のように松下で行われた組合大会に派遣していたが、その彼が“日本で労使関係を学んだことが今日の私を作り上げてくれた”と自信に満ちて話す。“何かあればお手伝いしたい”ともいつてくれた。私が社長時代に採用した残留日本兵の遺児である H 君は今ゴーベル 2 世の右腕として日伊友好関係を支えている。残留日本兵の 2 世、3 世をサポートしてい

る“福祉友の会”の会長を務め、彼らに日本語を学ばせている“ミエ学園”（故小倉みえさんの基金で設立）の経営責任者として“志士の心”を持ち続けることをモットーに 2 世、3 世の社会を支援し続けている。

これらの頂点に立ってゴーベル 2 世のラフマツはギナンジャール氏の後を継いで現地のインドネシア・日本友好協会の理事長を務め、KADIN の副会長の立場ともども日伊友好の絆をさらに強めたいと日伊間を頻繁に飛び回っている。

私がこのところインドネシアへ出張するときの楽しみはこれら 2 世と会って話合い、彼らの新しく力強い息吹を感じる時であるといっている。

加えて、訪れる先々で今もって新しい発見に遭遇する。バタム島に連なるレンパング島を巡回した折には、戦争直後この島に 10 万人を超える日本兵が抑留されていたという事実を知った。当時ジャングルだけのこの地域で亡くなった兵士の墓地が残されており、地区の村長さんが墓守をしていて当時をしのばせる数々の地図や手書きの書類を見せてくれたのである（この件はその後テレビ局のプロデューサーと共にフォローし当時の実態を追い続けている）。

この 6 月には大阪府と姉妹都市関係にある東ジャワ州の知事一行が訪日し、大阪で初めて投資誘致のセミナーを行った。



バタム島開発の経験を踏まえ、新たに完成したスラバヤとマズウラ島を結ぶ大橋（写真㊨）を中心とした開発事業のお手伝いを頼まれた。70 歳を超えた身に少々荷が重い、インドネシアの若い世代の力を信じてお引き受けすることにした。

インドネシアの力強い発展を見ることが私に元気を与えてくれると信じているからである。



## 留学の思い出

高田 芳博 (2007年卒)



留学中に学友らと旅行も。前列の左端が筆者

英語の先生になろうと入った外大。たまたま目にとまったインドネシア語。勉強に励むでもなく、部活をするでもなく、週5日バイトをする日々。平凡な大学生だったので、ただ4年も勉強するのだから1度留学してみようか。同級生がインドネシア大学とガジャマダ大学に行くので、自分はバンドウンにしよう。安易にこう考えたのがきっかけで2005年にバンドウンのパジャジャラン大学 (UNPAD, Universitas Padjadjaran) に留学しました。

日本留学中の友達がバンドウン出身だったので、無茶を言って実家に泊めてもらい、そのままコス探しも手伝ってもらいました。他にも親戚の結婚式やお葬式に連れて行ってもらったり、あれは食べたか、ここは行ったかと本当に色々な所に連れて行ってくれました。今まで遠慮しがちだった私にとって、みんなの優しさは衝撃的でした。

UNPADでは、一般のキャンパスとは違う建物で外国人向けの授業が行われていました。1日3時間の授業があるだけで、文学部のクラスに顔を出すようなこともなく、他の学部のインドネシア人学生との交流はほとんどありませんでした。その分、昼からはモールへ遊びに行ったり、コスに戻って友達と話したりと、のんびりとした留学生活を送っていました。

アンコ (乗合バス) に乗っては割増料金を請求する運転手ともめたり、食中毒になってミミズを煎じたものを飲まされたり、日本では到底話しかけない人と友達になれたり、なぜか日本の小説にはまったり。そして、誕

生日にお祝いで水をかけられごはんをおごらされたり、“Jangan ganggu” がうまく言えずバカにされケンカしたり。どれも良い思い出です。



バイクで走った、今にも切れそうな吊り橋  
＝パガンダランで

留学したのはたった4カ月間で、本当にあつという間でした。もっと長く留学していたらとか、色々チャレンジしていれば、と今でもタラレバは尽きません。でも、短い期間でしたが、留学時の経験や反省、色々な人との出会いがあったおかげで、今の自分があるのだと思います。さまざまな体験は、きっとこれから先にも影響を与えていくことでしょう。小さなきっかけから始まった私とインドネシアの関係ですが、その偶然に本当に感謝しています。

現在、私は社会人3年目です。大阪のメーカーに勤めていて、インドネシアと全く関わりのない仕事です。年末年始はバリに旅行に行きました。近くのロンボク島 gili air の日の出の風景は脳裏に焼き付いています。ただ、それ以外はなんだかんだで、結局インドネシアとは無縁の日常です。

学んだ言葉、向こうでの日々、出会った人々、せっかく得たものなのに、それと関わらない生活というのは何だかさびしいものです。仕事とすると難しいですが、せめて少しでもインドネシアに関わった人生にしたいと思います。

というわけで、次回の南十字星会の集まりにはぜひ参加させて頂きたいと思います。諸先輩方から素敵なお話を伺い楽しい時間にしたいと考えておりますので、皆様宜しく願いいたします。



ロンボク島ギリ・アイルの日の出

## ジャカルタの今昔

渡邊 悠三 (1969年卒)



2010年9月22日に日本を発ち10月4日に Jakarta を去るまでほぼ2週間、Jakarta だけに滞在して「感傷旅行」をしてきた。宿泊先は Guest House。何せホテルと比べると格段に安い。朝飯付き(日本食)で、洗濯もしてくれて、PCの Network は使い放題である。それでお世話になったが、ロケーションもブロック M に近く、現役時代に23年前まで Kebayoran Baru に住んでいた身としても懐かしい。

私の職歴をご披露する。1969年に大阪外大インドネシア語科を卒業後、商社に入って南洋材を担当した。最初にインドネシアに来たのは1971年だった。以来、2年とか1年の任期でカリマンタン、スマトラ、シンガポールなどに単身赴任(ないしは独身)で、スラウェシやイリヤン(現パプア)も含めてインドネシア中を駆け回って、日本との間を行ったり来たりしてきた。そして最後に1982年～1987年までの5年間、家族ともども Jakarta に赴任した。その後1997年ごろに3日間だけ

Jakarta に出張してきたが、短期間なので印象は薄い。したがって、私の Jakarta 歴はどうしても23年前まで遡ってしまう。

一昨年、グループ会社で環境関連の事業をしている会社を退いて、いわゆる完全引退をした時に、体力的にも“あと10年を目途に、Activeに行こう”と決めた。昨年4月から千葉大に入学して院生として「学生」をしている。(そして、南十字星会関東支部の支部長もやらせてもらっている)。「年末に修論の提出を」と言われて、そのネタ探しもあって、今回の感傷旅行という気楽な旅に来たわけである。滞在中の9月28日には、Jakarta の南十字星会にも参加させてもらった。

空港から Taxi に乗る。昔 Jakarta にいた、という私話を聞いて、運転手は「変わっただろう!本当に変わった!」と何度も言う。その時は私も相槌を打っていた。ところが、Jakarta にしばらく居て、離れるさいは“やっぱり、よくも悪くも変わってないなあ!”という印象だった。

年相応の運動ということで毎朝、明け方の薄暗いうちに宿舎を出て、ウォーキングをした。歩道はアスファルトではない。かつては敷石が施されて、整備されたはずなのだが、今は穴ぼこだらけで入念に下を見て歩かないと危ない。並木が大きく育って歩道の真中に鎮座していても、伐採されないどころか、ところどころに大きな植木ポットが歩道のど真ん中に置いてあったりする。仕事の経歴上わかるのだが、敷石は正しく施工されていない。

車道は車とオートバイの波で活気があるが、道を横切るのは命がけ。大通りなどの側道と対向車線をみると、みんな信号を守っているようだ。しかし、始終どこかに車かオートバイ、バジヤイが走っている。いつまで待っても一気には渡れそうにないのだ(写真)。



そこで、信号に関わりなく、走るものが途切れた時点で急いで横切るという、昔ながらの手法を取った。こん

なことをするから車は“危ないぞ!”とばかりにクラクションを鳴らすのだろう。要するに「人間よりも車が優先されている街」と思えば分かりやすい。

1～2時間のウォーキングの後、宿舎に戻れば、シャワーを浴びて朝食。分かってしまえば“快適”だが、インドネシア語を全く理解できない初めての旅行者には「驚き」となるだろう。Guest House といっても、ボーイと女中とガードマンが居て、“Tuan!”の顔を常にうかがっている。そして“Tuan”たる日本人は数カ月単位で住んでいる人が多くて、下宿感覚なのだろう。それにしても何故か共有の食堂では食事をせず、各部屋で食事をする人が多いし、日本人同士でもほとんど会話を交わさない。“日本人は社交下手だなあ”とつくづく思う。半面、道を訊ねれば、ニコニコして一生懸命に教えてくれるインドネシア人と比べて“どちらがいいんだろう?”と考えてしまう。

ところが政府の Office とか、民間 Office などの“偉いさん”に会うとなると、彼らはほぼ例外なく、必要以上に居丈高になる。そこで働く Office Boy に対してだけでなく、私に対しても、身分が学生だと分かると同じである。

そうだ、インドネシアは「階層社会」だ。気になっていた交通事情、宿舎での使用人の対応など、どれをとっても「階層社会」をキーワードにすれば理解しやすいかもしれない。

ある日の午後、モナスの塔と博物館を訪れた（写真）。



白状すると“どちらも私にとって初めて訪れる場所”である。Keb.Baru では、今回初めて Bajai にも乗った。ちなみに交通法規上、現在では Jakarta では、ベチャは禁止となっているそうである。施設はともに極めて訪問者が少ないという印象だった。モナス（独立記念塔）の地下の博物館では「独立史」の説明図が掲示されて

いるが、人はまばらである。オランダ時代のことはミソクソだが、日本軍のことはさほど悪くは描いていない。私は専門的に取り組んだ訳ではないがインドネシアの現代史＝独立史ということ言えば、どうやらスカルノとスハルトの時代を一つに括ってもよいのかな、と思い始めている。

2つの時代の間では随分と統治手法や時代背景も異なるが、共通点は「インドネシアの統一を目指した時代」ではないか、と思っている。日本のマスコミなどでも誤解が多いかもしれないが、現代のインドネシアが「インドネシア」として1つの国としてまとまろうとしたのは時代的には新しく、その背景となる共通項は「かつてオランダの植民地だった」ということだけだろう。それ以前の王国では、統治領がオーバーラップする部分もあるが、基本的には時代毎に異なる版図である。日本のように「国土・民族・言語」がほとんど単一というのは世界でも珍しいのだ。そしてスハルト体制崩壊後、短期政権が続いて、ユドヨノ政権で、そろそろ安定してほしいというのが、内外の意向のようだが、歴史はどう流れて行くか。

何が言いたいかというと、所与の状況として「ひとつのインドネシア」があったのではなく、放っておけば小国乱立になるのを避けて、大インドネシアでまとまろうとした。この点では、スカルノもスハルトも同じだろうと私には思える。そしてそのような状況は「インドネシアが特殊」というわけではない。ヨーロッパの先例を見るまでもなく世界中がそうなのであって、「日本が（ほぼ単一の文化という意味で）特殊」なのだ。そういう視野を持って現代のインドネシアを見つめてみたい。学生に戻った私の願いでもある。



ちょっと理屈っぽくなったが、長年過ごしたインドネシアはやはり私にとって“第二の故郷”。懐かしさを実感できた「感傷旅行」だった。ジャカルタ南十字星会の方々とお食したレストランのあるビル（写真）も“躍進”を

感じる。皆さんいろいろありがとうございました。

## わが心のインドネシア

林 喜久雄 (1960 年卒)



### 〈第1章 ふたつの驚き〉

2011年5月31日から6月3日まで、実に22年ぶりにインドネシアを訪問した。ジャカルタの交通渋滞、林立する高層ビル、絶好調の経済。これらは想定内だったが、2つの驚きに遭遇した。

まず外なる驚き。都会（ジャカルタ）や田舎（ソロ）を問わず、女性の服装のイスラム化だ。スカーフで頭髪を包み、踝までのスカートやざっくりした長ズボン着用。むき出しの手足にお目にかかることは殆どない。

次に内なる驚きは、筆者のインドネシア語が意外なほど錆びついてないことだった。ジャワ語訛りにも戸惑うことはなかったし、誰からも「インドネシア語お上手ですね」と言われなかったことが何よりも嬉しかった。「お上手ですね」と言われているうちは、まだほんものではないからだ。

筆者は1960年外大卒業と同時に日綿実業（後にニチメン現双日）に入社、1996年まで36年間同社に勤務した。この間駐在5回、約17年間をインドネシアで過ごした。最初の駐在が1963年2月から65年12月、スカルノ政権末期、帰国の3ヶ月前にあの「9月30日事件」が起きている。2回目が1968年3月から1971年2月までの約3年間。奇しくもスハルト政権と同じ年のスタートであった。最後の5回目が1984年2月から1989年3月までの5年間だ。四捨五入的に言えば最初の8年間がスカルノのインドネシア、それ以外は

全てスハルトのインドネシアとのお付き合いということになる。

スハルト政権時代をどうみるか。「開発の父」という評価はほぼ固まったといえようが、ほかに「強権的」「経済最優先」「ファミリービジネス」「アセアンの盟主」「GDPの20倍増」など様々な見方が入り乱れている。

独断と偏見で1つだけ言わせてもらえば、世界最大のイスラム人口を抱える当時のインドネシアのあり方こそイスラム教国の模範であり、理想の姿だと欧米特にアメリカで高い評価を得た。国際的な地位は大いに上がったが、敬虔なイスラム教徒にとっては、辛く、ある意味では屈辱的な30年間ではなかったか。

スハルトの退陣と共に強権的な支配体制が緩み、ハジビ、ワヒドと親イスラム色の強い政権が誕生すると、鬱積していたイスラム教徒の不満はバリ島爆弾事件（2002年）、ジャカルタのホテル爆破事件（2003年）、オーストラリア大使館爆発事件（2004年）と、一気にジュマ・イスラミア等の過激派テロ活動へと連なって行くのだ。

さらに争議権解禁によるストの頻発とあいまって、ソニーをはじめ旭化成、カネボウ、京セラなど多くの日本企業の撤退が続出。5代目メガワティの時代には「自由アチェ運動」との和平交渉も決裂して、非常事態宣言が発せられることとなる。

2004年10月、初の直接選挙による6代目ユドヨノ大統領の誕生。一見頼りなさそうに見え、世論に叩かれながらも、ある種のツキもあり、見事な手腕で政治・経済・社会を軌道に乗せてゆく。ユドヨノが2期8年の任期を成功裡に全うすることはほぼ間違いないだろう。中興の祖といわれる時代が来るような予感もする。

ある種のツキとは敬虔なイスラム教徒と過激なイスラム教徒の離反である。敬虔なイスラム教徒の垂れ込みによって、過激なイスラム教徒の潜伏場所が次々と通報され、警察軍によって殲滅されていったのだ。

思うに女性の服装のイスラム化は本来バランス感覚に優れたインドネシア社会が経済最優先のスハルト路線を一部修正し、宗教と経済成長両方に配慮した、いわば妥協の産物のような気がするのだが、どうだろう。

さて、今回のインドネシア出張は鋳物工場を探すのが目的であった。三重県のある鋳物企業は15年前に思い切って、生産拠点を中国に移したのだが、「1人っ子政策」の結果、最近では求人広告をうっても1人の

応募もないほど人手不足と労賃の高騰は深刻だ。生き残りをかけ新しい供給源として、インドネシアに白羽の矢を立てたのだ。ジョグジャ・ソロを中心とする中部ジャワには鋤、鎌、鋤等の農器具、砂糖工場用の機械等の製作、修理を行う中小の鋳物工場が古くはオランダ時代から多数存在し、今でもその数 200 とも 300 ともいわれている。

訪問したソロのある中堅鋳物企業とは帰国後もメールを通じて価格交渉の最中だが、英語でのやり取りがこみいってくると相手側はインドネシア語で本音を言うのが面白い。微妙な表現や本音は英語では今ひとつぴったり来ないようだ。

## 《第 2 章 プロジェクトと合併》

筆者はニチメン入社から卒業まで一貫してプラント本部からのジャカルタ駐在であった。

いろんなプラント案件を手掛けた。冷蔵—冷凍—製氷のいわゆるコールドチェーンを北スマトラ、中部ジャワ、イリアンジャヤに建設するプラントも担当した。北スマトラでのプラント建設が完了して間もない、1975 年 1 月 6 日、日本の大型タンカー祥和丸がマラッカ海峡で座礁し、原油が流出する事故があった。

水産庁の外郭団体でこのプラントを運営する事業会社の社長に会った。「これからという時に大変ですね」「まあ、大変といやあ大変だが…」と妙に機嫌が良い。よくよく聞くと事故の補償金で、10 年での返済計画だった設備費が一挙にタダになったということらしい。もう時効だから、明かしても差し支えないだろう。

5 回目の駐在時に担当したのが Proyek Kertas Kraft Aceh であった。セメント袋用のクラフト紙製造工場をアチェに建設することになった。総工費約 700 億円。筆者が手掛けた最大のプロジェクトである。相手側は工業省、日本側は日立造船とニチメンだ。1986 年の操業開始からもう 25 年、早いものだ。繊維のプラントでは紡績（綿花—糸）、織布（糸—布）、仕上（布の漂白、染色、捺染—生地）、縫製（生地—最終製品＝服）と川上から川下まで、全てのプラントを経験した。

忘れられない客先が GKBI (Gabungan Koperasi Batik Indonesia = インドネシア・バティック協同組合連合会)。ニチメンにとって、インドネシアに於ける最大の繊維機械の納入先であり、且つ合併の提携先でもある。GKBI に限らず零細家内工業の強化という基本的な構

想を政策化し、指導し、実施したのが「協同組合の父」モハマッド・ハッタ元副大統領であった。バティックを製造する協同組合がジャワ島各地に 40 もあり、組合員数約 5000 人、女工さんは約 50 万人ともいわれている。

1957 年以降、組合の共同出資などで、中部ジャワ Medari に紡・織・仕上一貫の 2 工場が次々建設された。これによって GKBI グループの白生地生産能力は飛躍的に拡大することになった。

1971 年 6 月、GKBI と日本側大和紡績（ダイワボウ）、ニチメン、IFC (International Finance Corporation=世界銀行の子会社) 4 社の出資による合弁会社、PT.Primatexco Indonesia (PRIMATEX) が設立された。目的は輸入白生地を全て国産化しようというものだ。当時アイディット率いるインドネシア共産党がまだ健在で、国有化というカントリーリスクを考慮して株主に国際機関を取り込むことにしたのだ。



PRIMATEX 20 周年行事



PRIMATEX 株主  
⑤からダイワボウ、G K B I、ニチメン

翌 1972 年 7 月にはスハルト大統領やハッタ元副大統領の臨席を得て盛大な開所式が挙行された。

1970 年代はまさに第 1 次繊維合弁進出ブームで 14 件の日系合弁が活動を開始した。その中であって、

PRIMATEX は次の点で異彩を放つ。第 1 に合弁のパートナーを華商資本でなく、Pribumi 資本と組んだこと。第 2 に合弁の製品を唯一コットン（綿）とし、第 3 に工場を西ジャワの都市部でなく、中部ジャワのド田舎（Batang）に建てたことだ。

Pribumi 企業と綿 100% の製品を地方で生産するという我々の選択の正否は、その後の歴史の中に見出すことができる。

1990 年 10 月ミシン 800 台の縫製工場、1991 年 10 月染色+捺染（プリント）工場、1992 年 10 月ニット糸専用の紡績工場、さらに 1999 年 3 月キャンバス等産業資材用織物工場とこの 3 社を基幹株主とする合弁事業 4 件が、次々と操業を開始したのだ。

1971 年の PRIMATEX の設立から 40 年、ダイワボウも GKBI もこれ以外の相手とは組んでいない。

「よくもまあ飽きもせず」愚直に、不器用に、そして誠実に…。

### 《第 3 章 一気通貫》

1996 年 2 月、筆者は定年前にニチメンを卒業して、ダイワボウ情報システム（以下 DIS）に転職した。DIS はダイワボウが開発した織布工場の生産管理システムを販売するため 1982 年 4 月に設立された会社である。資本金 2 千万円、役員、社員合わせて 10 名。初年度の売上は約 4 億円、2 千万円の赤字であった。

翌年からは扱い商品をパソコンなど情報機器へと大きく販売方針を転換する。

当時パソコンは NEC、富士通、アップルなど内外各メーカーがほぼ 3 ヶ月ごとに新機種を発表するという生鮮食品並みの大変な時代。

一方、紡績会社は半年分ぐらいの原綿を在庫するのが当たり前で、この感覚をパソコン業界にも持ち込み、陳腐化のリスクも恐れず「在庫販売」を始めたのだ。これが馬鹿あたりにあたった。

同業他社では受注から納品まで 1～2 週間かかるころを、DIS は 5 時まで注文すると翌日配送を可能にしたのである。在庫販売を始めた 2 年度からほぼ倍々ゲームで売上を伸ばし、筆者が入社した 14 年後の 1996 年には 1900 億円に達していた。現時点（2011 年）では売上約 4000 億円、取扱うパソコンは年間約 150 万台、日本で販売されるパソコンの 1 割強が DIS 経由で流通しており、業界トップの地位に登りつめたのであ

る。

1991 年株式の店頭登録、1997 年には東阪両証券取引所 2 部に。筆者が勤務した時期は東証・大証第 1 部へと一気に駆け上がった DIS の第 2 成長期に相当する。忙しく、充実して、楽しく、そしてスリルとサスペンスに満ちた 5 年間であった。

2001 年役員定年を迎え、これで終わりかと思っていた矢先、DIS の子会社で 7 店舗を有する小売り専門の「パソコンの館」の社長を拝命した。その後もまた DIS 時代以上に波乱万丈の 5 年間であった。2002 年、沼津に本社を置く中堅小売で 17 店舗を持つ会社との合併を果たした。「合併基本契約書」も「合弁基本契約書」と内容的には殆ど変わりがない。合併交渉ではインドネシアでの一連の合弁設立体験が大いに役立った。

そして 2004 年、人事総務、財務経理、営業企画の管理職各 1 名と筆者を含むド素人の上場準備チームを統括して、この新会社の株式をジャスダック証券取引所に上場することができたのだ。

ニチメン卒業後、ダイワボウグループの関連会社に約 15 年勤めたことになる。この間 DIS で平取、「パソコンの館」で社長、合併新会社では会長、常勤監査役、常務を歴任した。残るは専務だけか、まあ年齢からも無理かなと思っていた。

ところが、顧問を 2 年間勤めていたある会社から役員就任の要請を受けた。「肩書きは」と聞かれ、間髪をいれず「専務をお願いします」。これで平取から会長まで役員職全てを体験するという夢の一気通貫が完成したのである。

### 《終章 わが心のインドネシア》

振り返れば、高校時代に大学進学について親父に相談したのが、インドネシアとの関わりをもつ第 1 歩であった。「インドネシア語をやれ」。躊躇なく言われた。太平洋戦争当時、親父は軍属としてインドネシアに駐在、大のインドネシア好きになって帰国したのだ。

今回の訪問で改めて感じたのは、第 2、第 3 の人生の活躍の場としてインドネシアに回帰され、嬉々として働いておられる OB 達の多いことである。

終戦時の残留日本将兵は 3000 人とも 4000 人ともいわれる。国や上官の命令が機能なくなり、しかも不利な戦いを承知の上で、彼らを独立軍に馳せ参じさせたものは何だったのだろうか？ 太平洋戦争の終末期、

他の地域でこれと似た事象は見当たらない。インドネシア特有の現象であろう。

定年を迎えても尚インドネシアに活躍の場を持ち続けている多くの人々の心情と一脈通ずるような気がしてならない。簡単にいえば「離れがたい、去りがたい」のだ、きっと。

一見インドネシアとかかわりのない最近の15年間、筆者の心の中にも常にインドネシアへの思いが息づいていたような気がする。

わが心のインドネシア…。政治、経済、社会いずれの分野でもアジアで、いや世界で最も安定した国として着実な成長軌道に乗ったこの国に、心からなる拍手と声援を送り続けたい。



捺染工場の定礎式

## 古い思い出から 新たな取り組みへ

石川 恵二 (1962年卒)



終戦後、大阪外専学生だった9歳年上の私の兄、欣也が家でインドネシア語の単語を連発するので、家族全員が *terima kasih* を覚えていた。内藤先生、中西先生、イスマイル・ナジール先生のお名前も、実は外大受験の前から私は知っていた。兄の同級生数名が家にお見えになり、将棋有段者の方からは将棋の解説をしていただいたこともあった。そんな訳で、私が外大願

書提出の際、インドネシア語以外の選択肢は全くなかった。外大入学後も、大阪市立中学校教員をされていた同窓の先輩から家庭教師の口を紹介していただいた。大先輩諸氏に感謝の気持ちを抱きながらペンを執っている。

ちょうど半世紀前の1962年に卒業し入社した会社(兼松㈱)の配属先は木材部南洋材課であった。インドネシアの時代到来ということで、私が入社後、木材部門ではインドネシア語の学生を毎年のように採用した。私は3回、合計4年以上のマレーシア・サバ州(旧英領北ボルネオ)サンダカン駐在を経て、1971年末から1年間、ジャカルタ駐在員として赴任した。ジャカルタをベースに各地の木材積出港回りと商談のためのシンガポールへの出張があり、駐在員とは名ばかり、実態は動き回る長期出張員の立場であった。

ジャカルタ赴任前のスマトラの森林調査では、乗っていた小さなボートがインド洋にてエンジン故障で浸水、一晩動けなくなり、携行の食料、飲み物も油まみれで、翌朝、浜辺の住民から入手した椰子の実のうまかったことが思い出される。その後、黄疸で3週間入院という付録もついた。赤道直下の西カリマンタン・ポンティアナックでは、スピードボートで木材積出地点まで移動、木材積取船の海図でチェックすると赤道をまたいでいたことが判明した。スマトラのプカンバルからパダンへ車で移動した際には途中に赤道の標識があった



(写真、現在は昔のような小さな標識ではなく、大きな赤道儀が建立されている模様)。結局、航空機を含めて陸海空で赤道を越えたことになる。

インドネシアの木材事情であるが、1960年代後半からの約10年間、原木の対日輸出量が急増した。それとともに、Masyarakat Perakayuan Indonesia (MPI = イ

インドネシア木材協会) から日本木材輸入協会に対して 2 カ国会議開催の要求があり、輸入協会としても MPI の要求に応じるようになった。日伊それぞれの代表が出席の本会議とは別に、ジャカルタでは、毎月、実務者レベルの作業部会があり、輸入協会ジャカルタ支部長の私が我が国の木材需給状況や価格動向を説明した時期もあった。

1975 年、フィリピン、マレーシア・サバ州、インドネシアの木材供給国が同盟を結び、産油国 OPEC の木材版、所謂グリーン OPEC と言われた South East Asia Lumber Producers' Association (SEALPA) を設立、国際会議の舞台は 2 カ国会議から 4 カ国会議へ移った。

2 回目のジャカルタ駐在の 1976 年 4 月、マニラでの 4 カ国会議出席のため、私はジャカルタを出発したものの、4 カ月前に罹ったマラリアが再発、途中のシンガポールで入院する羽目になった。マラリア原虫は同年 12 月、大阪でも暴れ出したが、東大熱帯疫学研究室の海老沢功先生のお陰で完治した。余談ではあるが、マラリアを体験した私には、高熱になる 1～2 時間前に、今から体温が 40 度か 41 度になると予言出来たので、内外の入院先では関係者がその正確さに驚いた。



メランティ(ラワン)の巨木

その後、南洋材を取り巻く環境は一変した。フィリピンは早い段階で原木輸出禁止に踏み切ったが、既に物理的に出すものがなくなっていた。やがてマレーシア・サバ州も資源が枯渇、同じような道をたどることとなる。開発のスタートが遅く余裕のあったインドネシアでも資源の有効活用を図り、付加価値を高める目的で、1985 年末をもって原木の完全輸出禁止を実施した。日本の合板メーカーでは一時ロシア材に頼った時期もあったが、現在、原材料は過半が国産の杉やカラ松となっている。

インドネシアからの原木輸入が途絶え、私はインドネシアと無縁のラインに進むことになった。海外で病に倒れたことで「傷痍軍人」、赴任はすべて単身で、留守中に生まれた 2 人の娘と親子の初対面は 1 年後ということで「母子家庭」のレッテルも貼られた私の 23 年間の半生は終わった。しかし、その後も木材やインドネシアが常に私の心の中にあった。

今、新しいことに取り組んでいる。幸い、我が横浜は一般市民にも国際貢献出来る道が拓かれている。2002 年日韓ワールドカップサッカー大会の際、私は横浜市の通訳案内ボランティア活動に参加、その翌年から、決勝戦会場であった横浜国際総合競技場(現・日産スタジアム)での見学者案内ボランティアをしている。

また、2002 年のボランティア有志で結成の「よこはま 2002」に入会した。会員二百数十名。語学対応の企画に関し、横浜市との折衝窓口を私が担当、会員との調整など結構忙しい身である。横浜市港湾局への飛び込み訪問が奏功した、外国客船乗客の案内・誘導活動は 7 年間続き、会の活動のコアとなっている(写真)。



最近の活動の主なものに、2008 年のアフリカ開発国際会議 (TICAD IV)、2010 年の APEC、2011 年の世界トライアスロン選手権大会(写真⑤ = スイスの選手と)がある。

いずれも会の活動実績が評価され、横浜市から指名されるまでになった。TICADIV や APEC は半年前から準備にかかり、報道陣の取材も受ける。「語学はどこで習得？」の質問に「海外駐在と大阪外大インドネシア語卒」と答えると、堪能でなくても「得意の英語とインドネシア語」という私の紹介記事になる。





横浜でインドネシア人に出会うことが多い。外国客船のインドネシア人クルーは英語をしゃべり、表情にも余裕がある。12月のサッカーのクラブワールドカップ選手権(トヨタカップ)観戦にインドネシアから来た家族連れ。そして、仲間同士の相部屋だが家賃が30万円以上の外国人対応の月ぎめ高級マンションに住むIT産業関係者たち…。随分驚かされる話だが、実際に私が見た現実のことである。インドネシア人も変わって来ているのだ。いつまでも過去の先入観にとらわれてはいけないと、新しいインドネシア人の姿を見て、私は日々気持ちを新たにしている。

---

## インドネシアとの関わり

増田 崇行 (2007年卒)

---



南十字星会の総会受け付けで。左端が筆者

2007年卒業の増田崇行です。ついに寄稿の順番が回ってきました。専門商社の財務担当として働いており、現在はたまにインドネシア現地での資金調達の相談があるぐらい。それで私事ですが、これまでのインドネシアとの関わりについて書いてみたいと思います。

最初にインドネシアのことを意識したのは、小学1年

生の時。インドネシア人の女の子の同級生がいて、私というよりも、その子と私の母親同士が仲良くなったようです。自宅近くに国営石油会社プルタミアの大阪駐在員用の社宅があり、そこから通っていました。ともかく、この出会いがきっかけで、母は「インドネシア人はいい人」「インドネシアは必ずこれから成長する国」としきりに言うようになります。

インドネシアにすっかりはまった母は、関西インドネシア友好協会(関イ連)の会員になり、暫くすると自宅が協会の事務局に。私は関イ連ニュースの発送の宛名シールを貼ったりしていました。初めてインドネシアに行ったのは1992年、小学4年生の時で、バリやジョグジャカルタに行きました。

進路を決めたのは、インドネシアを意識する環境が身近にあったこと、テレビで1998年のアジア通貨危機の際のデモや政権崩壊の様子を見て、その熱いエネルギーに感動したからです。このアジア通貨危機がきっかけで、京大、神戸大、大阪大などのインドネシア人留学生が中心になって母国支援のためのチャリティーコンサートが行われ、その手伝いをしました。また、留学生との交流のほかに、領事館主催の式典に呼ばれることもありました。

大学入学後は、ソフトテニス部漬けの毎日でしたので、ほとんど勉強しませんでした。運よくダルマシスワ(インドネシア政府の奨学金留学制度)に合格して、留学することになりました。留学先は、Universitas Negeri Yogyakarta (UNY)。有名なガジャマダ大学の隣にある旧教育大学で、規模は小さく、日本人留学生も私1人、外国人用の語学プログラムはなし、といった環境です。でも、通常の授業に出て語学の向上はできたと思います。ダルマシスワは大学を選べないことが難点ですが、世界中から集められた留学生との交流、インドネシアのことが好きな人が世界中にいるということを認識させてくれ、共通使用語が当初は英語だったのが、1年経ってインドネシア語に変わったのは、ちょっとした感動でした。留学は2005年8月まで。最後の1カ月は、ジャカルタで高岡先輩のご支援もありマンガ教室でインターン経験をしましたし、アチェの地震の際は、先生方にご心配いただきました。



ボロボドゥール遺跡を訪れた時の記念写真

卒業・就職後は、里先輩のご紹介で、南十字星会の幹事メンバーに入り、主に会の財産である名簿の管理を行いました。山口前会長、岩谷さん、宮崎現会長といった方々が同窓会のあり方を議論し、行事の実行、ユニークで特徴ある会報の発行、HPの開設、2年に1度の総会等々行っていることで、素晴らしい組織になっていると思います。転勤で関東支部に移ってから名簿係のお手伝い。より完全を目指していますので、引越し等で転居される方は、お知らせください。

今後もいろいろな出会いに感謝しつつ、熱いインドネシアと関わっていききたいと思います。

## 東南アジアを転々 現地の人々に学ぶ

辻 修司 (1964年卒)



1967年8月のある日。まだ、あたりは明るかった。マニラ空港に到着。真っ青な空、こんな青空を今まで見たことはなかった。ヤシの木の強烈な臭いが、生暖

かい風に乗って鼻をツツと刺す。ついにこの日が来た。

もうちょっとやそつとでは日本へ帰れない。たとえ親が死んでも。強い決意がふつふつと湧いてくる。何事にも積極的に正面からぶつかっていかう。心の中にしっかりと刻んだ。ただ、初めての海外駐在生活。一方では心細さと不安もあった。イミグレも税関も無事に通過して外に出る。先輩駐在員と中国系フィリピン人青年の2人がニコニコしながら出迎えてくれた。

会社の阪田商会(後にサカタインクス)では海外部門に所属。“商社”であり、繊維以外は何を扱ってもよい方針だった。翌朝からいよいよ現地での仕事が始まった。英語には少しは自信があったが、ちょっと様子がおかしい。発音が違う。聞き取れない。頭が真っ白だ。毎日日々、夜にアパートへ戻ると疲れがどっと出て、何も食べたくない。マニラはこの頃、まだ第2次世界大戦後の空気が強く残っていた。タクシーに乗るのはこわごわ。いつどこで運転手やその仲間の連中にひどい目にあうか。治安は非常に悪く、知人は何人も“ホールドアップ”されていた。こんな状況が毎日続いていたが、本社も1年後には他社が新車に変える時にその中古車を買ってくれて、自分の車で仕事ができるようになった。おかげで成績も随分良くなる。マニラでの生活が3年過ぎ、帰国が決まっていたが「セブ島にオートバイ販売の拠点を、行ってくれないか」と言われた。新しいところでやるのも面白いだろう。

すぐOKし、セブ島に移動した。活動地域はフィリピンの南半分にあるビサヤス、ミンナダオと呼ばれる地方である。毎月飽きもせずこの地方を2、3週間、村から村へと移動し、村の有力者、村の銀

行、大きな商店(売っている品物は問わず)を訪ねて、オートバイ市場を調べた。この時代、日本人がこんな地方まで出かけることはまずなかったので親切にしてくれた(セブ島で日本人が1人いると聞いていたが会わなかった)。

泊まるところに難があった。1日1ドルと安いものの、ベッドにはマットがなくスプリングの上にシーツが1枚敷いてあるだけ。背中が痛いし、ギシギシ音がする。その上、蚊がぶんぶん。しかし、毎日充実していた。

目標は本社のセールスを超えること。3年目に達成し、次の駐在員へ引き継いだ。彼は3カ月で病気になり帰国。その後はセブ島に駐在員を置いていない。

インドネシア駐在が始まるのはまだまだ先だが、セブ

島時代に学んだことが後の仕事や人生に大いに役立っていく。経営学者であり思想家でもあるドラッカーが日本に紹介されたのもこの頃。新鮮で、著書も真剣に読んだ。人間の生き方についても考えた。「人間はどこから来たのか?死後どこに行くのか?」。(写真は、初の海外赴任。ヤシのそばでマニラ湾をバックに)



セブ島の小高い丘の上にお寺がある。夜その寺から見上げる空は格別。星が、それこそすぐ手の届きそうなところに、煌めいている。セブ島の隣のボホールと呼ばれる島から小舟でセブ島へ戻るさい、大魚の群れが泳いで付いてくる。夢心地のようだった。台風が接近し、急きょ「AIR タクシー」に乗ったことがある。座席は2つ。空気調整装置がなくて、上空では気温が下がる。震えが止まらない。空の上が実に寒いことを、身をもって知った。セブ島駐在3年、いったん帰国する。病気もせず、元気に過ごせたのはよかった。

1975～78年はオーストラリア駐在、1985～89年までシンガポール駐在。そして、いよいよ1991年からインドネシア駐在だ。このときから本業の印刷インキの現地製造販売の仕事が始まる。それまで先輩が苦勞を重ねてこられたが、ジョイントベンチャー先からいろいろな要求が出て、ジャカルタ駐在が実現した。やっと“舞台の袖”に顔を少し出すことになる。今までやったことのない仕事。また1からだ。しかし、何も怖くはなかった。とにかく耐えて、耐えて、耐えた。真正面から向かっていけば少しずつ道が開ける。あちこちから助けが来る。使い物にならなくなっていたインドネシア語も身につけてきた。そんなこんな3年が経った頃には、ジャカルタの会社も黒字になった。この間ゴルフは1度もしなかった。そうこうしているうちに、本社からも期待されるようになってきた(写真④は2005年8月、ジャカルタでの15周年記念イベント)。更なる努力。ローカル社員も自分の仕事に集中する。実績が上がる。互いに協力し合

うようになると、会社もどんどん伸びていくようだった。

いろんな経験を通してインドネシアの人々の良い点が見えてくる。それまで「問題とっていたこと」が、問題でなくなり、互いに協力して解決策を見つけ出し出している。インドネシアで生活するのが生きがいとなり、楽しいと感じる。不思議なことに、歯車がかみ合うと、自然に周りに人々が寄ってきて、情報も集まる。ジャカルタは1995年頃から少しずつ近代的になってきた。長い間空き地だったところが徐々に埋まる。自分にも変化が来た。東南アジア支配人を任され、フィリピン、マレーシア、ベトナム、タイへも出かける。そしてインドを開拓する機会が訪れた。またまた、ゼロからの仕事だ。本社が合併を考えていた会社が潰れ、どう切り込むか。とにかく、インド人の相棒を決め、2人でインドの印刷会社を回り始めた。毎月2週間インド中の印刷会社を5年間回った。少しずつ道が開けてきた(写真⑤はインドで)。注文が取れると、ジャカルタから出荷する。そして自信をもって本社に提案。デリーの郊外に工場を建てたいと思ったのだ。当時、日本企業がインドに進出する機運はまだなかった。ほんの数社出ているが“様子見”の商売だ。説得には時間が掛かったが、こちらも引けない。100%日本側が株を持てるならOKということで承諾を得る。半年後インド政府から許可が取れ、工場建設に入る。ここでも耐えに耐えた。インドネシア人と同様、フィリピン人もインド人も好きになっていた。会話が途切れない。当然なことだが、それぞれ国の言語があり、性格もまちまち。しきたりや習慣も違う。そして、いつも帰るところはジャカルタだった。ホッとする。故郷なのだ。どの国も伝統を守りながら、破壊があり、発展していく。物質的には人間は進歩しているようでも、精神的にはどうか。何千年も変わってはいないのではないか。「自分はどこから来て、どこへ行くのか」。誰がその回答をくれるのか。時には生きがいを覚えたり、悲哀を感じたりしながら、今後も「Hidup secara adil」。結局1991年から2007年までジャカルタで生活し、退職した。2007年から現在までバンコクで生活するも、Bahasa Thaiには悩まされている。



ジャカルタの Taman Mini で



---

## 20年ぶりのジャワ ノスタルジー・ツアー

坂口 隆史 (1974年卒)

---



2012年6月に諸般の事情から60歳で会社を退職したのを機に、8月にジャワを訪問してきた。約半月間のノスタルジー・ツアーであった。まずジョグジャカルタ・ソロを訪ねた後、スラバヤを訪問。最後はジャカルタに寄った。私は1974年に大和銀行(現:りそな銀行)に入行し、1982年から約5年間ジャカルタにある合併銀行に勤務。いったん帰国し国内支店を経験した後、1991年に再度インドネシアへ。この時は、当初3年間のスラバヤ駐在を経てジャカルタへ転勤し、最終1995年に帰国。1978年のインドネシア大学での企業派遣語学研修生時代を含め通算10年余りのインドネシア暮らしとなった。

特にスラバヤ時代は、当時唯一の現地駐在日本人として、それも家族帯同であったので、スラバヤ・ジャパクラブや日本人学校のお手伝いなど公私共に多忙で、かつ充実した3年間を過ごした。今回の旅の主目的はこのスラバヤ訪問にあった。市中央のTUNJUNGANプラザ界隈の高層ビル化。マクドナルドやケンタッキー、サークルKなどの外資チェーンの展開。車の洪水による交通渋滞など予想通り。残念であったのは、駐在当時親しくしていただいた日本人の方がほとんどおられず(20年も経っておれば当然だが)情報交換・収集もままならず、さらにタクシーと徒歩での移動では行動に制限があり、十分に今のスラバヤの顔が見られなかったことである。幸いにも現在の総領事が若い頃から親しくしていただいていた方なので、現地情勢をお伺いすることは出来た。最も楽しみにしていたのは、私の元職場(大和ブルダニア銀行: 現りそなブルダニア銀行のスラバヤ支店)訪問であった。20年前の支店開設時採用した女子職員が支店長(写真、右から3人目)となっていたのには驚くとともに、採用した立場としてうれしく感じた。女性の進出活躍ぶりは、さすがカルティニの国だなどと納得。ちなみに今回の旅では列車やバスを利用したが、ジャカルタのバスウェイ(専用車線を走るエアコン付きバス。料金はやや高め)やジャカルタ・バンドン間の列車には、婦人専用の座席や車両(写真⑥ボゴール駅で)が用意されていた。ただ、辛口な感想を述べると、通勤電車の屋根にたくさんの人が乗っているのを目撃したが、運輸・交通政策上これらの異常な状態を改善することの方が、婦人専用車設置よりも優先されるべきかとは思ったが。ところで、スラバヤを州都とする東ジャワ州政府は大阪府と姉妹都市の関係にあることはご

存知でしょうか。その姉妹都市契約締結(1984年)の時、当時ジャカルタ本店勤務であったがスラバヤへ出張し、黒子役としてお手伝いをした。その調印式でのこと、予定時刻を過ぎても州知事一行がなかなか現れない。待っておられる府の方々のイライラぶりが伝わってくる。ようやく現れて、口にした第一声は「ジャランニヤマチェット」。懐かしい思い出だ。



大阪府と東ジャワ州政府とは当初相互に知事が訪問するなどの親密関係であったが、その後やや下火になっていた。しかしながら、最近インドネシアが見直されるに伴い、インドネシア第2の商業・港湾都市スラバヤも改めて脚光をあびつつあるようであり、楽しみである。

スラバヤ時代の思い出を、もう1つ披露させていだきたい。華僑取引先を、担保に瑕疵があることが発覚したので、担保差し替え交渉のため現地職員帯同のうえ訪問した。突然社長が、部屋の鍵を掛け、コーラの瓶を振り上げ、迫ってきた。「日本人は我々インドネシア人、企業を食い物にしている。搾取している。この部屋でお前の身に何が起ころうとも、警察には目をつぶらせるから覚悟しろ!」。同行していた行員が「日本人のおかげで私たちは銀行業務を学び、今の私がいる。まずは私を殴れ」と身を挺してかばってくれた。その勢いに呑まれ、社長は瓶を下し部屋の鍵を開けた。別れ際に「日本人学校へ通っている2人の子供に気をつけろ!」の捨て台詞。結局1ヵ月ほどホテルに避難し、ほとぼりの冷めるまで、暫くガードマン(現職の警察官)を雇うこと

となった。この行員の言葉、行動は今も決して忘れることができない。(㊦はスバラヤ市街地風景)



旅の最後のジャカルタでは、大阪外大インドネシア語科卒でかつ私の銀行時代の後輩たちと会い、半月ぶりの日本食を御馳走になった。安藤律男(79年卒)、雪本肇(87年卒)、斉藤史朗(89年卒)の3氏である。彼らはそれぞれ地場銀行の頭取、外資系ファイナンスカンパニーの財務担当取締役、そして邦銀ジャカルタ拠点の次席と、同じ金融分野の、異なった職場で活躍されており、頼もしく感じた。実は旧大和銀行へは大阪外大インドネシア語科卒業生が私の頃から数年おきに入行し、そのほとんどがインドネシア現地法人勤務を経験していたわけであるが、ここ10年以上前から入行が途絶えている。これはインドネシア語専攻の女子比率が増えたことも一因と思われるが、さびしいことではある。企業側にも海外駐在を前提とした積極的な女性の採用、登用が望まれる。彼らからホットな現地事情を聞かせてもらった。私がインドネシアにおけるスマートフォンの普及が日本以上であることや最新モデルの乗用車があふれていることに触れたところ、情報関連機器の使用については、インドネシアが進んでいるというよりも、日本が遅れている。また、乗用車の普及に対しては、インドネシアのいわゆる一流企業社員の所得が今や日本並みの水準まで上昇。マイカーやマイホームもかなりの取得率とのこと。さすれば、市内のビジネス街に多くのサラリーマンが郊外のマイホームからマイカー通勤して、交通渋滞が悪化するのとは当たり前というわけである。日本を外から見て3氏の危惧するのは、日本はあらゆる面で発想と行動をドラスティックに変えないと、いわゆるガラパゴス化に陥るのではということであった。進出、投資案件への対応においても、日本企業の機関決定には他国

に比し著しく時間を要しており、チャンスを逃しているように思えるとの指摘であった。旅を終えて思うのは、インドネシアの社会のひずみ、ギャップがむしろ大きくなっているのではないかということだ。具体例として、先に述べた情報機器や乗用車の目覚ましい普及・発展の一方で、平気で穴があいている道路、道端の生ゴミの悪臭のひどさ、歩行者が道路を横切るのが命がけという交通事情とマナー、まだ見かける物乞いのひと、等々の相変わらずの実態。中国を論ずるに、国内の極端な貧富の差が政情不安の大きな要因とされているが、インドネシアもその轍を踏むのではないかと心配する。ジャカルタはシンガポール並みのショッピングゾーン化を目指しているそうである。実際に市内の各プラザの外観内装の素晴らしさには驚かされるが、社会的安定のためには何よりも地道なインフラの整備が望まれると痛切に感じた。2012年10月の新聞報道では、インドネシア首都圏整備のインフラ開発計画で日伊両政府が合意したとのこと。プロジェクトの早期実施を期待したい。



ボロブドゥールのご来光

## スハルト大統領 表敬訪問通訳の思い出

滝本 佳一 (1960年卒)



### 《はじめに》

これまで南十字星会誌には市村真一先生の大変アカデミックなお話や各分野で活躍された諸兄、諸姉のお話が掲載され、興味深く楽しく読ませていただきました。この度、寄稿の依頼を受け諸兄、諸姉があまり経験されていないであろうスハルト大統領表敬通訳の思い出を、話すことにしました。

15年間のジャカルタ駐在中、私は勤務する会社や関係メーカートップの大統領表敬訪問通訳を7度経験しました。あまりタッチな話は避けたので中味のない話になったかも知れませんが、ご容赦願います。

なお、1度だけの経験ではありますが、実は私、1977年9月27日、クアラルンプール近郊のゴム林に墜落炎上した東京発、香港ークアラルンプール経由シンガポール行き JAL715 便の乗客として、多少の怪我を負ったものの無事助かった1人であります。

### 《まずは自己紹介です》

思い起こせば、1期校受験に2度落ち1浪で明確な目標と気構えもなく入学。陸上競技部(OGAC)に席をおき、憂さ晴らししながら勉学に励んだ、というより要領よく卒業した感があります(⑩は卒業写真。前列左から2人目が筆者)。同期の西田達雄君と一緒に住友商事に入社し、西田君は東京、私は大阪勤務でした。1964年マレーシアのクアラルンプール事務所駐在を皮切りに以降ジャカルタ駐在5回15年、その間サウジアラビアのジェッダに6カ月の長期出張、そしてイラクのバクダッド事務所に1年半と合計20年、いずれもイスラム圏での駐在でした。在職中は鉄道車両と自動車の輸出が主たる担当業務でした。



### 《初めてのインドネシア駐在》

1968年、私の初めてのジャカルタ駐在であった。当時ジャカルタ事務所にはインドネシア語の達人榎谷昌博先輩(56年卒)がおられたが、課長として帰国されたため事務所長は達人無き後を心配され、私に家庭教師を雇うように指示された。私は当時インドネシア大使館におられた増井正先輩(56年卒)が個人教授を受けられたインドネシア大学の言語学教授を紹介いただき、同教授からインドネシアの一流日刊紙コンパス紙の社説を教材に3ヵ月間毎週土曜日の午後(仲間はゴルフに出かけたのに)個人教授を受けた。毎回の予習復習が義務付けられた相当しんどい特訓で、卒業後約10年にしてインドネシア語を必死で勉強した。

### スハルト大統領表敬訪問通訳、その1》

1976年6月16日、スハルト大統領の執務オフィスであるビナグラハに当社柴山幸雄社長が大統領を表敬訪問した。私の2回目のジャカルタ駐在時であった。当社の社長がスハルト大統領を表敬訪問するのは初めてのことで、住友化学と当社が中心となり取り組み実現した日本・インドネシアのナショナルプロジェクトであるPTインドネシア・アサハン・アルミニウム(アルミ製錬プロジェクト)設立の報告であった。



当時は一民間企業の社長がスハルト大統領を表敬訪問するのは稀だったのか、須之部量三大使が当社の幹部や事務所長と一緒に臨席された(写真=左からスハルト、筆者、柴山社長、須之部大使)。当日ビナグラハの待合室で待機していると大統領の公式通訳官、WIDODO SUTIYO(スハルト政権中通訳を務め、4~5カ国語に堪能で語学の天才ともいわれた)が、私にこうアドバイスした。①インドネシア語での通訳と聞いているが、英語も出来るか。万一あがって大統領の言葉が分からなくなれば私が英語に訳すので心配するな。その時に備え、大統領の席から数メートル離れて同席する。②大統領との会話の要領はまず表敬者が一方的に話

し、話し終えれば大統領が話すので、大統領自身が質問しない限り途中で口を挟まないように。

大統領の執務室に入るや否やカメラのフラッシュとテレビ放映のためのビデオ撮影が始まった。大統領と表敬者の間の小さな椅子に座ると、当時55歳の上品でハンサムなスハルト大統領の顔が本当に間近にあった。柴山社長の話が終わると大統領は私の手許のメモに時々目をやりながら、適当な区切りでゆっくりとはっきりした声で話してくれた。「これまでオランダがそしてソ連が取り組み、途中で諦めたアサハンアルミ製錬プロジェクトの実現はIMPIAN KAMI(われわれの夢)であった。心から喜び感謝している…」。

表敬を終えて帰宅すると、お手伝いたちがテレビ放映を見てトアンがプレジデンと一緒にテレビに映っていたと大騒ぎ。お陰で随分とトアンの株が上がった。

### 《大統領表敬訪問通訳、その2》

1994年、第2回APEC首脳会議はインドネシアが議長国となりボゴール宮殿で開催され、「ボゴール宣言」となった。スハルト大統領は見事に主役を演じた。まさにスハルト政権の絶頂期であった。1994年当社秋山富一社長が大統領を表敬訪問した。私にとって7度目の通訳であった。秋山社長がAPEC首脳会議を成功に導いたスハルト大統領のリーダーシップの賛辞も含め発言を終えた直後、スハルト大統領がわが意を得たばかりに、満面笑みを浮かべ話し始めた。



(写真中、左からスハルト、筆者、秋山社長)

「私自身が各国首脳に直接電話し参加を依頼した。勿論クリントン大統領にも」。そこでスハルト大統領は少し恥ずかしそうに笑いながら「あちら(クリントン)は例の問題(不適切な)で、ごたごたしていてなかなか参

加確認が取れず、手間取った。会議の当日、APEC 会場のボゴールに向かう途中でも寄り道するなど色々あってやきもきした。ボゴール宣言後、外国人記者団との質疑応答でアメリカの女性記者が意地の悪い質問をしたが上手く対応した…」表敬訪問の許容時間は通常 20 分程度。時間がくると秘書官が別室から出てきて、大統領の斜め後ろ 1 疋で立ち止まり、無言のまま踵を返す。ところが、この日は大統領自身のおしゃべりが止まらず 2 度目の秘書官のお出ましをも無視。結局、その後しばらくして大統領は自らの腕の袖をめくり時計に目をやり、相当タイムオーバーで表敬訪問は終わった。

### 《おわりに》

2012 年 12 月、PT. HINO INDONESIA MANUFACTURING (HIM) の創立 30 周年記念式典に招待されジャカルタを訪問した。1968 年最初のジャカルタ駐在時の私の任務は、マツダと日野自動車の現地代理店の選定で、どちらもゼロからの出発であった。HIM は日野自動車、住友商事、現地代理店の 3 社合弁会社として 1982 年に設立され、30 年を経た現在、日野自動車の中型、大型トラック、バスの年間販売台数は 2 万台、50%を超える占拠率を誇り日本国内販売をも上回り、同社にとって世界一の市場に育っていた。式典で私は“井戸を掘った人”として紹介され、今年喜寿を迎える私には晴れがましいお祝いとなった(①記念写真)。

“ASEAN の時代”の到来である。インドネシアが政治、経済、外交の核となり ASEAN の牽引車としてさらなる発展を期待したい。



## アチェ大地震災害 自衛隊支援に参加の体験記

道広 健吾 (1961年卒)



まず初めに、簡単に自己紹介させていただきます。外大を卒業した 1961 年丸紅に入社、木材部配属。63 年フィリピン・マニラ支店(深田祐介著「炎熱商人」を経験)、65 年マレーシア・サバ州サンダカン出張所の初代駐在員(山崎朋子著「サンダカン八番娼館」で名が知られた)を勤め、70 年ジャカルタ支店勤務。4 年間原木の対日輸入と鳥も通わぬ孤島での森林開発業務に。83 年東マレーシア支店長(サバ州コタキナバル)、88 年東京本社石油製品部長、91 年マレーシア・クアラルンプール支店長を経て 94 年丸紅保険センター(株)常務、そしてエムアイシーサービス取締役社長となり 2002 年退社。従って海外駐在は東南アジア延べ 18 年間でした。

さて、本題に入ります。2004 年 12 月北スマトラ沖で発生した M9 に及ぶ大地震とそれに伴う大津波はアチェ州を中心に死者・行方不明者 23 万人を超えたと報じられました。日本政府は自衛隊部隊 900 人とそれを支援する JICA からなる国際緊急援助隊を編成してアチェに派遣、復旧支援に乗り出しました。私はこの緊急援助隊に 2005 年 2 月 15 日から 3 月 1 日まで 2 週間の参加要請を受けました。時が経っても体験した記憶は鮮明に残っており、この機会に実情をお話します。





## 《炎天下で》

派遣された自衛隊部隊の活動内容は、医療・防疫・物資輸送に分かれ、国際緊急援助隊の我々通訳要員は自衛隊チームの医療・防疫活動が円滑に進むようサポートすることだった。宿舎は借家の民家である。毎朝6時前に起床(土曜・日曜の休みなし)すると、貯めた雨水でシャワーを浴びる。朝食後7時30分JICAのジープで出発。外科専門の診療所(1日平均20人の患者)を経て内科診療所に向かう。午前9時前、驚いたことに、すでに40人ほどが待っている。時間とともに患者数は増え続け、ピーク時の10時頃には約80人に達する。気温35度を上回る炎天下。テントの中で辛抱強く待っている。1日平均150人から200人。担当の自衛隊医師4人と我々通訳5人は、毎日実に忙しく患者と接し、トイレに行く暇もないほどだった。

内科の患者の病状は千差万別。津波に遭った恐怖感による精神的症状(頭痛など)、津波に飲み込まれたことによる腹痛、呼吸困難、咳、皮膚のかゆみや爛れ、背中や腰の痛み…。しかし、患者たちは治療を終え、薬を受け取り、次々満足げな顔をして「ありがとう」と帰っていく。その後ろ姿を見ると疲れが吹っ飛び、心が和らぐ思いがしたものだ。

診療時の通訳には医学専門用語が多く、しばしば辞書で確認しました。皆さん方、インドネシア語をどの程度思い出されるでしょうか。単語の一部をご参考までに挙げてみます。鼻水 ingus 目まい pusig 下痢 diare, menceret 痺れ kebas, kesemutan くる pegal だるい lemas 胃腸炎 sakit maag 痒い gatal 動悸 berdebar-debar 不安感 rasa cemas, gelisah 結膜炎 radang selaput mata 捻挫 terkirir

抗生物質 antibiotik 副作用 efek samping.



## 《バンドアチェでの貴重な生活体験》

当時、アチェ州ではインドネシア政府軍と「アチェ独立運動」との紛争により文民非常事態宣言が発令されていた。個人的に宿舎から外出しなかったし、診療所では警護の警官(写真④)が配置され途中の車にも同乗したが、幸い身の危険を感じたことは1度もなかった。

我々の宿舎に関しては当初、安全のため自衛隊艦船での宿泊が検討されていた。しかし、民間人に対する機密保持もあり、結局JICAが現地で借り上げた民家での宿泊に決まったのだ。この大きな民家は築20年以上のかなり古い木造2階建て。1階に寝室4部屋、そのうち家主の家族が3部屋を使用し、残り1部屋が私に割り当てられた。2階は共同トイレと水浴場付き部屋が5部屋あり、この部屋に我々の前に活動していたJICA第1陣派遣員40人の男女が床を含めてゴロ寝の宿泊をしたと聞いた。

以前にアチェに滞在した延べ100人以上のJICA派遣員のうち3分の2が下痢・熱中症などを訴えたという。それは炎天下でのハードワークと現地の食事・水なども原因だろうが、それに加えて不自由な生活環境でのスト

レスも影響したのではないかと感じた。

アチェ州はジャカルタと異なりイスラム規律が非常に厳しく、ビールなどアルコール類は一切御法度。もちろん町にも売っていない。宿舎の主人も敬虔なイスラム教徒なので、ここは我慢のしどころだ。お陰様で帰国後の身体検査では、肝機能は全く異常なしだった。

宿舎でのお風呂は当然お湯が出ない。水浴である(写真)。



トイレに使う、その横に貯めてある濁った雨水・井戸水を柄杓で汲んで頭からかぶる。典型的な田舎のインドネシア方式である。私の場合は、30年以上も昔のインドネシア駐在時代に木材開発の僻地で何度も経験している。寧ろ懐かしい思いをしたものだ。ところが今回、同じ宿舎では共同生活している数人の30歳前の美貌の女性海外協力隊員がいた。その彼女らは、全く平気だった。よく訓練されているなあと感服した。ただ、宿舎にはもちろんクーラーもなく、ハマダラ蚊(マラリヤ)の侵入に備え、昼夜共に戸も窓もしっかりと閉じられている。部屋の中のムンムン蒸し暑さに、寝苦しく閉口した。

通信関係では、当時アチェと日本との一般電話は一切通じない。日本の新聞・雑誌も手に入らない。滞在中、日本で何が起きているか分からなかったが、これも仕方ないことだった。

### 《結び》

アチェでの生活自体は味気ないものであったが、大きな救いはこの2週間、若い男女の青年海外協力隊の人達と同じ釜の飯を食って共同生活をしたことで、彼らの生き生きとしたエネルギーを吸収させてもらった。また、彼らの献身的な活躍を目の当たりにし、近頃の若者も捨てたものではないと感心させられたことであった。今後、他地域でもさらなる活躍を期待したい。

最後に述べておきたいのは、アチェまでずっと行動を共にしてくださった看護師の存在だ。僻地で何でも相談出来るという安心感が、目に見えないファクターとなって

我々が仕事に熱中できたことは確かであった。宿舎の食事面でも何かと健康管理に気を使っていた頂き、ありがたかった。そして私自身、灼熱の厳しい環境の中で微力を尽くせた。自衛隊医療部隊の支援に少しでもお役に立てたと自己満足しながら帰国した次第だ。

帰国後、当時の JICA 緒方貞子理事長から感謝状授与の連絡があり、謹んでお受けした。



次々と訪れた患者達は辛抱強く待つ



右側の自衛隊医師は患者のカルテをパソコンで作成

## インドネシア語が 教えてくれたこと

野村 知代 (2012 卒)



出張中の KotaTua で = 中央が筆者 = 2013 年 9 月

「野村さん、いつインドネシアの駐在員になるの？」インドネシアのローカルスタッフ、駐在員、はたまた同期からも、この言葉をかけられるたび、私はインドネシア語を専攻していて本当に良かったと感じることができます。

2012年4月、私は大学を卒業後、日野自動車（株）に入社、インドネシア日野製造（PT. Hino Motors Manufacturing Indonesia [HMMI]）の製造部門の窓口として仕事をしています。幼い頃から「日本と海外の架け橋になりたい」といった漠然とした夢を抱いていましたが、いま着実にその夢の実現に向けて歩いていることが自分でも少し信じられます。

高校時代はずっと別の大学を志望していた私でしたが、センター試験で思うような点数がとれず、志望校の変更を余儀なくされました。その時の「マイナー言語を勉強した方が、希少価値があるんじゃないの？」という担任の言葉と、「日本と繋がり強い国の言語を専攻したい」という理由から、大阪大学外国語学部インドネシア語専攻へ入学を決めました。そして今、この決断が本当に正しかったと実感しています。

在学中は留学をすることもなく、3年生以降は授業への出席率もまずまずで、初めてインドネシアを訪れたのは、卒業まであと半年に迫った4年生の11月でした。「せっかくだから、専攻語を生かしたい」といって就職活動をしていましたが、正直なところ、本当にインドネシア関係の仕事ができるとは思っていませんでした。

現在の仕事では、インドネシア語を使うことはあまりありません。現地とのメールは英語、会議は通訳を通じて日本語で行われます。しかしながら、日本人が私だけしかない時のメールや電話、通訳者不在により私が通訳の代わりをしなければいけない時、休日のアテンドなどではインドネシア語を使います。ローカルスタッフもやはり母国語であるインドネシア語の方が話しやすいようで（英語だと、インドネシア語なまりの英語と日本語なまりの英語、ノンネイティブ同士で会話しづらいといった側面もありますが）英語ではなくインドネシア語で話しかけてきてくれます。

入社して1年も経たないうちに、新人研修中だったにもかかわらず、ローカルスタッフの間で、私がインドネシア語を話せるという噂が独り歩きしました。「ノムラさん」はたちまち有名人になり、プライベートの誘いも増えました。仕事内容のせいもありますが、最近ではローカルスタッフの間で「困ったときはノムラさん」と言われるようにな

りました。まだまだ未熟な私ですが、本当に有難いことです。インドネシア語がただのコミュニケーションツールとしてだけでなく、私と彼らの心を繋いでくれています。インドネシアの言葉、人々をこんなに好きになれるとは、大学入学時には思ってもみませんでした。もうすぐ、入社3年目になります。知識と経験の乏しさ故に、任されている仕事の量、内容とのギャップに苦しむことが多々あります。昔を振り返っては、（インドネシア語に限らず）「もっと勉強すれば良かった」とか「学生しかできない、いろんなことをしてみたかった」と思うものです。でも、人生はまだまだこれからです。全ては自分次第で、様々なことにチャレンジできると信じています。数年後、自分が何をしているかは全く想像が付きません。

転職はいつ、どのように訪れるかわかりませんが、今までがそうであったように、どんな時でも自分がその時に思う「ベスト」を尽くしていこう、と考えています。



出張時の会議 = 2013年8月



HMMIの飲み会 = 2013年11月

## Pecah-belah : コワレモノ

高岡 容子 (1987 年卒)



冒頭から言葉通りの私事ながら、今年の6月に「半世紀」目の誕生日を迎えました。ジャカルタ在住が今年で22年目を数えますので、人生というスパンで考えるとまだかろうじて日本で過ごした期間の方が長いものの、社会人としての経歴は日本よりもジャカルタの方がはるかに上回る計算になります。

当初のきっかけは、総合商社からの駐在でした。当時一般職の立場であったために手続き上駐在扱いにはできなかったそうで、正確には4年間の「長期出張」を務めたということになります。帰国の辞令が出た際、自分の付加価値を考慮した結果、退職してジャカルタに残ることを選択し、今に至ります。現在は、許認可申請代行業務を主として取り扱う小さな会社を営んでおります。

ところで、世の中には刺激を好むタイプと好まないタイプの人が存在し、これは食べ物の好みからライフスタイルに至るまで共通していると、物の本で読みました。

恐らく私は前者で、食べ物も比較的味がしっかりした物や珍味の類を好み、服装も個性的であるとと言われることが多い上言動もいささか大振りで、且

つ人生はカラフルであれかしと思っています。



ではありますが、この原稿を書くべく改めて思い返してみるに、22年の長きに渡ってインドネシアに滞在してきた間、興味の中心はひたすら自分も含めた人間観察という、極めて地味なものでした。そして、言葉。

人の印象は、外観は勿論のことですが、その人が使う言葉によっても大きく影響されます。極端かも知れませんが、私は話し方、言葉の使い方、文章の組み立て方がその人の属するクラスを代表し、人間的センスを表していると考えています。

一方で、インドネシアの人々は、私が意図するクラスやセンスとはまた別の次元で、押しなべて説明下手の傾向にあります。特に当地に長期的なご滞在経験のある方は同様に感じられた向きも少なくないと拝察致しますが、相手の状況や理解度を慮るという点に価値観を置かない表現が特徴的です。インドネシアの日系企業で発生している問題の恐らく半分程度は、コミュニケーションの齟齬に直接・間接的に起因していると常々実感していたこともあって、私の会社で扱う業務も自ずとコミュニケーションの質を上げることによって付加価値を出す方向に向かいました。

コミュニケーションの質を上げるためには、私一人がこだわっているだけでは勿論事足りず、スタッフとも、上質なコミュニケーションとは何か、という

理解を共有する必要があります。

「今から〇〇社に行ってきます」

「え、何の用事で？」

「Aさんが実地検証に来ますので」

「Aさんってどなた？」

「あ、税務署の担当官です」

「実地検証って、付加価値税登録申請の？」

「そうです」

「付加価値税登録の実地検証は形式的な筈だけど、立ち合いを頼まれたの？現地スタッフの方が不在とか、経験不足で不安があるとか？」

「頼まれてはいませんし、現地スタッフの方も不安とは仰っていません」

「では何か問題でも？」

「いえ、特に問題は起きていません」

「だったら行く必要はないでしょう？」

「そうですね」

「でも、何かきっかけがあって行こうと思ったんじゃないの？」

「えーっと、Aさんに実地検証のスケジュール確認で昨日電話した時に、“では明日現場で”、と言われたので」

「え？“私の立ち合いは必要ですか”、とか何とか聞かなかったの？〇〇社は遠くて半日は潰れるし、あなたは他にも急ぎの仕事があるでしょう？」

「行かずにすめば、その方が有難いです。今Aさんに聞いた方がいいですか？」

「本当にそれだけで行こうとしているのなら、勿論聞くべきでしょうね。会社が立ち上がったばかりで外国人の取締役以外誰もおられないとか、或は謝礼の要求があったとでも言うのなら、立ち合いが必要かも知れないけれど」

「あ、それなんです。あの…謝礼の要求があったので」

「…どうしてそれを先に言わないの？さっき、問題は起きていないって言わなかった？」

「手続き上は問題がないので…」

「特に断りなく“問題”と言う場合、全ての問題を含みます！」

「すみません」

「正確にはAさんは何と言って謝礼を要求したの？」

「“明日現場”で、と仰ったので、代行者に来て欲しがっているということは、謝礼を期待していると思いました」

「それだけ??」

「えーっと、はい、そう…ですね」

「今まで付加価値税登録申請の実地検証で謝礼の要求があった例は？」

「多分なかったと思います」

「なのに、“明日現場で”、の一言だけで謝礼の要求とすぐに思い込んだの？」

「えーっと、あの、そうでもないんですけど…」

「口調が思わせぶりだったとか、そういうこと？」

「そう…思った気がしたんですけど、わからなくなってきました」

「あなたが立ち合いを元々予定していると、そのAさんが思い込んでいただけという可能性は？」

「ああ…それは考えもしませんでした、その可能性もあると思います」

「じゃあ電話すれば見当がつくのね？病気とか急用とか適当な理由をつけて、立ち合いには行けなくなりそうだと言ってみなさい」

(電話の後)

「Aさんに行けなくなったと言いましたが、気を悪くした様子はありませんでした」

「理由はどう伝えたの？」

「体調が悪いので、今日の実地検証には立ち会えそうにないと伝えたら、どうぞお大事に、と穏やかに言われました」

「感じのいい人じゃないの。ということは、謝礼の要求っていう話は？」

「謝礼の要求はまずあり得ません」

「さっきは確信していた様だったけど？」

「確信ではなくて、ただの想像です」

「謝礼の要求があった、と言い切ったわよ」  
「そういう可能性を想像した、という意味です」  
「あの表現では、誰が聞いても想像や推察とは取りません!」

「すみません」

「じゃあ、結局行かなくていいのね?」

「行く必要はありません」

「今度から、出かける時は目的と理由を先に言って頂戴。説明も根拠をはっきりさせて、事実と推察も区別して。推察を断言口調で言うと受け手を誤解させるから、これは止めてね。それから、固有名詞を使うのは説明の受け手がよほど良く知っている人以外は避けて、人物説明の役職や所属は単位が大きい方からにして。例えば私があなたのことを日本の友人に説明する時は、“インドネシアの私の事務所の現地スタッフで、Kという名前の20台後半の女性”、という表現をするとみんな理解するけれど、“Kがね”、と言っても誰もわからないでしょう?“誰それ?”って聞かれるわよね?でそれに答えて“IPSのスタッフ”、って言っても、今度は“IPSって何?”ということになってものすごく会話の効率が悪いでしょう?」

「すみません、改善に努めます」

以上は実例に基づくフィクションですが、概ねこの様な指導を日常的に続けた結果、とあるスタッフのコミュニケーション能力が飛躍的に向上した一方、とあるスタッフの話し方がこんな風になりました;

「昼食について申し上げます」

「はい?」

「我々は、本日 Bakmi Gajah Mada のデリバリーを注文することに決定 (memutuskan) 致しましたが、あなたはそれに倣いたいと考えますか、或は異なる決定を下されますか?」

「デリバリーに“決定”したということは誰も買い出しには行けないの?」

「説明不足で申し訳ありません! S (オフィスボーイも、T (運転手) も出かけて… あ、すみません!!

Sは△△社の取締役社長の甲様に本日投資調整庁で取得された投資基本許可の原本をお持ちしており、Tは、ブカシ地方商業局のCさん、あの、この人、いえ、この方は文書課の課長で…」

「あ〜〜、もう、わかりました。同じ“決定”を下します」



因みに、この2人のスタッフは偶然同じ高校の同じ学年出身で、社会的な階層もあまり変わりません。百人百様と言うが如く、一見したスペックが似通っていても、個人によって資質が異なることは重々承知しているのですが、相手の反応のズレによってこちらにもストレスが生じますので、「決定を下す」方のスタッフに対する口調は我知らずガミガミ調になって行きました。いわゆる負のスパイラルですね。

彼女にランチの選択を聞かれる毎に、もしかしてこの人をちょっと壊してしまったか?という居心地の悪さに見舞われる一方、不毛な苛立ちを覚える自分に、私も微妙に壊されたか?とも思うのです。

人は皆、異文化に長く接すると、よりコワレモノになり易いのではありますまいか。次の半世紀は、コワレモノを壊さず自分も壊されず、憂いなきカラフルな日々を過ごしたいと思う次第です。

## 諸先輩の“遺産” 今後もしっかり継承

内原 正司（1964年卒）



### 「外務大臣表彰」を受けて

インドネシアで仕事をさせてもらって通算 35 年。もっと長期滞在の人がおられますが、周囲をよく見回してみますとやはり長い部類に入るのでしょう。2000 年から当地の「産業別懇談会」の会長を引き受けています。そして外務大臣表彰が決まり 2014 年 9 月 8 日、在インドネシア大使公邸で表彰状伝達を受けました。授賞推薦理由は、懇談会を通じて“日本とインドネシアの相互理解の促進”に尽力したということだそうです。

私にすれば、青天の霹靂（この言葉、今は悪いこと・良いこと、どちらにも使えるらしいです）。懇談会のお手伝いをしているうちに、かような仕儀となりました。大使の前で、“答辞”なるものを、しどろもどろで朗読して参りました。面映ゆくお恥ずかしい次第です。

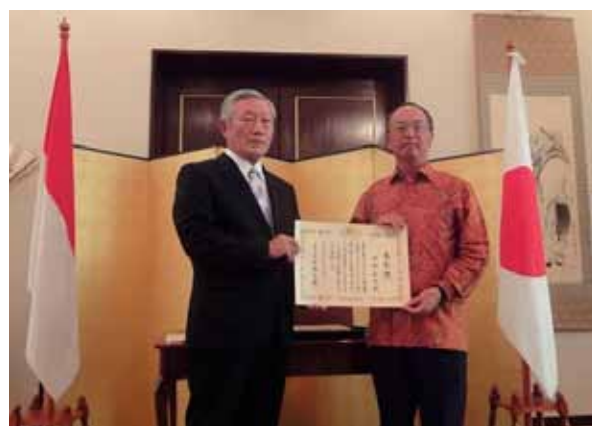
私議にて申し訳ありませんが、経歴などを簡単に記します。1964 年に大阪外大を卒業後、日商岩井を経て 69 年住友商事入社。1971 年最初に訪れたとき、インドネシアはスハルト時代です。円借款第 1 号の Tg.Priok の火力発電所を受注、この現場監督として現地に派遣されました。当時、外資導入が図られ、L/C による輸出入決済が盛んでした。インドネシアが経済破綻をきたして、多くの関係商社、メーカーが苦境に立ちましたが、そこはどっこいインドネシア流のお助がありました。損害を被った企業はインドネシアに投資した場合、損金をキャピタライズ出来ることになり、これを機に多くの日本企業が進出して来たと言われています。

1984 年から 1988 年の間のジャカルタ駐在員として

の時期を除き、アサハプロジェクト、電子磁性材製造会社、東芝ブラウン管製造会社と会社で最長記録の outgoing life をいたしました。定年退職後、SECOM、武田薬品と移り、現在、住商 Global Logistics の顧問をしています。

産業別懇談会というのは、インドネシアに進出した日本の企業が業種の枠を超えて組織した団体です。現在約 50 社が加盟。初めの頃は、異文化によるギャップがある労使関係、社会環境の不安定に伴う労務問題が中心テーマでした。「自分が仕事で決断、実行した事が正しかったのかどうかの再確認」「決断事項が正しいかどうか」「正しい情報が伝えられているかどうか」「もっと良い知恵がないか」等々の情報交換です。そして労務、人事、総務、安全、衛生の問題にとどまらず、インドネシアにおける諸問題を会員の経験、意見、知恵を出し合い確認し合っています。自由な雰囲気で開催され、多くの問題解決につながりました。月例会議は午後 7 時から 9 時頃まで。そのほか毎年 1 回会員の中から希望者を募り、特に地方の企業、プロジェクトを訪問し研修しています。

答辞で触れました、懇談会発足時の概要をこの原稿の後段で付記させていただきます。初代会長の板坂勇夫氏（1947 年卒）は、戦後インドネシアで最初の日系銀行を開設された我が南十字星会の大先輩であります。



表彰。⑥は当時在任中の鹿取克章・駐インドネシア日本大使。

また板坂氏とともに、懇談会発足の功労者だった東レの黒田憲一顧問は、年齢が私より 5 歳上ですが、私と同年にインドネシアに訪れた関係もあって、いろいろとご教示いただきました。講道館柔道 7 段、警察大学

で将来将軍となる多くの生徒を教えられました。政治、軍、警察のトップとは純粋な気持ちでアミーゴとして付き合われ、日本人社会の政府と民間の強い絆を築いて来られた人です。実は私の会長就任は、顧問の強い要請があったからです。

現在でこそ、インドネシアのどこにでも行くことができます。ただ、ひと昔前は治安が悪くてそう言う訳には行きませんでした。黒田顧問の柔道の教え子が行く先々で司令官をしていて、安心できました。長いインドネシア滞在中、好きな旅行によく出かけ、インドネシアの全34州を数回にわたって訪れています。満天の星の下で、人生や日本とインドネシアのことを、さまざまな人々と語り合いました。

インドネシアを知るには、ジャカルタだけではなく地方を見ること、それも同じ所を度重ねて行くのは大切でしょう。以前の状態と比較すれば、その変わりよう、発展振りを理解出来ます。スハルトが開発を、ユドヨノが地方分権をと言った場合、回を重ねて見ることによってその実態が初めて確認可能になると、改めて認識した次第です。このように偉そうに言っても、本当にインドネシアの人々の生活に入り込んでいた訳ではなく、奥深いインドネシアを知っているかと問われれば、“ノー”となります。



旅行愛好グループ“秘境の会”のジャカルタ市内ツアーで。歴史博物館前(オランダ時代はシティーホール)=2013年5月



スンダ海峡で噴煙をあげる  
クラカタウ火山 (Anak Krakatau)=2011年8月

#### ◇答辞の要旨(2014年9月8日)◇

PT.Sumisho Global Logistics Indonesia の内原正司です。この度は大変なご厚情を賜り身の引締まる思いです。誠に僭越ながら、産業別懇談会を代表しまして謹んで表彰を賜り、答辞を述べさせていただきます。

産業別懇談会設立のきっかけは、日系繊維合弁企業の親睦会として古い歴史を持つ「アヒル会」の活動でした。1982年頃同会の研修旅行が計画され、行き先は当時、日イのモニュメントとして脚光を浴びて操業開始直後の Asahan Project (INALUM=PT.Indonesia Asahan Aluminium) でした。結局、有志だけの旅行となりましたが、その研修後、INALUMの川口理宏総務部長が「日系企業がこれだけ多く進出している折、労務問題等でイニシアティブを取れるよう会ができないのか。検討して欲しい」と提起されたのです。

同会の会員でもあった黒田顧問が、就業規則作成に関し板坂勇夫氏 (Meiwa) に相談され、共感を得ました。日頃懇意の会社に声掛け。これが産業別懇談会の始まりです。第1回(準備会)は1983年9月、Jl.Bloraの中華料理店“Prince”の2階に7社 (Meiwa、ITS 東レ、武田薬品、IWWI、TIFICO<帝人>、INALUM、住友化学)の代表者が集まり名称、開催日、幹事、会議進行方法について検討しました。その後、会員が増え40社となり、1994年8月に幹事団を設置。新しい体制での産業別懇談会がスタートしました。開催場所も BismaNusantara、Hilton、日航ホテルと変化しました。現在会員は会場のスペース制限上50社となっています。歴代の会長(敬称略)は初代、板坂勇夫 (Meiwa) ▽2代目、南浦基二 (INALUM) ▽3代目、堀紀久男 (TIFICO) ▽4代目、齋藤忠義 (INALUM) ▽5代目、森田健 (TIFICO) ▽6代目、安東晋司 (東レ)。そして



7代目が内原正司(SGL、2000年7月より現在まで)です。

諸先輩方がこれまで築き上げて来られた産業別懇談会を、これからも会員の皆様と共に継承して行きたい所存でございます。



産業別懇談会の月例会議の風景 =2014年11月

## 神戸インドネシア語 学習会を主宰

沖 政夫 (1966年卒)



「神戸にインドネシア語を勉強する会があったんか?」「どんな会や?」「たいそうな名前やけどちゃんとした会なんか?」などなど、皆さんが疑問に思われる会を開いております。

こじんまりした趣味的な学習会にもかかわらず、このたび皆さまに知っていただく機会を頂きましたので、私とインドネシアと言うか、インドネシア語との関わりから生まれたこの会の設立経緯や活動内容をお話致します。(ⓐは学習会の風景)



インドネシア語科を66年に卒業後、会社定年まで、私はインドネシアとは全く縁のない生活を送って来ました。インドネシア語に接する機会も場もなく、私には英語を使う仕事ばかりが回って来ました。でも、同級生の仲間との楽しい思い出は卒業後もあせることなく、インドネシアにはずっと興味・関心を持っておりました。

そんな私が定年を迎え、時間に余裕ができたので何かしたいなと思っていた時に、「神戸シルバーカレッジ」(3年間)にインドネシア語クラブがあると知り、インドネシア語に対するなつかしい思い出と、もう一度インドネシア語を楽しみたいという気持ちが湧き出てきたのです。2001年に同カレッジの国際交流コースに入学し、即インドネシア語クラブに入会しました。ここから私のインドネシア語に関わる第2の人生が始まりました。

2003年に同校のインドネシア語クラブを通して出来た仲間15名と「スラバヤNICEセンター」(当地で日本語、日本文化を広める活動をしている施設・スラバヤ大学教授が運営)との交流のためスラバヤを訪問、3日間にわたり交流活動をしました = 写真ⓐ中央が筆者。

その折、ジャカルタにも寄り、同級生のO君に大変世話になりました。インドネシア在住ウン十年のO君のインドネシア人並み、いやそれ以上の達者なインドネシア語に触れ、感心し、刺激を受けたのを今でも鮮明に覚えています。

2004年～2006年まで神戸でインドネシア人の開くインドネシア語教室に入り、勉強を続けていましたが、2006年にこの教室のインドネシア人講師が帰国され、教室がなくなるのを機会に、新たに私とインドネシア人(女性)講師とで今の「神戸インドネシア語学習会」を開講し、現在に至っております。

## 峠を越えてもまだ坂がある 神経難病の診断

岩谷 英志 (1964年卒)



2014年11月に診断された、聞き慣れない病名だ。

「脊髄小脳変性症」。足のバランスが取りづらく、歩くとふらつく。杖や他人の手助けが要る。跳んだり、走ったりするのはとてもムリ。手の動きもぎこちない。動きが緩慢になる。今のたまかな私の症状である。要するに、運動機能に関係した小脳などの神経細胞が破壊されて萎縮、変性して動作の細かな調整ができなくなっているのだ。MRI 検査では、小脳とつながる脳幹や脊髄は、まだそれほど“悪化”していないらしい。とはいえ、厚労省の指定難病のひとつ。原因が解明されておらず、治療法も確立されていない。気は重い。

薬(セレジスト錠)は大して効果はないという。でも、気休めのため服用している。現状維持を保つには、今のところリハビリの運動療法ぐらいしかない。この3月から週3回、送迎付きのリハビリ・デイサービスの利用を始めた。指定難病なので訪問リハビリも受けられる。家庭では、足のふくらはぎを鍛える「ストレッチボード」や足首に巻きつけて負荷をかける「アンクルウエイト」なども使っている。「これは良さそう」という情報には、すぐ飛びついてしまう。

それまで何度か他の病院で調べてもらったけれど、進行が遅いせいか、ある程度悪化してからでないと病气診断がつかないのかもしれない。4年ほど前から、歩行があやしくなっていたのを自覚し、体育館のジム通いをしていた。自宅から体育館までは約1<sup>キロ</sup>の下り坂だ。その坂を歩くのにも、転倒の危険を感じるようになって

しまった。今は中断している。

実を言うと、もっと以前はかなりの“足自慢”だった。1994年から8年間はマラソンに熱中し、

各地の市民マラソン大会にも参加していた。年齢では50代から60代前半。それが、走るどころか“足で悩む”ことになるとは。人生の先行きは分からないものだ。

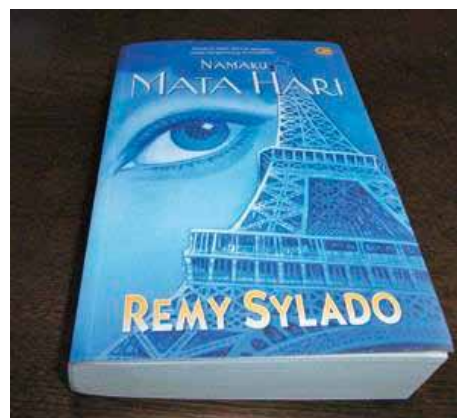
マラソンの一番の思い出は、富士五湖を走る「チャレンジウルトラランニング」。1998年4月25日、ビギナーズ種目の80<sup>キロ</sup>に参加した。高低差は1<sup>キロ</sup>ほど。

制限時間は11時間。午前8時に出発して午後7時にはテープを切らねばならない。給水所のほか、数カ所にエイドステーションが設けられていて食べ物のサービスを受ける。“応援ツアー”と称して妻も同行した。バスで先回りしていた妻と短い会話をし、また走る。

走行距離を80歳人生になぞらえ、もう50に達したなあ、などと走りながら考えていた。フィニッシュ地点はスタートと同じ富士北麓公園競技場。何とか戻ってきた。日が暮れてしまっている。太い白いテープが近づき、胸のナンバーカードをチェックしてマイクで名前を呼んでくれる。バンザイをしながら時計を見た。10時間41分58秒。制限時間に余裕のセーフだった。

「フルマラソンのほぼ倍の距離。完走の感激度も倍だ」そんな屁理屈も口にする。自然に涙がこぼれた。

語学は、マラソンを走るのにも似ている。今は走れないけれど読書は大丈夫だ。インドネシア語の原書を読むのも、病院通いなどで一時中断したあと、趣味の続きとして再開した。タイトルは『Namaku Mata Hari』。



著者の Remy Sylado は、私より少し若いだけで、経歴が同じ元新聞記者。本を読んでいるかぎり、とても博

学で、語学も達者だと感じる。小説のテーマは、ご存じ、ドイツ・フランスの二重スパイをすることになった女性の経緯と背景。これまで何度か映画化され、本も出版されている。でも、主人公の女性ダンサーの生き様や男性との関係・からみ、そしてインドネシアでの話をこれほど詳しく描いているのは初めてとか。内容はけっこう面白い。私の場合、辞書を引きまくり翻訳した文をパソコンに保存しているので、スピードは超ノロノロ。500ページを超す長編。途中で“棄権”することになっても、それはその時のことだ。

しかし、責任を負う仕事は、途中で放棄して迷惑をかけるわけには行かない。やることも選ばざるを得ない。南十字星会の会報編集担当は20号発行を1つの区切りに、辞したいと申し出ている。

---

## 「南」に導かれて

安田 和彦 (1989年卒)

---



大阪外国語大学に入学し、インドネシア語を学び始めてから32回目、ご縁あってここ京都産業大学でインドネシア語教員として勤め始めて12回目の夏を迎えました。

今、この間の日々を振り返り、また、大学は異なっても、毎年毎日、かつての自分と同じく、新しい言葉としてインドネシア語を学ぶ学生たちと接して思うこと、それは、「南」に導かれ、ここまで来ることができたという実感です。

高校2年生から3年生にかけて、大学進学を具体的に考え出した頃です。6学年上で拓殖大学の英米語

学科に進みながら、大学でインドネシア語を学び、それがきっかけで外務省の在外公館派遣員としてジャカルタの日本大使館に勤務していたという先輩の話を聞く機会がありました。その時、インドネシア語は学んだらすぐ生かせる言語だ、ということを知ったのです。中学、高校とそれなりに英語が得意だったし、大学も語学系がいかなくとも漠然とした思いが、大学でインドネシア語を学び、留学もしたい、学んだ語学を生かす道に進みたいという確たる希望に変わりました。

あの時、なぜ、すぐにインドネシア語を学ぼうと決めることができたのか、よくは思い出せません。ただ、青森という雪深い北国に生まれ育ち、心のどこかに南への憧れがあったのでしょうか。

1984年に外大に入学した時、主任は松尾大先生。森村蕃先生はインドネシア出張中で、松野明久先生は2年目、アイブ・ロシディ先生は入学式で記念講演をされました。そして、松浦健二先生を始め、多くの先生方も非常勤として来られていました。

中学、高校とはすべてが違う、大阪での大学生活。四月病も五月病もありましたし、当時の学生が一通り通る道は、ほとんど通ってきたように思います。

何年生の頃か、帰省中に親戚から父親の話を聞く機会がありました。父は地元で中学校の教員をしていましたが、若い頃、海外の日本人学校に赴任する話があったのだそうです。詳しい経緯はわかりませんでした。とにかく、行き先はインドネシアだったはずで、ただ、当時の様々な状況を踏まえて、赴任を断念したのだと教えられました。

そして、大学生になって初めて、父の話をしてくれた親戚も含め、戦時中にインドネシアに行っていた経験を持つ人が、青森の田舎の身近に何人かいることも分かりました。

父からは、16年前に亡くなるまで、インドネシアの話を直接聞いたことはなかったように思います。しかし、インドネシアにかつての激戦地を訪ねた時に、父の若い頃の思いも、身近な人たちの戦争の記憶も、すべてがインドネシアへの、南方への導きだったと思い起こされるのです。



東ヌサ・トゥンガラ州 東ヌサ・トゥンガラ州 東ヌサ・トゥンガラ州、小スンダ列島の東スンダ列島の東スンダ列島の東端のアロール島のアロール島

留学を経て5年で学部を卒業。その後2年で大学院を修了し、いくつかの大学で非常勤講師をしていた1995年の夏、松尾先生からお電話をいただきました。それが、前任校の沖縄県名護市の名桜大学とのご縁の始まりでした。大学院を出て、非常勤講師を続けている身には、専任講師のお話は本当にありがたいものでした。

その年の秋に、初めて沖縄を訪れ、名護の街並みを見た時に、ここはインドネシアだと本当に思いましたし、翌1996年に、開学3年目の名桜大学に赴任し、それまで大阪にいた時には遠かったインドネシアを、目の前に広がるこの青い海を越えたくすぐ先にあると感じるようになりました。

赴任して間もない頃、大先輩の教授から「先生、今日の1時からの会議は何時からでしたかね」と言われたこと、「マタハリってインドネシア語にもあるんですよ」と自己紹介をする度に言われたこと、すべてがなつかしく思い出されます。

そして、沖縄は、日本の言語、文化に見られる南からの影響について考える機会を与えてくれました。

沖縄では南のことを「ハイ、ハエ」と言いますが、その「ハイ、ハエ」の語源は、インドネシア語の起源でもあるオーストロネシア祖語で「えい」を意味する“\*paRi”(古代の言語での、おおよそのパリという音を表す)にさかのぼることができ、その“\*paRi”は、インドネシア語では“bintang pari”の“pari”です。

現在のインドネシア民族のほぼすべてにとって

直接の祖先にあたる人々の中に、紀元前2000年頃(縄文後期)にニューギニア島北部を通過してミクロネシア西部を北上し、琉球列島へ到来した人々もいました。

その結果、古代琉球語にオーストロネシア祖語から基礎的、文化的な語彙が数多くもたらされ、その中の1つ“\*paRi”は、インドネシア語、インドネシアの諸言語で「方角、もしくは夏になると風が吹いてくる方角を表すえいの形の星、すなわち南十字星」等に意味が変化し、琉球語に取り入れられ南を意味する「ハイ、ハエ」となったのです。

この説は、外大にも来られていた崎山理先生のご著書に詳しく書かれているのですが、私はそれを一読して信じました。言語学を専門とする研究者としては、信じる以前に学問的に検証する態度を持つべきなのかもしれませんが、名護に暮らしながら、直感として間違いないと感じました。

その後、直感に導かれるままにインドネシアを訪れ、南十字星を見ました。特に、2002年夏にアロールで見た南十字星の輝きは忘れられません。赤道直下、夕日が水平線に沈むと、あっという間に漆黒の闇が広がります。その中に、南十字星が強い光を放って現れます。あの輝きに導かれて、私達の祖先は海を渡ったのだ。その思いは、さそり座がどれかわからなくなる程の光に溢れる天の川が流れる満天の星空に、とけて往きました。

8年間お世話になった名桜大学を離れ、京都産業大学に移って12年目になりました。京都産業大学インドネシア語の初代主任教授は松浦健二先生、その後を継いだ松岡邦夫先生、粕谷俊樹先生も、外大の先輩であり、在学中には直接教えてもいただきました。そこで教壇に立つことができるのは、本当に幸せなことですし、外大の卒業生として誇りを持って諸先輩の名を汚さないよう務めていかなければなりません。

インドネシアは改革の時代を経て、再びの成長軌道に乗っています。昨年には日本企業が次に進出したい国の1位になり、インドネシアへの社会

的関心も高まっています。大学のオープンキャンパス等では、高校生（とそのご両親）から、「インドネシア語はどんな言葉ですか。インドネシア語の卒業生の就職先はどうですか」という質問だけでなく、「そもそも先生は、なぜ、インドネシア語を学んだのですか」と聞かれる機会も増えてきました。

今、インドネシア語を学んでいる人たち、これからインドネシア語を学ぶ人たちが、インドネシアに導かれ、インドネシアという新しい世界への扉を開いてほしいと願っています。



パプア州ジャヤプラ近郊ゲニェム村の戦没者慰霊碑



北スラウェシ州ビトゥン市沖繩県人慰霊碑



パプア州北部、ビアク島の「戦没日本人之碑」

## インドネシアと ささやかな自分史

床次 泰文（1970 年卒）



今年 2016 年は、私事ながら、大阪外大インドネシア語科に入学してから丁度 50 周年。そんな機会に執筆させていただくことに感謝します。仕事としてインドネシアに関わったのは僅か数年間だけですが、気持ちとしては、常にインドネシアが身近にあったし、今もその状態を維持しています。

### インドネシアとの出会い

中学 3 年生になったばかりのある日、国語担当の先生がとりとめもなく「今年の大阪外大はインドネシア語の競争率高かったね」とつぶやいた。びっくりした。あまり聞いたこともないアジアの国の言葉を大学で教えているなんて…。そして、その頃のテレビ人気番組「夢で会いましょう」の短い時間帯にかじりついた。日常会話の文例を 10 数カ国の外国語で紹介しており、その中にインドネシア語がある。ローマ字(ラテン文字)で、発音もローマ字読みに近いことなどをおぼろげながら知った。

感受性の強いこの時期に受けた最初の 1 滴は、その後の私の生き方を方向付ける大きな要因となった。高校は、たまたまであるが、当時上八にあった外大キャンパスから歩いて 10 分足らずの夕陽丘高校。時々、覗きに行っていた外大に、運良く合格することが出来た。

大学生活 1966 年度は語科には一挙に 4 人もの女性が入学した。約 20 人での 1 クラスなので、70 年安保の真っ最中、慌ただしかったとはいえ、それぞれ個性

を發揮しあえる雰囲気でも過ごした4年間だった。

インドネシアでは前年1965年9月30日に劇的な政変があり、新聞では、連日、インドネシア共産党(PKI)とその支持者への弾圧・虐殺が報道された。

ただ、学内ではこの激変はそれほど身近に感じるものではなく、インドネシアの民謡とともにスカルノ賛歌の“BERSUKARIA”も歌っていた。しかし、留学生別科にいた、顔見知りのインドネシア人留学生がいつの間にか姿を見せなくなっていた。あとで聞けばPKI容疑で本国に送還されたとのこと。

時は日本の高度成長期の終盤だったが、語科指定の求人は結構あり、私は落ちる度に資本金の大きな会社を受け、3度目の正直で総合電機メーカーに就職した。

### 37年余のサラリーマン生活

入社して最初の配属先は家電製品の輸出部門に。その後重電関係に移り、スタッフ・営業・プロジェクト管理・資材調達などの職務を経験したが、仕事を通じてインドネシアと直接間接関わったのは数年しかない。しかしその僅かな関わりでも、公私にわたり貴重な体験が出来た。

まずインドネシア語科入学10年目の1976年＝入社6年目にして初めて待望のインドネシアへ。放送局関係の建設プロジェクトで約4カ月ジャカルタに滞在した。驚いたのはジャカルタ弁(?)。学校で習わなかった“nggak”の連発には戸惑った。まるで、大阪の街中で道を尋ねた外国人が、大阪弁での返事に首を傾げているようなもの。それでも、ようやく生活にも慣れた頃、

知り合いになった年配女性から、ふと「私のおじが目の前で日本兵に殺されたの」と聞かされた。また、あるバスの運転手が「日本の歌を知っている」とほぼ完璧な日本語で“見よ東海の空あけて…”と歌い出した。私には衝撃的だった。インドネシア民衆側からの戦争体験記などは、それまで聞いたり読んだりしていなかったのだ。

帰国後は意識的にこれに関係する資料を探したがあまり見つからなかった。ようやく1980年代後半になり、インドネシア人自身の体験の翻訳本や研究者の著書で、その実像・実態がおぼろげにつかめるようになった。その後インドネシアの駐在は1981年年初から約2年のみ。駐在先はアサハンプロジェクトの拠点である北スマトラのメダン市。私が赴任して3週間後に生まれた一

人娘とは、生後8カ月半に初めて対面、約1年の家族生活となった。ゴルフ・麻雀とは無縁な私にとっては、女中さんをはじめ、インドネシアの人々・社会に多く接することが出来る絶好の機会となった。休日は家族でベモに乗り、買い物や映画を見に出かけたりした。娘が初めて発したインドネシア語は天井を指差して“Cicak!(ヤモリ)”。歩き始めた娘に“Awasi!”、“Jatuh!”などを日本語に混ぜて使うこともしばしばあった。

1985年、火力発電プロジェクトでインドネシア電力公社(PLN)の研修生を約20名受け入れる機会があった。私は会社の技術者と彼らとのコーディネーターとして、社内で存分に動きまわることが出来た。彼等は私とほぼ同年代。自国では幹部候補生で、結構仕事熱心だった。気軽に対応してくれ、何人かは私の家にも遊びに来てくれた。入社以来ずっと私が心がけていたのは、知り得たインドネシア関係の催しなどには可能な限り参加すること。おかげで1998年のスハルト体制の崩壊前後、来日したインドネシアの著名人、例えば女優のクリスティン・ハキム氏、文学者プラムディア・アナンタ・トゥール氏、人権活動家ムニール氏の挨拶・講演を直接聞くことが出来た。今思えば実にラッキーだった。

2000年頃、日本インドネシアNGOネットワーク(以下JANNI)の存在を知り、すぐ個人会員となった。当時JANNI代表は松野明久外大教授であり、久しぶりに母校の生き生きした現況に接したのだ。そして定年退職した2007年8月末、お世話になった会社の皆さんにお礼を述べ「明日は学校の後輩達とインドネシアに出かけます」と挨拶し、職場を去った。

### 定年退職後

2007年9月1日、ジャカルタで松野先生や約10人の後輩達と合流、翌日ポゴール近郊のホームステイ先に向かった。後輩達、それもほとんど女性達は、4月に入学したばかり。その若々しさにはうらやましさを感じた。約1週間の滞在后、後輩達が別れ際、お世話になったホストファミリーに泣きながら別れを惜んでいる光景は、何か今後の草の根の交流の拡がりを感じさせる期待が持てた。

その後、JANNIの運営委員をしておられる拓殖大学の先生の紹介で、拓大生達と東カリマンタン州のオランウータン保護地区やバリ島でのゴミ処理状況などを巡るスタディツアーに参加。普通の観光旅行では得られない貴重な体験だった。



インドネシアへはその後2回訪問した。まず、松野先生や後輩達と再びスダの地でホームステイ。みんなでぎやかに農作業の手伝いもした(写真④)。3年経つとちょっとした変化があった。前回ホームステイした家庭は、井戸水を地下約10mから手で汲み上げていたが、電動ポンプに変わっていた。室内には冷蔵庫が鎮座していた。インドネシアの庶民の生活向上を垣間見た実感。前回、私達を世話してくれた男女の若者達はすでに親元を離れて都市近郊で働いている由。

そして2012年末、あるNGO主催のスマトラ・リアウ州でのエコツアーに参加。現地の若者と僻地で森林破壊に直面している地域を訪問した。電気・ガス・水道のないところでの村人との語り、国立公園内を象の背中に乗って散策(写真⑤)し、竹で編んだ筏で下流の集落まで半日ばかりで移動するワイルドな経験もした。



その後約3年はインドネシアを訪れる機会がないが、JANNIの運営委員として、会報の発送や各種講演会の開催のお手伝いをしている。会員のかなりの方は大学の先生や研究者で、頻繁にインドネシアへ出かけておられるので、インドネシアの政治経済文化などの現況はよくわかる。研究者の多くは私達と違い、外国語学部出身者ではないが、さすがその道の専門家と感心することが多い。

日常生活では、趣味の1つであるインドネシアの伝統音楽や現代音楽をCDで聞くのを楽しみにしている。また、インターネットで得たインドネシア語の記事を辞書片手にふうふう言いながら読んでいる。地元の埼玉県蕨市では国際交流のボランティア活動をしていて、時々インドネシア語を使う機会も。小学校の土曜学校でインドネシア語の“さわり”を教えたこともある。

以上の如く、日常的に直接的にインドネシアと関わっているわけではありませんが、私にとってこれからもインドネシアはかけがえの無い貴重な存在であることには変わりはありません。



スマトラ・リアウ州奥地、竹の筏で川下り=2012年12月

## インドネシアの印象記

渡辺 重視(1964年卒)



### 《インドネシアに始まりインドネシアで終わる》

1964年卒業後積水化学工業・外国部に入社。以来輸出担当、シンガポール駐在、インドネシア出向、国内関連輸入会社出向、インドネシア出向、国際事業部輸出入担当、シンガポール出向、最後は大阪営業所の営業推進部で定年と色々の経験を積んだ会社生活でし

た。

初めてインドネシアの土を踏んだのは1970~74年のシンガポール駐在時代。シンガポールの代理店と一緒に出張したときで、空港はクマヨラン、宿泊はコタのホテル、顧客もコタに集中していた。当時の記憶としては、文字通りのチリウン川とタムリン通りのロータリー前のヌサンタラビルが鉄骨むき出しのまま未完成で放置されていたことくらい。

インドネシア勤務は1975年、ジャカルタに長期出張。赴任先は現地の塩ビ電線管メーカーと丸紅との合弁会社PT.Pralonで、積水化学工業が硬質塩ビ管の製造・技術面を受け持っていた。社長は合弁相手の社長、副社長に丸紅、工場長は積水化学、私は $\pi$ - $\pi$ の営業助っ人、さらに丸紅の長期出張者の副社長補佐という布陣だった。総販売代理店が合弁相手の会社でこれが後に問題を起す芽となった。当初合弁会社の経営は販売面でいつも総代理店ともめ、まるで舵なしの船のようであった。色々あった挙句、結果的に私の“鹹”と現地側株式の日本側への委譲という形で収まった。私も思い切った提案を出したもので、総代理店の販売価格は総代理店が決めてよい、その代わり総代理店の口銭は売値の5%、という条件だった。だが、これは総代理店の当初の意図に反するものであったらしく、結局、合弁会社に喰らいついて行くのを諦めたようだ。

この間、家族をジャカルタに呼び寄せ、クバヨラン・バルーならぬクバヨラン・ラマの平屋住まい。長男は現地の幼稚園に通い、次男は家で床を這いずり回り、幼児を抱えて衛生面の心配をしながら家内はかなり苦勞したようだ。1976年、私は騒動の主犯として(?)、家族ともども一旦帰国したのである。

次は1980年から1983年まで同じ合弁会社の営業担当として再赴任し、その後社長を務めた。インドネシア勤務での教訓といえるかどうか分からぬが、経営面で対策を練ったりする時「日本人ならそんなことは絶対しないよ」というようなことでも、充分起こり得るという前提で対策をとっておく必要がある。そんな非日本的な思考回路が出来てしまったことである。

仕事に関するエピソードをいくつか紹介する。

●毎年の税務報告で会計士との会話：「一度本物の決算書を出して税務処理の簡素化を図れないのか」。返事は「そんなことをしたら来年から仕事が出来なくなる、2重帳簿は持ちつ持たれつの習慣なのです」。

●水道用の塩ビ管も製造していた。仕事からジャカルタの水道水の水質検査結果を見る機会があり、なんと蛇口から出ている水は大腸菌に汚染されている、とある。この結果を知ったわが社の日本人社長、朝の洗面にも恐慌をきたし、歯磨きはアクア使用とあいなったのである。



塩ビ管が山積みされたジャワ中部の簡易水道工事現場で

●ジャカルタの水道は水圧が低く水の出が悪い。このため各家庭はポンプで水を吸いタンクに貯めるのであるが、皆がポンプを使うので水道本管の中が負圧になる。そこにいい加減な配管とか盗水とかの原因でパイプラインの途中で穴があき、漏水どころか逆に外から水(地中の汚染水)を吸い込み、その結果飲用不適となるのであった。

●塩ビ管販売でクルプック戦争を経験。塩ビ管製造には強度(適度な硬度)を出すために炭カル(炭酸カルシウム)を少し混ぜる。炭カルのコストは当然安い。現地競争相手がコストを下げるため規定量の何倍もの炭カルを混ぜたパイプを販売し始めた。炭カルを沢山混ぜると安くなる、しかし脆く、重くもなる。日本のメーカーとしては泥パイプを作るわけにはいかず、肉厚を薄くして対抗したのだが、敵もさるもの、同じように薄物を上梓してきた。さあ、泥入りで肉厚を薄くしたものだから、指で押すとクルプックのようポロポロと割れるのである。スラバヤのさる大学でクルプックパイプを使用し、直ぐに割れたという話を聞いたが、それ以後の消息はなし。

●日本からの出張者のアテンドではスナヤンのドッグレース、アンチョールのハイアライ、サリナデパートの道路を挟んだ隣のカジノによく行ったものだ。カジノでは普段着のおばちゃん達がクシャクシャの100ルピア札を握りしめて眼の色をかえていた。

プライベートな面でのエピソードとしては



●ジャカルタのチキニ通りに TIM(タマン・イスマイル・マルズキ) という公園があり、そこの屋外ステージによく音楽会を聴きに行った。当時の有名歌手が次々に歌う流行り歌やチョイ古歌を堪能するのであるが、気がつけばいつも頭上の月は中天を回っているのであった。

●ジャカルタ市内に「オアシス」(店名は記憶不確か) という、メイドが一皿ずつ料理を肩の上に掲げながら運んでくる高級レストランがあり、日本からの客のお伴で行くのだが、そこで聴く流しのバタックのお兄ちゃん達の歌が最高だった。

●2度目の赴任時にはラグラグ会 (Lagu2 Kai) が出来ていた。毎週水曜日の夜、ジャパンプラブに集まりインドネシアの歌を肴にしてグラス片手に楽しむ集まりで、奥さん方公認の夜の外出チョイ飲み会であった。

## 《大阪でのラグラグ会発足

### —これこそ定年後の生涯学習》

1983年に帰国し、4、5名のラグラグ会OBが集まり大阪ラグラグ会を立ち上げ1986年早々に第1回のラグラグパーティを北浜のインドネシアレストランで開催。しかし他の客もいることで歌えなかったので、歌える会場探しに苦労しながら、2か月に1度集まりインドネシアの歌を歌い始めた。しばらくして、もっと頻繁にと毎月集まることになった。折しも既に設立されていたボーカルマニスという女声合唱団と出会い、そのコネでインドネシアの学生の支援を目的としたインドネシアからの復員軍人を中心に設立されていた関西インドネシア友好協会(略称は関イ連)が主催するラブ・インドネシアという催しに、ラグラグ会も出演する機会が出来てきた。関イ連は大阪の総領事館と強く繋がっていた関係から、ラグラグ会も総領事館の行事に参加するようになったのである。

ラグラグ会の歌集には、大使館や総領事館の領事クラスでも聞いたことはあるが、知らないという古い曲が多く、“インドネシア歌曲の博物館”であると私は人に紹介しています。

インドネシア民謡には、労働歌はごく僅か。出稼ぎはつらいよ、お母さんの所に帰りたいよ、といった歌が目立ち、当時の外領インドネシア社会状況が偲ばれます。歌詞の中では言葉の使い分けが多く、例えば nyiur と kelapa、nyanyi と dendang、sorong と dorong、

sepak と depak 等々。インドネシア語って本当は難しいんだよなと事あるごとに会員の自覚を促しています。

最後に、2003年8月の在大阪総領事館の祝賀会席上、大阪ラグラグ会は日伊両国の友好に貢献したということで総領事の表彰を受けたことを追記しておきます。



ラグラグパーティでの合唱=2013年8月大阪・京橋



アンクルン演奏も加えボーカルマニスと合同で=同年5月寝屋川市

---

## 海外駐在曲折を経て

丹羽 慎吾 (1975年卒)

---



大学を卒業し総合商社に入り、小説「炎熱商人」(深田祐介著)の舞台となった部署でインドネシアからの丸太輸入に従事しました。10年後、機械メーカーに転職し、平成と年号が変わってからシンガポールに7年、タイに7年、インドに6年駐在し、そして昨年帰国するとインドネシアに駐在となりました。会社・職場は転々としながらも縁が続いて、やっどジャカルタへの“ホームイン”

です。そんな私のこれまでの道のりを書いてみました。

### 《商社時代 1975～85年》

入社した商社は住友商事(東京)です。内勤を経て4年目に現地で検品のためカリマンタン、スマトラ、ブル島、パプアニューギニア等に行きました。輸入木材の丸太は港からは船積みされず、沖合に浮かぶ木材船に海岸からタグボートでまとめて曳航されるのです。用船契約しているのでも少くとも早く積まなければなりません。

丸太は工業製品ではないので適材不適材を仕分けする必要があります(写真)。時間がないと曳航中の丸太の上で波に揺られながら仕分け作業をします。海に落ちたらそれまでです。船側に着くと今度は不適材が積まれないよう船上から昼夜兼行で監視します。

入社6年目に現地の木材輸出会社に出向になりました。立木調査に参加した時は山の上にヘリコプターで下され、ジャングルの中を歩きながら目視で樹種、太さ、本数などを調査しました。山ヒルに噛まれた時はライターで炙ってはがしました。小川の側でテントを張り真っ暗な中で夜話をしたり、スコールが来て小川の水面が上昇したりと大変でした。赴任して3ヵ月後にイ国政府が丸太での輸出禁止令を出し、私は帰国することになりました。帰国して海外業務部に配属になりました。

そこでは東南アジア各国の拠点との連絡、事業本部間の案件調整、海外赴任予定者へのレクチャー、2国間会議に出席する役員への資料作り、そして海外経済協力案件の情報収集などを4年間担当しました。



### 《地方の小さな機械メーカーへ転職 1985～89年》

机での仕事が合わない私は、知り合いの紹介で愛知県の窯業機械メーカーに転職しました。そこでは大手衛

生陶器メーカーのマレーシアプロジェクトに関わったり、日本プラント協会の仕事でアフリカのザンビアで地質調査などに参加したりしました。

しかし、1985年のプラザ合意後の円高で輸出案件が途絶え、国内の焼き物産地を回る営業となりました。海外で仕事をするに未練があった私を見かねて、ある人が今の会社を紹介してくれ2度目の転職をしたのです。

### 《シンガポールで工場立ち上げ 1989～91年》

新東工業(株)という鋳造設備製造会社です。入社し半年間の工場での研修の後、シンガポールで消耗品製造の合弁工場の立ち上げを任されました。2年後に開所式場で本社社長から今度はアセアン諸国を対象にシンガポールに事務所を設立せよと指示をもらい、その会社設立に関わり、私と先輩社員の2人が駐在員となりました。

### 《シンガポール時代 1992～98年》

アセアン諸国に機械を売り込むとともに、マレーシア、インドネシアに取次店を組織したりしました。シンガポールは華人国家でも複数の出身地があり、複数の中国語があることを知りました。

また、多民族国家でもあり、英語、中国語、マレー語、タミール語が共通語になっていて、独立記念式典のテレビ放送は2つのチャンネルで音声と字幕つき4カ国語放送でした。中国語は文字が共通でも地域によって発音が違うのです。国籍、民族、言語がひとつだけなのは日本だけかもしれません。

2人事務所だったので経理も担当し、1円でも勘定が合わないと帳簿が閉められないという勉強もしました。当時、タイに日系企業が集中しつつあり、私の会社もタイに拠点を設立しました。

しかし1997年のバースショックによりシンガポールの会社は閉鎖となり、私は日本に帰国しました。日本では国内支店のメンテナンス部に配属されました。設備の点検補修は休日出勤が多くありましたが、機械や工場のことがよくわかりました。そしてバースショックの影響が終わろうとしていた2002年にタイへの駐在を命じられました。



私の家族

### 《タイ勤務 2002～08年》

タイの会社はタイ経済の悪化から累積損を抱えていました。本社からの経理専門家の応援もあり4年後には累積損をなくし、会社は所得税を払えるようになりました。赤字案件一件一件の原因を明確にし、歯止めをかけることの重要性を学びました。バンコクでは来客が多く、昼も夜も忙しかった7年間です。



社員旅行の記念写真

そして、タイの経済も回復し、会社も黒字化できて私は後輩にバトンタッチして帰国しました。送別会では社員の一人一人が、私と一緒に写った写真とコメントを書いた分厚いアルバムをもらいました。数年後にタイ時代に育てた社員と会議で会ったさい「問題が起きたときには丹羽さんだったらどうするかと考えています」と言われ、人を育てる幸せを感じました。タイから帰国し、あとは60歳の定年まで本社勤務と思っていたら、今度はインドの駐在員事務所への勤務を命ぜられました。

### 《インド時代 2011～16年プネ、チェンナイ》

インドは日系企業の顧客がなかったのですが、日本

人1人、現地人3人の小さな事務所が西インドのプネに設けられていたのです。赴任してすぐに現地法人になり、駐在員2名が増員されました。プネでは3年間。その後、設立された南インドのチェンナイ製造工場へ異動となりました。



会社の同僚らと

インドはエリート転職が多く、私の会社も現地人社長が辞めてしまい、私が引き継ぐことになりました。現地の人たちは「俺の話を聞け」スタイルが目立ち、日本式会議ができず苦勞しました。それに、中央政府よりも地方政府が強い国です。インドの紙幣には15の地方言語で金額が表記され、地方都市の名称が英国時代の呼び名から地方語に変わっているのがそれを示しています。

チェンナイでは2015年に五十年に一度という大洪水を経験しました。携帯電話が3日間使えず部下と連絡が取れなくて往生しました。

また、インドは経済発展に伴うインフラの整備が追いついていません。電力供給の不足です。メンテナンス日といって停電の日があり、連絡もなく停電することがありました。

\*

各地駐在の間に韓台中、ベトナム、ドイツなどにも出張しました。現在、ジャカルタでは新東工業が日本から納入した機械設備のメンテ、部品販売する現地法人の責任者をしています。

シンガポールを除きずっと単身赴任。留守宅の妻とは今や友達感覚となりラインで連絡を取り合っています。便利な時代になったものです。長期に亘って私を支えてくれた妻には、心底感謝しています。私、今年まだ65歳。先を見つめ「好奇心を持って生き続けたい」という心境です。

## 社会人生活 15 年を経て

伊勢崎 昭弘 (2003 年卒)



Indonesia Tanjung Priok Port 向け岸壁コンテナクレーン

「南十字星」に寄稿するのは今回が 2 回目となります。つい先日寄稿したばかりとと思っていましたが、前回は 2007 年春号でしたので既に 10 年以上の月日が流れていたのですね。当時と同じ会社の同じ部署で当時と同じ様に東南アジアを中心に港湾コンテナクレーンの営業をしています。あの頃と変わった事があるとすれば、経験も積んで任される責任も大きくなり、そして現地側と密着した営業活動を展開すべく現地入りする頻度が更に増えた事くらいでしょうか。かつてとは異なり航空券も安くなって、買い方と時期にもよりますが、東京と Jakarta は 4-5 万円程度で往復できてしまうので、尚更頻繁に現地往訪する事が容易になっています。むしろ機内で作業している間に PC や携帯端末の電源が無くならない様にエコノミークラスでもしっかり電源が装備されている飛行機を選ぶ事の重要性が増していますが、ゆっくり航空券を探している暇も無いので時々痛い目に遭う事になります。

市場が活況な事もあり Vietnam へ行く機会がとても多い日々です。当時から現地語を習得したいと思いつつ、難易度の高い言語という事と自分の怠慢さが災いして全く身に付いていません。Vietnam からそのまま Indonesia へ移動すると言語的なストレスも一気に無くなり、1 ルピアでも多く運賃をもぎ取ってやろうと鼻息の荒いタクシー運転手を適当にかわしながら空港からホテルへ向かっていると何か安心する部分すらあります(これも Grab 等の登場で体験できなくなりつつありますが)。前回寄稿時から変わった事をもう 1 つ挙げるとすれば、ようやく Indonesia での仕事が増えてきた事でしょうか。Indonesia も新政権になってから海運を含めたインフラ整備が本格化し、当社も自分が長年失敗を続け

てきた Indonesia に於いてもようやく案件が受注できる様になり、2013 年以降 Jakarta の TanjungPriokPort や Surabaya の TanjungPerakPort に多数のクレーンを納入してきました、現在も TanjungPriokPort に加え、Medan の BelawanPort でも複数の案件を受注している為、毎月 Padang 料理を満喫しています。(これもインターネットと携帯電話の発達で、Indonesia にいても他の仕事ができる様になってしまい、毎日各 30 分程度の昼食と夕食が出張中の唯一の楽しみです)。また会社としても 2017 年 8 月、Batam 島に新工場を設立し、自分もその設立の為に当時駐在していた Singapore から足繁く Batam 島へフェリーで通っていました。今後も更に Indonesia での活動を拡大すべく、Indonesia で仕事を受注し、そのクレーンを Batam 島で製作して納入したいものです。



Vietnam Ho Chi Minh City 向けヤードトランスファークレーン

話は変わりますが、去年は自分も在籍していた母校(西東京・東海大菅生高)の野球部が夏の甲子園準決勝まで勝ち進み、準決勝は昼食時間を延長して Vietnam/HaiPhong の建設現場近くの地元食堂でインターネットにて応援していました。母校はまだ歴史の浅い高校で、自分の代が 13 期生、在学中の 1996 年夏と 1997 年春にそれぞれ甲子園出場を果たしましたが、どちらもそれが初出場でした。その後も何度か甲子園出場を果たしましたがなかなか勝ち進めず、2016 年までは 3 年連続西東京大会決勝戦敗退という結果でした。2017 年夏は甲子園準決勝で敗退してしまいましたが、彼らが甲子園で戦う姿を観ていると、自分がまだ高校生だった頃を思い出し、あの頃は本当に毎日死にもの狂いで練習に明け暮れていたものだなあ、と懐かしくなりました。社会人になり時々徹夜で仕事しても余り苦にならないのは、当時の日々の方がよほど厳しかった事に他ならず、今となっては本当に貴重な経験だったと改めて感

じています。

私生活の中で大きな変化は、現在は既に日本へ帰国していますが、2015年春から2017年春までの約3年間、Singaporeに駐在した事でしょうか、但し業務の都合でほぼ毎週VietnamかIndonesiaへ出張していたので個人的にはSingapore駐在員だったという自覚が余りありません。世界屈指の規模を誇るコンテナターミナルを有するSingaporeに於いて、まさにそのコンテナターミナルの真裏に住まいを構えて生活した事は色々な意味で刺激的でした。2004年に初めてSingaporeの客先と会話をした時は、客先が話すSinglishが全く理解できず苦労しましたが、今となってはむしろ心地良いものにすら感じます（いまだにハリウッド映画の英語は全く理解できませんが）。



Singapore 駐在終了間近に往訪した West Papua の Raja Ampat 3

時々通勤電車の中や帰国するフライトの中で、ふと仕事の手を休め、これまでの自分の人生を振り返るとつくづく家族の為に何もしてやれていない男だなあ、と言う事を痛感します。開き直れば自分は元々コンテナクレーンを売る為に生まれてきた訳ではないし、1つの会社人生に固執する事無く色々な事に挑戦する事も必要なのではないか、また仮にこのまま続けて定年を迎えた時に自分のサラリーマン人生を振り返ってどう思うのだろうか、等といった事を考えるのです。まだ自分が学生だった頃や社会人に成りたての頃にバックパックを背負って世界中を旅していた頃、旅先で会う欧米人の中には転職を機に自分の人生を見つめ直す、と言って旅行していたトラベラーが多くいた事を思い出します。欧米人はもっと若い頃に人生設計を真剣に考えて、適宜それを修正しながら生きているのだなあ、と言う印象を受けました。一方で当時の自分は目先の事しか考えておらず、夜は酒を飲んで楽しく帰ればそれで良い、と言ったものでした（今も大して変わりませんが）。

振り返れば自分の就職活動もいい加減なもので、2002年春に Universitas Indonesia への留学を終えて帰国し、東京の実家で数日過ごした後、さあ就職活動をするぞと思いついてリクナビに登録した頃にはほとんどの企業が募集を締め切っていました。まだ募集が終わっていない企業を中心に、できれば海外とも仕事をしている企業に就職したいと少ない選択肢を模索した訳です。その様な中、現在勤めている企業は当時既に募集は終了していたのですが、ダメ元で人事部へ直接電子メールを送信し、無理やり試験と面接にこぎ着けました、試してみるものです。就職後、当時の人事担当者から「今だから言うけど君が就職面接で着ていたスーツはリクルートスーツじゃなかったよね」と笑われたものです。

就職して15年が経ち、当時は海外で仕事をしたいと切望していた事が割と早い時期に達成され、今となっては日本にいても東南アジアにいても何が海外と考える様な事は無くなり、むしろ如何に仕事をこなしていくかの方が常に頭の中にあり、時々余裕ができるとせっかくIndonesiaやVietnamを往訪する機会があるのに全くその国の事に関心を持っていない事を残念に思ったりします。かつては空港バス・DAMRIやMetro Mini/Kopajaと言った路線バスの車窓から（窓ガラスが無い事も多々ありますが）じっくり見つけていたJakartaの街並みも最近は見ると余裕が無くなり、時々外を見てここにこんな建物が建ったのか、と驚く事があります。またゆっくりとその国の文化や街並みを堪能したいと思いつつ、一方でこのまま日本企業で必死になって働くのも悪くないな、と思う日々です。

時が経つのは早いもので、これまでとはとにかく案件を受注する為に全力を注ぎましたが、これからはそれに加えて管理職側の業務もこなしていく事になります。これまで以上にもっと多角的な視野を持って世の中を見て行かなければ、最近の中国メーカーとの価格競争を考慮すると10年後に生き残っていないかも知れません。そうした思いを持ってまたIndonesiaという国と向き合っていきたいと考えています。

## 中西龍雄先生を偲んで

岸田 勝昭 (1967年卒)



外大卒業後の私は、3つの会社で、20代からやりがいのある国際ビジネスを経験させて頂きました。海外に通算13年駐在、海外出張先約45カ国という経験でした。

### 《学生時代 1963～1967年》

スカルノ大統領の親PKI路線、1965年9月30日クーデター後の失脚、1968年3月スハルト大統領就任までインドネシアの政治・経済の混乱期でした。

1966年は総合商社からインドネシア語指定の求人が来ない最悪の年でした。中西龍雄主任教授の推薦状で、損保業界2位の大正海上火災保険（その後三井海上に社名変更、現三井住友海上）の試験を受け合格。

### 《大正海上時代 1967～1971年》

輸出入貨物の海上保険部門配属。

1969年、中西先生から、「外大研究室に帰らないか」という予想だにしない突然の要請。更に1971年夏先生から、「日商岩井（現双日）が、即戦力のインドネシア語が出来る実務経験者を求めているので、受けてみないか」というスカウト話。迷いましたが、大阪でインドネシア語⇄日本語両方の筆記試験、数日後東京で重役面接を受け、合格。後日中西先生に「インドネシア語の試験にはまいりました。」と言うと、「いや実は、人事部から頼まれて、僕がテスト問題を作成したんだ。」とすました顔。

### 《総合商社日商岩井時代 1971～1991年》

1971年9月、大阪本社鉄鋼貿易部配属。タンゲラ

ン（Wire Works Indonesia）の主担当に任命され、2ヵ月後、28歳独身でジャカルタ事務所着任。IWWIは筆頭株主日商岩井、華人資本PT Respati Djaja、東大阪の春日鋼業の3社合弁会社。1972年会社を順調に立ち上げました。

1973年、大阪本社出張時、中西先生のご自宅を訪問して原書を寄贈。その時先生は、執筆途中の辞書の膨大な原稿を見せて下さいました。

1974年1月14～17日田中角栄首相ジャカルタ公式訪問時、反日暴動Malapetaka Limabelas Januariが発生。

1974年秋、大阪鉄鋼貿易部に転勤。インドネシアの貧しい若者達をIWWIで採用して一から育成し、貢献できたことに喜びを感じました。PT IWWIはその後も順調に業容拡大し、今では、東南アジアNo.1のWire Makerに成長、自動車産業等の発展に貢献しています。

その後1974～1991年の間、大阪、ロンドン、サンフランシスコ、ロサンゼルス支店勤務。

1991年大阪に帰国後、明石海峡大橋で有名な神鋼鋼線工業（東証二部上場会社）に出向、2年後、トップの要請で役員として転籍。63歳で退職。

振り返れば、在職中多くの国の異文化に接して見聞を深めることが出来ました。

中西先生は、1994年8月に他界されました。種々お世話下さった先生に感謝申し上げますと共に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

退職後は2010年大学院修了。中小企業海外展開支援、外大グリークラブOB合唱団、学会活動等を楽しんでいます。今後の夢は、シニア世代にインドネシア語を教えることです。現在74歳。まだまだ休めません。



1972年PTIWWIの同僚・川崎汽船からの来訪者らと  
[左端が筆者]

## 編集後記

会報「南十字星(Bintang Pari)」は当時の会長であった山口寛氏と岩谷英志氏の発案により、機関誌として2005年秋に創刊されたものです。とりわけ岩谷英志氏は現役時代の経験を生かし、この素晴らしい会報誌の制作に注力されて来られました。大阪外国語大学の各語学科の中にあっても、自慢できる機関誌でもありました。両氏のご尽力に対して、心からお礼申し上げます。

その後、会長を引き継がれた宮崎衛夫氏が編集をも担当され、第25号まで継続発行されてきた会報誌は、氏の体調不良により2019年には一時発行休止になりました。

この伝統のある素晴らしい会報「南十字星」が廃刊になるのは忍びがたく、継続発行を図るために筆者が編集を引き受ける事になりました。

もとより、経験が少ない一・同窓生ではありますが、この伝統のある会の運営に世話人の一人として多少でもお役に立つことが出来ればこの上もない喜びであります。

現在は、デジタル化・ペーパーレス化の時代ですが、紙資料もそれなりの良さがあります。

全25号の中で、何れの記事も保存版に残したい興味深いものばかりですが、全てを載せるには量的にも、経費的にも無理があり、主として各号の冒頭記事を中心に選択し72頁の小冊子にいたしました。記事の選択に関しては独断過ぎるとの批判を受けるかも知れませんが、事情をご理解いただきたくお願い申し上げます。

南十字星会の運営は同窓生の協賛金により賄われています。今後とも会の趣旨にご賛同頂き、温かいご支援・ご協力を切にお願い申し上げます。

(この保存版は主として協賛者と現役学生、大学関係者への配布を予定しています。)

編集人 小原 一浩

### 「南十字星」平成保存版

発行 2020年8月1日  
発行者 南十字星会  
(大阪大学外国語学部インドネシア語専攻同窓会)  
[www.bintangpari.jimdofree.com](http://www.bintangpari.jimdofree.com) (南十字星会ホームページ)

事務局 〒589-0007 大阪狭山市池尻中1-28-1 小原方  
TEL 072-366-1113  
E-mail [ohr1210@nike.eonet.ne.jp](mailto:ohr1210@nike.eonet.ne.jp)

編集協力 吉崎企画



インドネシア 首都 ジャカルタ市